

# 九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

—XXX—

粕屋郡粕屋町所在辻畑遺跡・西尾山古墳群の調査

1 9 7 9

福岡県教育委員会

# 九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— XXX —

粕屋郡粕屋町所在辻畑遺跡・西尾山古墳群の調査

昭和54年

福岡県教育委員会

## 序

ここに報告する辻畑遺跡・西尾山古墳群は、当委員会が昭和44年度から昭和50年度にかけて現地調査を実施した九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財のうちの、粕屋郡粕屋町に所在する遺跡であります。

報告書の刊行が諸般の事情により遅延したことをお詫びするとともに、本書が活用されますことを願ってやみません。

昭和54年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 浦山太郎

## 例 言

1. この報告書は、九州縦貫自動車道建設によって破壊される予定の遺跡について行った事前調査のうち、昭和47年度に発掘した粕屋郡粕屋町に所在する辻畑遺跡、西尾山古墳群についての調査報告書である。
2. 発掘調査は、日本道路公団の委託を受けて福岡県教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆分担は、下記のとおりである。

I・II・IV	福岡県教育庁管理部文化課	石山 勲
III	〃	馬田 弘 稔
IV (石器)	〃	平ノ内 幸 治
4. 掲載図の実測・製図の分担は、挿図目次に示すとおりである。掲載写真のうち、現場写真は石山が撮影し、遺物写真は九州歴史資料館の石丸 洋氏の指導の下に、岡紀久夫・前田次郎・平島美代子の三君がこれにあたった。
5. 整理作業は、岩瀬正信氏の指導の下に九州歴史資料館の整理作業員がこれを行い、出土品は同館にて保管している。
6. 本書に用いた高さは、海拔高である。方位は、真北についてはT・N.の記号を付しており、付さないものは全て磁北である。
7. 本書の編集は、IIIを馬田が、他を石山が行った。

# 目 次

	頁
I 調査の経過 .....	1
II 位置と環境 .....	2
III 辻畑遺跡の調査	
1. はじめに .....	7
2. 立 地 .....	7
3. 遺 構 .....	7
(1) 土 壙 墓 .....	7
(2) 甕 棺 墓 .....	10
4. 遺 物 .....	19
5. 小 結 .....	28
IV 西尾山古墳群の調査	
1. 立地と古墳の配列 .....	31
2. 第1号墳	
(1) 墳 丘 .....	32
(2) 石 室 .....	33
(3) 遺物出土状態 .....	33
(4) 出土遺物 .....	34

(5) 裾部の遺構群	37
3. 第2号墳	
(1) 墳丘	38
(2) 石室	39
(3) 裾部の遺構群	41
4. 第3号墳	
(1) 墳丘	45
(2) 内部主体	46
(3) 出土遺物	48
5. 小 結	49

## 目 次

- PL. 1-1 上方蒲田遺跡を望む（南西から）
  - 2 辻畑遺跡北半部甕棺墓出土状態（北から）
- PL. 2-1 辻畑遺跡全景（南西から）
  - 2 辻畑遺跡南半部遺構出土状態（北から）
- PL. 3-1 辻畑遺跡1号甕棺墓・7号土壙墓出土状態（北から）
  - 2 辻畑遺跡1号甕棺墓組み合わせ状態（西から）
- PL. 4-1 辻畑遺跡7号土壙墓、1・2号甕棺墓出土状態（北から）
  - 2 辻畑遺跡2号甕棺墓出土状態（北から）
- PL. 5-1 辻畑遺跡3号甕棺墓出土状態（北から）
  - 2 辻畑遺跡5号甕棺墓出土状態（北から）
- PL. 6-1 辻畑遺跡7号甕棺墓出土状態（西から）
  - 2 辻畑遺跡9号甕棺墓・5号土壙墓出土状態から（北西から）
- PL. 7-1 辻畑遺跡6号甕棺墓出土状態（北西から）
  - 2 辻畑遺跡8号甕棺墓出土状態（北から）
- PL. 8-1 辻畑遺跡10号甕棺墓出土状態（北西から）
  - 2 辻畑遺跡11号甕棺墓出土状態（北から）
- PL. 9-1 辻畑遺跡12号甕棺墓出土状態（南東から）
  - 2 辻畑遺跡13号甕棺墓出土状態（南西から）
- PL. 10-1 辻畑遺跡14号甕棺墓出土状態（東から）
  - 2 辻畑遺跡3号土壙墓出土状態（北東から）
- PL. 11-1 辻畑遺跡1号土壙墓出土状態（北西から）
  - 2 辻畑遺跡2号土壙墓出土状態（北から）
- PL. 12-1 辻畑遺跡3号土壙墓出土状態（北西から）
  - 2 辻畑遺跡4・9号土壙墓（右）出土状態（北西から）
- PL. 13 辻畑遺跡出土甕棺
- PL. 14 辻畑遺跡出土甕棺
- PL. 15-1 西尾山古墳群遠景
  - 2 西尾山第1～3号墳全景
- PL. 16-1 西尾山第1号墳墳丘全景
  - 2 西尾山第1号墳墳丘東側周溝と埴輪列
- PL. 17-1 西尾山第1号墳埴輪樹立状態1
  - 2 西尾山第1号墳埴輪樹立状態2
- PL. 18-1 西尾山第1号墳石室の礎床
  - 2 西尾山第1号墳石室鉄器出土状態
- PL. 19-1 西尾山第2号墳墳丘全景
  - 2 西尾山第1・2号墳全景

- P L. 20—1 西尾山第2号墳周溝  
 2 西尾山第2号墳石室遺存状態  
 3 西尾山第2号墳石室石材据付痕
- P L. 21—1 西尾山第3号墳墳丘全景  
 2 西尾山第3号墳周溝と墓壙
- P L. 22—1 西尾山第3号墳の地山成形成態と墳丘下の遺構群  
 2 西尾山第3号墳墳丘下第1号遺構
- P L. 23—1 西尾山第3号墳墳丘下第1号遺構掘出土状態  
 2 西尾山第3号墳墳丘下第2号遺構
- P L. 24—1 西尾山第1号墳裾部第1号遺構  
 2 西尾山第1号墳裾部第2号遺構
- P L. 25—1 西尾山第1号墳裾部第3号遺構  
 2 西尾山第2号墳裾部第1号遺構（右）と第2号遺構（左）
- P L. 26—1 西尾山第2号墳裾部第1号遺構  
 2 西尾山第2号墳裾部第4号遺構
- P L. 27—1 西尾山第2号墳裾部第5号遺構  
 2 西尾山第2号墳裾部第5号遺構（東から）
- P L. 28—1 西尾山第2号墳裾部第6号遺構  
 2 西尾山第2号墳裾部第8号遺構
- P L. 29 西尾山古墳群出土遺物

## 挿 図 目 次

- Fig. 1 辻畑遺跡・西尾山古墳群周辺地形図（原図道路公団，製図平田）……………2
- Fig. 2 辻畑遺跡・西尾山古墳群周辺遺跡分布図（作成石山）……………折り込み
- Fig. 3 辻畑遺跡遺構配置図（実測石山・馬田，製図馬田）……………折り込み
- Fig. 4 辻畑遺跡1～4号土壙墓実測図（実測石山・天本・馬田・盛，製図馬田）……………8
- Fig. 5 辻畑遺跡5・7号土壙墓実測図（実測製図馬田）……………9
- Fig. 6 辻畑遺跡1号壙墓実測図（実測製図馬田）……………11
- Fig. 7 辻畑遺跡2・3・5号壙墓実測図（実測馬田・中島・盛，製図馬田）……………13
- Fig. 8 辻畑遺跡6～8号，12・13号壙墓実測図（実測酒井・馬田・副島・内田，製図馬田）……………15
- Fig. 9 辻畑遺跡9～11号壙墓実測図（実測天本・馬田・盛，製図馬田）……………16
- Fig. 10 辻畑遺跡14号壙墓実測図（実測酒井，製図馬田）……………17
- Fig. 11 辻畑遺跡1号壙墓実測図（実測馬田・中野，製図馬田）……………21
- Fig. 12 辻畑遺跡2号壙墓下壙実測図（実測中野，製図馬田）……………22
- Fig. 13 辻畑遺跡3号壙墓実測図（実測馬田・中野，製図馬田）……………23



Fig. 14	辻畑遺跡6号甕棺南・北甕, 14号甕棺下甕実測図 (実測馬田・中野, 製図馬田) .....	24
Fig. 15	辻畑遺跡7号甕棺下甕実測図 (実測中野, 製図馬田) .....	25
Fig. 16	辻畑遺跡11号甕棺実測図 (実測馬田・中野, 製図馬田) .....	26
Fig. 17	辻畑遺跡8号甕棺下甕, 10号甕棺下甕, 12・13号甕棺実測図 (実測馬田・中野, 製図馬田) .....	27
Fig. 18	西尾山第1～3号墳墳丘測量図 (実測石山・馬田・小田・三好・稲永・岡部, 製図平田) 折り込み	
Fig. 19	西尾山第1・2号墳地山整形面測量図 (実測石山・馬田・岡部, 製図平田) .....	31
Fig. 20	西尾山第1号墳墳丘東半断面図 (実測馬田, 製図石山) .....	32
Fig. 21	西尾山第1号墳石室実測図 (実測馬田, 製図石山) .....	33
Fig. 22	西尾山第1号墳石室出土鉄器実測図 (実測・製図石山) .....	34
Fig. 23	西尾山第1号墳出土埴輪実測図 (実測・製図石山) .....	35
Fig. 24	西尾山古墳群出土土器実測図 (実測・製図石山) .....	35
Fig. 25	西尾山古墳群出土石器実測図 (実測・製図平ノ内) .....	36
Fig. 26	西尾山第1号墳裾部第1号遺構実測図 (実測井上・岡部, 製図石山) .....	37
Fig. 27	西尾山第1号墳裾部第2号遺構実測図 (実測石山・馬田, 製図石山) .....	37
Fig. 28	西尾山第1号墳裾部第3号遺構実測図 (実測・製図石山) .....	38
Fig. 29	西尾山第2号墳墳丘断面図 (実測石山・高橋・児玉・岡部・井上, 製図石山) .....	38・39
Fig. 30	西尾山第2号墳石室実測図 (実測石山・岡部, 製図石山) .....	40
Fig. 31	西尾山第2号墳裾部第1号遺構実測図 (実測岡部, 製図石山) .....	41
Fig. 32	西尾山第2号墳裾部第2号遺構実測図 (実測・製図石山) .....	41
Fig. 33	西尾山第2号墳裾部第3号遺構実測図 (実測・製図石山) .....	42
Fig. 34	西尾山第2号墳裾部第4号遺構実測図 (実測盛, 製図石山) .....	42
Fig. 35	西尾山第2号墳裾部第5号遺構実測図 (実測岡部, 製図石山) .....	43
Fig. 36	西尾山第2号墳裾部第6号遺構実測図 (実測岡部, 製図石山) .....	44
Fig. 37	西尾山第2号墳裾部第7号遺構実測図 (実測・製図石山) .....	44
Fig. 38	西尾山第2号墳裾部第8号遺構実測図 (実測・製図石山) .....	44
Fig. 39	西尾山第3号墳地山整形面測量図 (実測石山・岡部, 製図石山) .....	45
Fig. 40	西尾山第3号墳墳丘断面図 (実測石山・馬田・岡部, 製図石山) .....	46
Fig. 41	西尾山第3号墳墳丘下第1号遺構実測図 (実測石山・岡部, 製図石山) .....	47
Fig. 42	西尾山第3号墳墳丘下第2号遺構実測図 (実測岡部, 製図石山) .....	47
Fig. 43	西尾山第3号墳墳丘下第1号遺構出土鉄器実測図 (実測・製図石山) .....	48

## 表 目 次

Tab. 1	辻畑遺跡出土土壌墓一覧表 (作成馬田) .....	10
Tab. 2	辻畑遺跡出土甕棺墓一覧表 (作成馬田) .....	18

# I 調査の経過

昭和47年度は前後の46・48両年度とともに九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財についての発掘調査がピークに達した時期にあたり、調査件数は51ヶ所、延調査面積は52,512㎡に及んだ。同年6月1日祇園山古墳の第V次調査を了えた筆者らは、6月15日～8月17日までの間粕屋郡須恵町・乙植木古墳群を調査し、引き続いて8月26日から西尾山古墳群の調査に着手した。折しも、平野をはさんで向側のかけ塚山周辺では、福岡 I. C. 建設予定地についての発掘調査が福岡市教育委員会によって行われていた。西尾山古墳群の調査の目途がついた10月1日から、辻畑遺跡の調査に着手し、11月14日に両遺跡の調査を終了した。

この間の経緯については、〈九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 IV〉に詳しいのでそれに拠りたい。

両遺跡についての調査組織は、以下のとおりである。

## 総括

教育長	森田 実 (前任)	教育長	浦山 太郎
教育次長	西村 太郎 (前任)	教育次長	友野 隆
文化課課長	森 英俊 (前任)	文化課課長	藤井 功
文化課課長補佐	管 隆 (前任)		今井 岩雄 (前任)
	平井 元治 (前任)		川崎 隆夫 (前任)
	武久 耕作		
文化課課長技術補佐	松岡 史		
文化課調査第2係長	栗原 和彦		
文化課技術主査	薮久 嗣郎 (前任)		

## 庶務

文化課庶務係長	姫野 博 (前任)	文化課庶務係長	前田 栄一 (前任)
〃	大淵 幸夫		
文化課庶務係主事	小川浩一郎 (前任)	文化課庶務係主事	瀧 竜二 (前任)
〃	山本 文和 (前任)	〃	大神 新

調査

文化課調査係技師 石山 勲  
調査補助員 内田 始 馬田 弘稔 岡部真知夫 副島 源司  
三好 政文 稲永 真一 井上 説男

Ⅱ 位置と環境



Fig. 1 辻畑遺跡・西尾山古墳群周辺地形図 (1/3,000)

辻畑遺跡・西尾山古墳群はともに粕屋郡粕屋町に所在する。同町内での縦貫道関係の調査対象遺跡は上記と駕輿丁遺跡（第3地点）の計3遺跡に限られる。

辻畑遺跡（追加46地点） 遺跡No. 280087

粕屋郡粕屋町大字大隈字辻畑

西尾山古墳群（追加43～45地点） 遺跡No. 280088～280090

粕屋郡粕屋町大字大隈字西尾

注 遺跡番号は、福岡県遺跡等分布地図（粕屋郡編）による

粕屋の地名は、筑紫国造磐井の乱後その子葛子が贖罪のために「糟屋の屯倉」を献上したとの日本書紀の記載により著名である。

辻畑遺跡と西尾山古墳群とは、この粕屋平野の北半部に位置する。これより東にもなお平野は続くが、現飯塚市へ通ずる八木山峠に向って漸次狭小となる。粕屋郡は、北部の宗像郡と接する裏粕屋（現古賀町・新宮町）と、月隈丘陵を挟んで福岡平野と接する表粕屋（現粕屋町・久山町・篠栗町・宇美町・志免町）とに二分される。

粕屋平野の縁辺部の丘陵上には箱式石棺（墓）が営まれる場合が多く、これらのうちには弥生時代終末期の墳墓あるいは発生期古墳が含まれている。

一方、粕屋平野からは北方に外れるが三角縁天・王・日・月・獣文帯二神二獣鏡を出土した福岡市東区・香椎ヶ丘古墳（註1）、ならびに平野北縁部の丘陵上に立地する三角縁天王日月・獣文帯三神三獣鏡・盤竜鏡各1面を出土した同・天神森古墳（Fig. 2-5, 註2）の両墳は、詳細は不明ながらも最古グループの畿内型古墳とされている。さらに、ごく最近、東区で新たな三角縁神獣鏡の出土が伝えられており、いずれも粘土槨あるいは木棺直葬を想定させる内部主体の構造上の共通性は、これら3墳の年代が極めて接近していることを思わせる。県内での三角縁神獣鏡出土古墳（鏡片副葬を除く）は、上記3例を含めて以下の10基+1に過ぎない。

1. 石塚山古墳（京都郡苅田町——註3）
2. 忠隈古墳（嘉穂郡穂波町——註4）
3. 香椎ヶ丘古墳（福岡市東区——註1）
4. 天神森古墳（福岡市東区——註2）
5. 御陵古墳（大野城市——註5）
6. 原口古墳（筑紫野市——註6）
7. 若八幡宮古墳（福岡市西区——註7）
8. 神蔵古墳（甘木市——註8）
9. ?（久留米市・高良大社蔵——註9）

以上 舶載鏡

## 10. 銚子塚古墳 (糸島郡二丈町——註10)

以上 仿製鏡

## 11. ? (福岡市東区)

県内他地域での点在傾向と比較して、粕屋平野北縁部への集中度は異例といわざるを得ない。しかも、天神森古墳出土鏡は、小林行雄博士の型式分類によれば「39, 天王日月・獣文帯三神三獣鏡(単像式)K<sub>1</sub> 型式」に相当し(註11)その6枚目の同範鏡であり、京都府・椿井大塚山古墳出土の一面を除けば、他の5面はいずれも九州の古墳(天神森, 石塚山(2面), 原口, 大分県宇佐市・赤塚)に集中するという。

しかるに、上記3墳に後続する大型古墳は、平野の南縁それも奥まった東端に出現する。宇美町・光正寺前方後円墳(註12), 志免町・七夕池古墳(註13)がそれである。5世紀前半以降の当該地域では大型古墳は特に知られていず、6世紀代と思われる宇美町・炭焼第3号墳(前方後円墳)にしても全長30m前後に過ぎない(註14)。

すなわち、5世紀前半以降の当該地域では、他地域と比較して特に顕著といえる程の古墳文化の展開は認められない(註15)。これは、福岡平野への進出を果して南下・東進するための拠点を確保した畿内政権にとって、当該地域が前代ほどに必要ではなくなったという外的条件の変化に主たる要因が求められよう。

以下に、周辺に遺跡の二三についてその概要を摘記する。なお、粕屋平野全体については、下条信行氏の好著(註2文献)があるので、それに拠りたい。

## 3. 平塚古墳(粕屋郡粕屋町大隈——註15)

台地, もと17~18mの円墳か, 大型箱式石棺1. 箱式石棺

## 4. 名子道古墳群(福岡市東区土井——註16)

尾根上, 小型竪穴式石室1, 列石をめぐらす箱式石棺1, 消滅

## 6. 部木八幡宮古墳群(福岡市東区部木——註17)

低台地, 前方後方墳1, 円墳5

## 7. 蒲田遺跡(福岡市東区蒲田——註18)

低台地・丘陵, 旧石器, 甕棺墓・土壙墓, 古墳時代住居跡, 中世溝等, 消滅

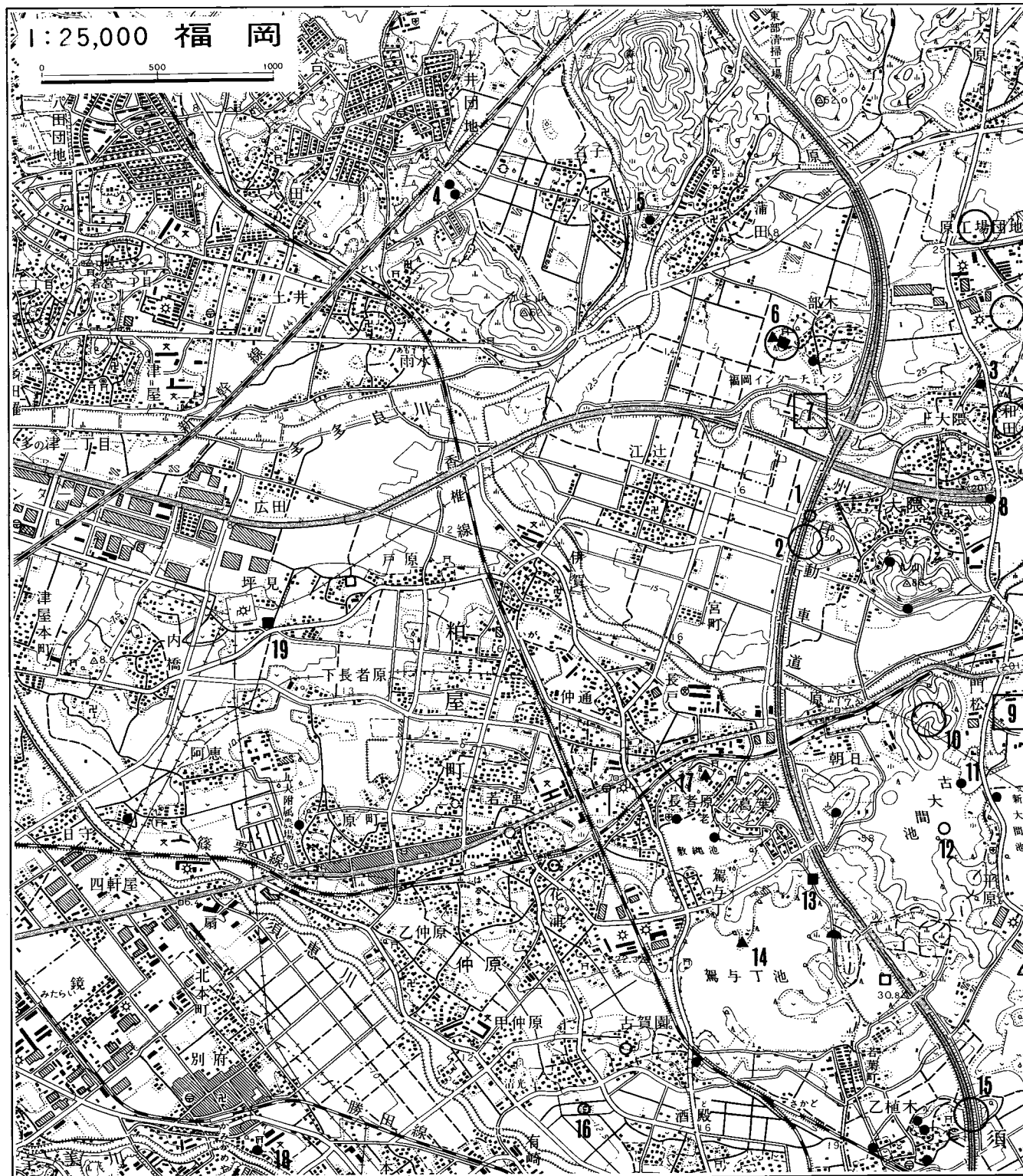
## 8. 脇田山古墳(粕屋郡粕屋町大隈——註19)

尾根上, 円墳, 横穴式石室, 消滅

## 9. 井山遺跡(粕屋郡粕屋町大隈)

丘陵上, 貯蔵穴・住居跡・甕棺墓・円墳38, 消滅

## 10. 焼地山古墳群(粕屋郡粕屋町大隈)



1. 辻畑遺跡
2. 西尾山古墳群
3. 平塚古墳
4. 名子道古墳群
5. 天神森古墳
6. 部木八幡宮古墳群
7. 蒲田遺跡
8. 脇田山古墳
9. 井山遺跡
10. 焼地山古墳群
11. 古大間池玉造遺跡
12. 古大間池遺跡
13. 駕輿丁廃寺
14. 駕輿丁池遺跡
15. 乙植木古墳群
16. 酒殿遺跡
17. 岩崎神社境内甕棺群
18. 亀山古墳
19. 坪見廃寺

Fig. 2 辻畑遺跡・西尾山古墳群周辺遺跡分布図 (1/25,000)

尾根上, 円墳 8, 前方後円墳? 1, 古式?

11. 古大間池玉造遺跡 (粕屋郡粕屋町大隈)  
緩斜面, 滑石製未製品, 工房跡, 昭和50年国学院大学調査
12. 古大間池遺跡 (粕屋郡粕屋町大隈——註20)  
緩斜面, 円形住居跡 6・方形住居跡 3, 板状鉄斧
13. 駕輿丁廃寺 (粕屋郡粕屋町仲原——註21)  
台地, 心礎・礎石, 瓦・墨書土器他
14. 駕輿丁池遺跡 (粕屋郡粕屋町仲原)  
台地, 散布地, 旧石器~須恵器
15. 乙植木古墳群 (粕屋郡須恵町乙植木——註22)  
尾根上, 円墳 7, 竪穴系横口式石室 2, うち 4 基は消滅
16. 酒殿遺跡 (粕屋郡粕屋町酒殿——註23)  
台地, 甕棺 7, 箱式石棺 4
17. 岩崎神社境内甕棺墓群 (粕屋郡粕屋町長者原)  
台地,
18. 亀山古墳 (粕屋郡志免町別府——註24)  
丘頂, 大型箱式石棺
19. 坪見廃寺 (粕屋郡粕屋町内橋)  
微高地, 礎石, 瓦

- 註
- 1 小田富士雄 「九州」『日本の考古学 IV』 1965年による
  - 2 下条信行 「考古学・粕屋平野」〈福岡市立歴史資料館研究報告 1〉1977年
  - 3 島田寅次郎 「石塚山の古墳」〈福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告 1〉1924
  - 4 児島隆人・藤田 等 「忠隈古墳群」『嘉穂地方史 先史編』1973年
  - 5 小林行雄 「古墳時代の研究」 1964年の巻末解説による
  - 6 島田寅次郎 「異例の古墳」〈福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書 10〉 1935年
  - 7 福岡県教育委員会編 「若八幡宮古墳」〈今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 2〉  
1971年 所収
  - 8 木下 修編 「神蔵古墳」〈甘木市文化財調査報告 3〉 1977年
  - 9 古賀 寿氏は、久留米市・祇園山古墳出土とされている。「高良大社蔵三角縁神獸鏡と祇園山古墳」  
〈筑後地区郷土研究 2〉 1971年
  - 10 小林行雄・有光教一・森貞次郎 「一貴山銚子塚古墳の調査報告書」〈福岡県史蹟名勝天然記念物調査  
報告書 16 史蹟の部〉 1952年

- 11 「三角縁神獸鏡の研究」 〈京都大学文学部紀要 13〉 1971年, 註2文献による。
- 12 上野精志 『七夕池古墳』
- 13 註12文献中に実測図が掲載されている
- 14 昭和52年度に実施した分布調査により, 平ノ内幸治氏等が発見。遺跡No. 300048。
- 15 森 貞次郎「福岡県粕屋町上大隈平塚古墳」〈九州考古学 11・12〉 1961年
- 16 福岡市教育委員会編『名子道遺跡』 1972年
- 17 福岡市教育委員会編『福岡市埋蔵文化財遺跡地名表 総集編』〈福岡市埋蔵文化財調査報告 9〉
- 18 福岡市教育委員会編『蒲田遺跡』〈福岡市埋蔵文化財調査報告 33〉 1975年
- 19 福岡県教育委員会編『佐谷・脇田山古墳』 1974年
- 20 福岡県教育委員会編『古大間池遺跡』 1977年
- 21 福岡県教育委員会編「賀興丁遺跡」〈九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 I〉  
1970年 所収
- 22 福岡県教育委員会編『粕屋郡須恵町所在遺跡群の調査』〈九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財  
調査報告 X〉 1977年
- 23 渡辺正気氏調査
- 24 島田寅次郎「亀山神社の石棺」〈福岡県史跡名勝天然記念物調査報告 1〉 1924年



### Ⅲ 辻畑遺跡の調査

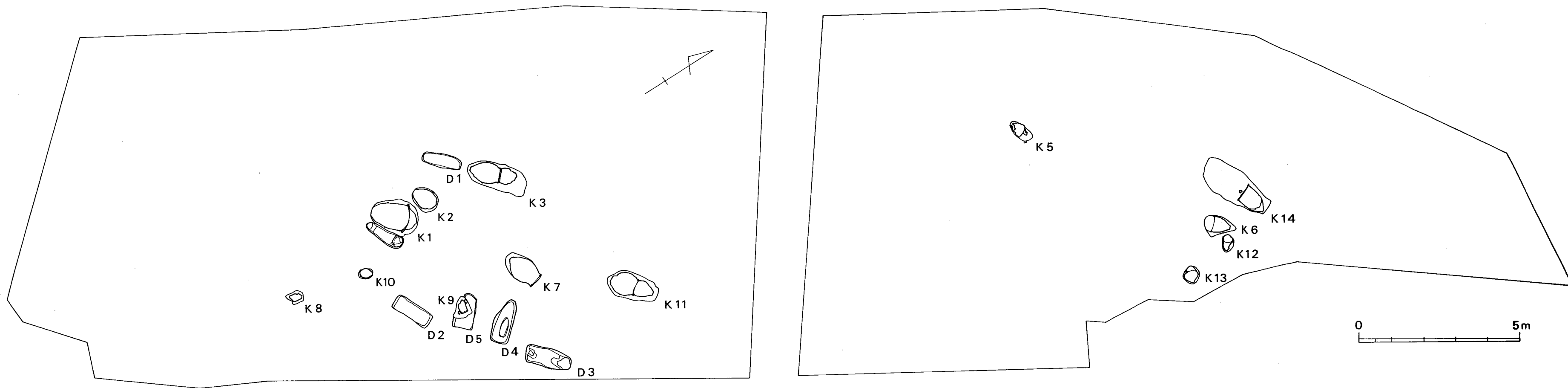


Fig. 3 辻畑遺跡遺構配置図 (1/100)

## 1. はじめに

辻畑遺跡は、事前の路線内分布調査では未登録であったが、西尾山古墳群の調査中に発見されたものである。遺跡の現状は畑地で、隣接する北東部には住宅が建てられている。この生活排水が畑地隅に流されており、ここで若干の甕棺破片を見出した。周囲の表土を除去した結果、13号甕棺墓が出土し、順次土壙墓も検出されて、弥生時代の墓地群の調査となった。

## 2. 立地

標高53.0mの西尾山は急峻な地形で、南側と西側の山麓ですぐに同15m前後の水田地帯に開かれている。また北側は、同20m前後の畑地・集落地区となっている山麓低丘陵に続く。遺跡はこの丘陵西緩斜面に立地し、標高は遺構北半部の13号甕棺で16.8m、南半部の8号甕棺墓で17.8m、中央部で17.5mである。しかし、土壙墓・甕棺墓共に遺存状態が悪く、耕作土約30cm下はすぐに粘質地山層となっており、相当の削平を受けている。

## 3. 遺構

### (5) 土壙墓 (Tab. 1)

#### 1号土壙墓 (PL. 11, Fig. 4)

遺跡南半部の西端で検出された。主軸は略南西方向にとり、南西部床面の方が北東部よりも7cm高く、特に頭部位は肩部位よりも若干高くなる。このような床面の高低差と平面プランからして、木棺墓の可能性は少ないであろう。

3 遺構

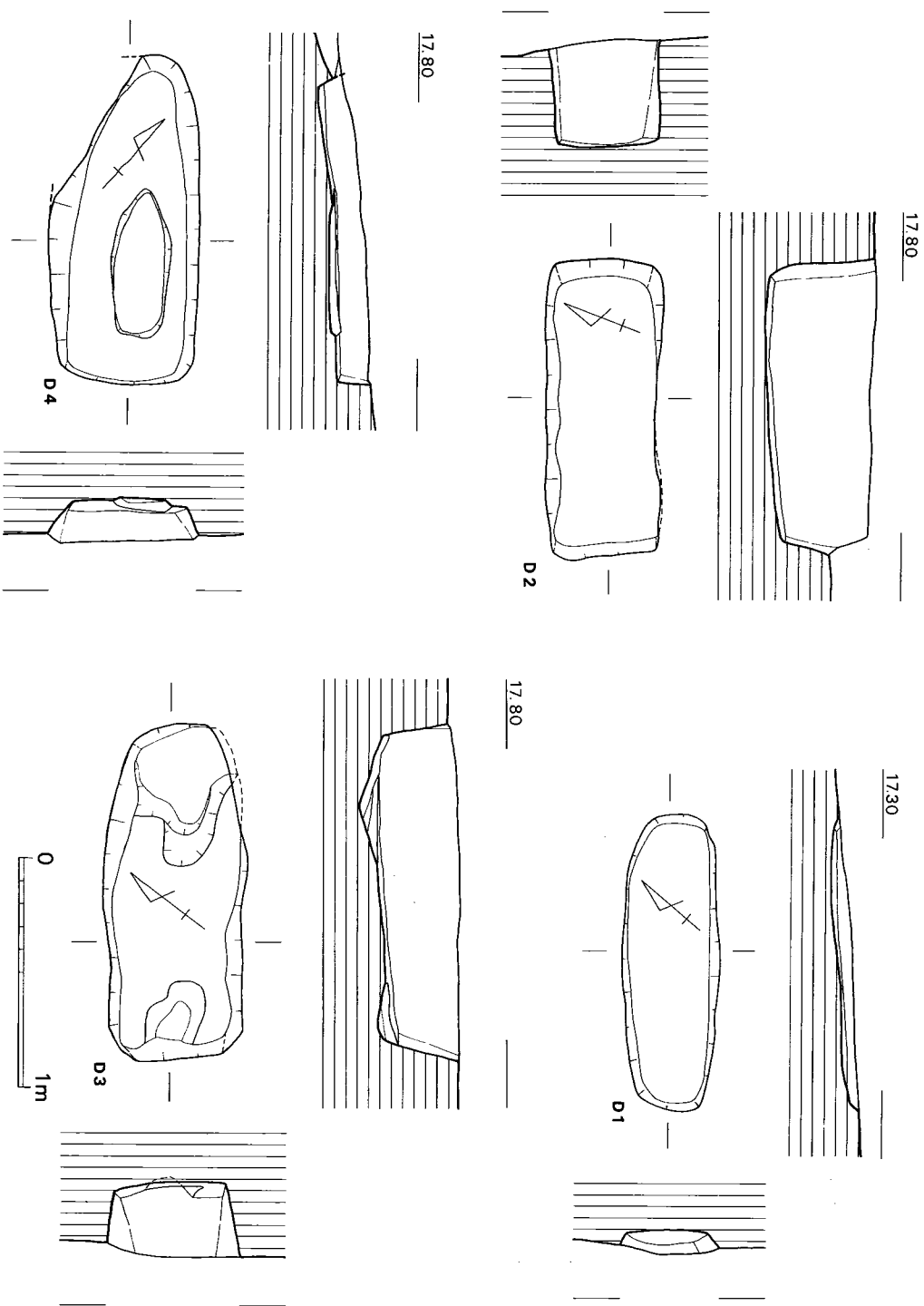


Fig. 4 辻畑遺跡1~4号土壌基実測図 (1/30)

**2号土壙墓** (PL. 11, Fig. 4)

遺跡南半部の東側で検出された。主軸は略西方向にとり、西部床面の方が7cm高く、漸次東に低くなる。平面プランは長方形、床横断面は水平に近いが、木棺の痕跡は検出されなかった。

**3号土壙墓** (PL. 10・12, Fig. 4)

遺跡南半部の東端で検出された。主軸は略南西方向にとり、漸次北東に低くなる。なお、頭部位と足部位は一段低くしている。このような床面の掘り込みと平面プランからして、木棺墓ではないであろう。

**4号土壙墓** (PL. 12, Fig. 4)

遺跡南半部の東側で検出された。主軸は略南東方向にとり、南東部床面の方が9cm高く、漸次北西に低くなる。床面は頭部位を一段高く残し、背部位に隅丸長方形プランの深い掘り込みを設け、足部位を傾斜させるなど、埋葬姿勢に合致させている。

**5号土壙墓** (PL. 6, Fig. 5)

遺跡南半部の東側で検出された。主軸は略南東方向にとり、床面中央部から南東部にかけて若干低くなっているが、ほぼ水平に近い。また4号土壙墓に近接し、両者共に短側壁は南東部が北西部よりも幅広に掘られているので、南東部を頭部位としてよいであろう。なお、9号甕棺墓に切られているが、甕棺墓壙西壁は土壙墓の長側壁に一致しており、甕棺体主軸も略南東方向である。

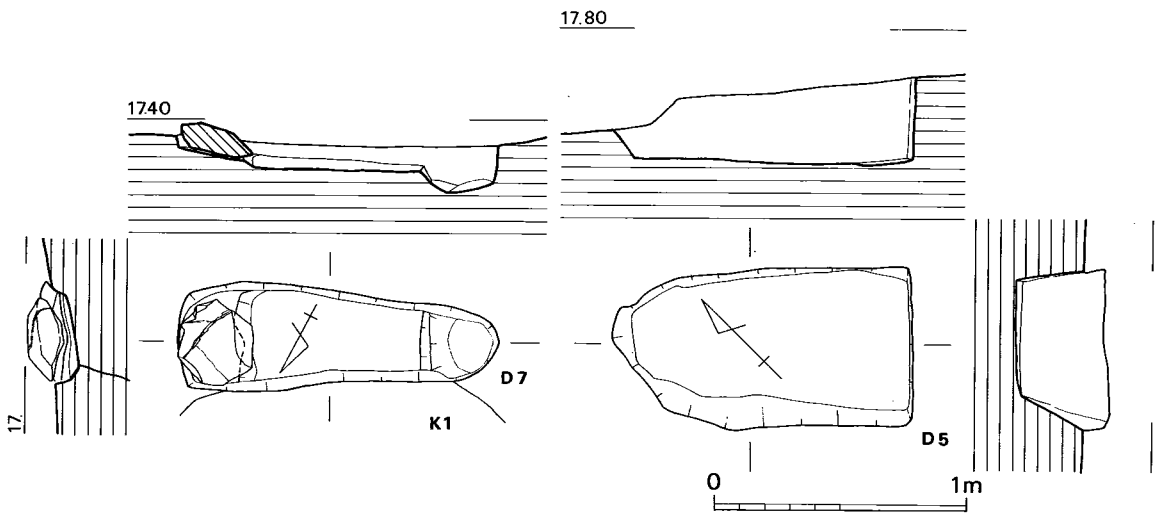


Fig. 5 辻畑遺跡5・7号土壙墓実測図 (1/30)

## 6号土壌 (PL. 2)

遺跡南半部の西端(PL. 2-1の左下隅)で検出された。長軸を北西方向にとり、床面は北西部から南東部に傾斜する。長さ約200cm、幅約40cm前後の隅丸長方形の土壌である。

## 7号土壌墓 (PL. 3・4, Fig. 5)

遺跡南半部の南側で検出された。主軸は略北東方向にとり、床面は北東部が7~8cm高い平坦面をなし、南西部は逆に掘り込まれている。なお、頭部位で床面にほぼ密着して、34×30cm、厚さ10cmの自然石が出土したが、枕石とみるよりも、木蓋上方に置かれた墓石とする方がよいであろう。

土 壌 墓 番 号	主軸方向	(上面) (床面) (深さ)	平 面 形 状	備 考
1 号	N-130°-W	129×40 122×36 5	隅丸長方形	
2 号	N-111°-W	128×47 115×41 44	(隅丸長方形)	
3 号	N-128°-W	145×58 132×51 35	隅丸長方形	頭部位に床面下4cmの掘り込み 足部位に床面下8cmの掘り込み
4 号	N-139°-E	142×64 133×48 11	(不整)隅丸長方形	背部位に床面下2.5cmの掘り込み
5 号	N-134°-E	156×62 154×53 35	長 方 形	9号甕棺に切られる
7 号	N-62°-E	125×43 122×36 12	隅丸(不整)長方形	頭部位が段状をなす K1を切る 足部位に床面下8cmの掘り込み

(単位cm)

Tab. 1 辻畑遺跡出土土壌墓一覧表

## (2) 甕棺墓 (Tab. 2)

## 1号甕棺墓 (PL. 3・4, Fig. 6)

遺跡南半部の南端で検出された。墓壇床面は、棺体にほぼ一致した緩傾斜をなし、下甕を挿入した横穴の一部が遺存する。組合せ部は密着しており、粘土で目張りする。この粘土は、棺体をセットした後の目張りである為に、断面図にみるように床面にまでは至らず、上甕の胴部下面にのみ認められ、その安定を確保している。下甕床面部に穿孔があるが、その破片は検出しなかった。墓壇東壁は7号土壌墓に切られている。棺体主軸は略北東方向にとる。

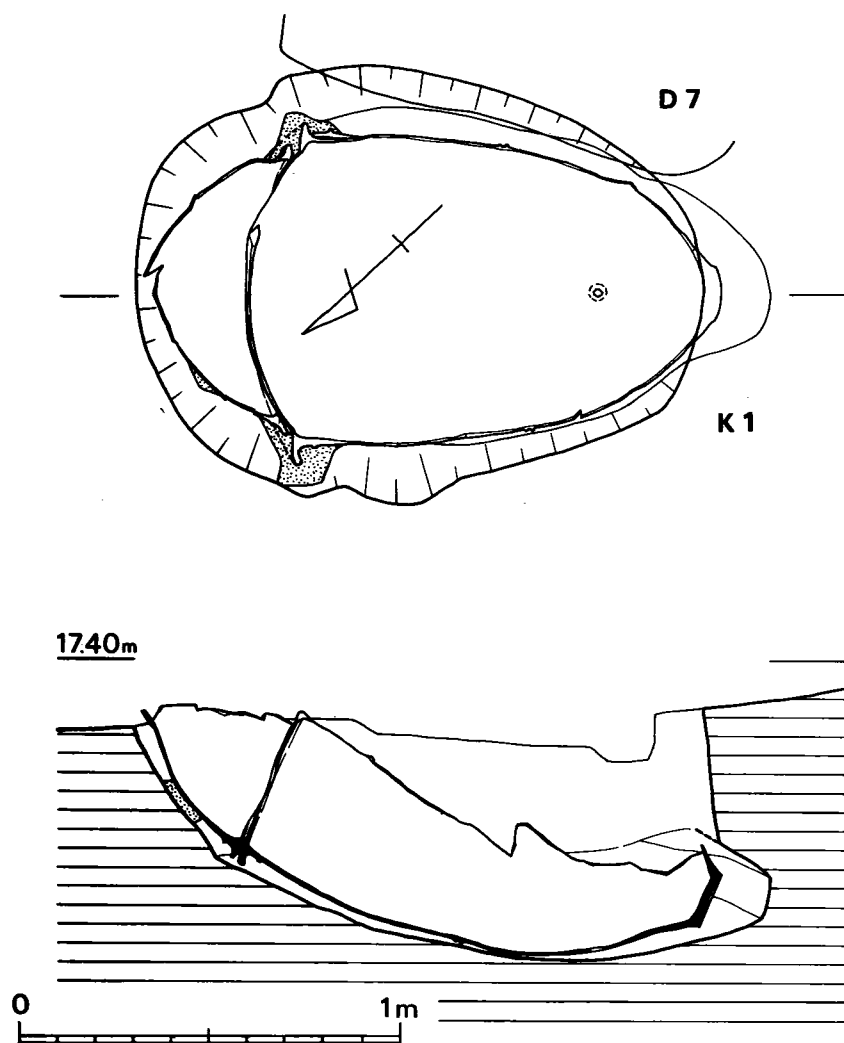


Fig. 6 辻畑遺跡1号甕棺墓実測図 (1/20)

**2号甕棺墓** (PL. 4, Fig. 7)

遺跡南半部の南側で検出された。1号甕棺墓に近接し、現状で両者の墓壙は15cmの間隙がある。しかし棺の大半を削平されていることからして、埋葬時には両者は切り合った可能性が強い。図上の棺上部に接した破片は別個体のもので、墓壙断面図からも組合せ式であろう。下甕床面はほぼ水平に近く、下半部を横穴内に挿入する。下甕の口縁部は一部分のみが出土し、復原で胴部と接合したが、口径45.7cm・口縁内径32.8cmと小さい。出土時の粘土の位置から、下甕の口縁部を打ち欠いたとも考えられる。棺体主軸は略東方向にとる。

**3号甕棺墓** (PL. 5, Fig. 7)

遺跡南半部の西端で検出された。削平が著しいが墓壇の現状平面プランは隅丸長方形、床面プランは組合せ部に向って緩傾斜するが、接口部は一段深い壙を掘る。目張り粘土は床面まで一周する。棺体の埋置傾斜は水平に近い。棺体主軸は略北東方向にとる。

**5号甕棺墓** (PL. 5, Fig. 7)

遺跡北半部の南端で、他と離れて検出された。器壁が薄手で細片に割れ、接合して復原することができなかった。墓壇床面は舟底状をなし、上甕を呑み込ませる。棺体主軸方向は略北東方向にとる。

**6号甕棺墓** (PL. 7, Fig. 8)

遺跡北半部の12号甕棺墓の近くで検出された。一応作成された出土状態の`平面図および断面図,, に従って説明するが、墓壇プランは、平面・断面共に棺体にほぼ合致させて掘り込まれている。`下甕,, となっている鉢形土器の方を見事な横穴内壁面に密着させるまでに挿入され、`上甕,, となっている甕形土器を呑口に近く接しさせている。組合せ部には粘土を一周させる。

このような`墓壇の掘り方および棺体の上・下甕のセット関係,, は特異な例であり、甕形土器を下甕として横穴内に挿入するのが通有で、この時上甕が下甕よりも下位に埋置されることは例外ではない。従って土器の実測図および一覧表では、上甕を鉢形土器とした。

**7号甕棺墓** (PL. 6, Fig. 8)

遺跡南半部の中央で検出された。棺上半部は土圧で割れたまま墓壇床面に密着した状態で、突帯は地山に埋没していた。底部近くでは二段掘りをなし、平坦面を有す。しかし、口縁部では断面図に示すように、壁面にほぼ密着させている。特に遺構北半部地区は、黄褐色粘質地山層に黒色粘質地山層が褶曲して走行しており、掘り方は明瞭に判断できる。このことからして底部先端の平坦面は、横穴内に掘ったものではなく、当初から広い墓壇を西側に設け、口縁部を壁面に後から押しあてて、目張り粘土に代用したものと考えられる。また、木蓋の痕跡は検出されなかったので、断面からして、上甕が消失した可能性もあろう。なお平面図で破線で示した突帯部は、発掘時にその突帯が検出されなかった部分で、埋葬時から欠失していたものである。棺体主軸は略東方向にとる。

**8号甕棺墓** (PL. 7, Fig. 8)

遺跡南半部の南端で検出された。下甕は口縁部を欠失し、若干離れて上甕と考えられる別個体の頸部片が出土した。棺体主軸は略南西方向にとる。



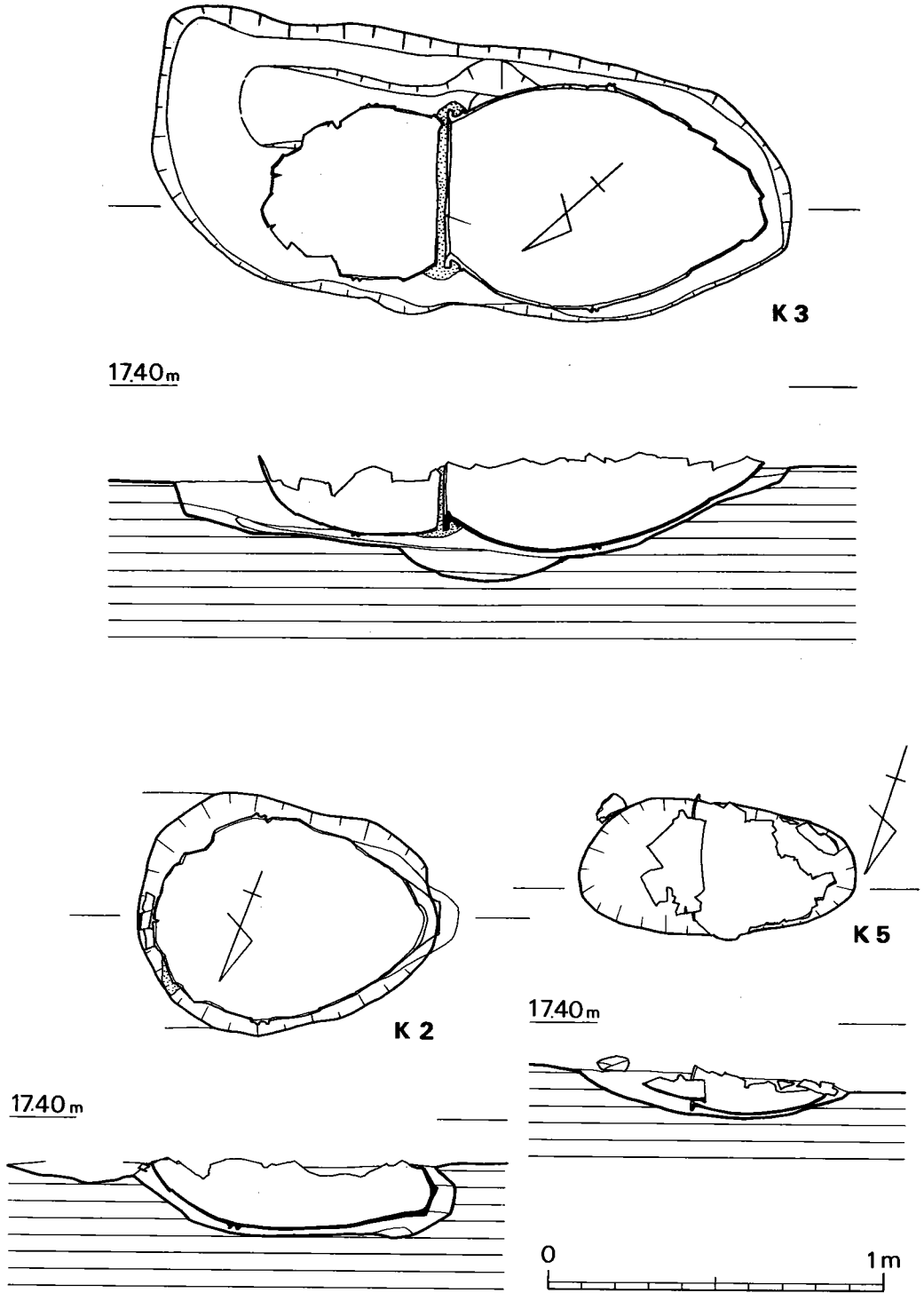


Fig. 7 辻畑遺跡 2・3・5号塚棺墓実測図 (1/20)

**9号甕棺墓** (PL. 6, Fig. 9)

遺跡南半部の東側で検出された。5号土壙墓を切っており、南壁は土壙墓壁に一致する。厚い目張り粘土の状態から、組合せ式であろう。棺体主軸は略東方向にとる。

**10号甕棺墓** (PL. 8, Fig. 9)

遺跡南半部の東側で検出された。墓壙床面はほぼ水平で、横穴内に下甕の大半を挿入している。底部を床面に、口縁部を壁斜面にすえて安定させている。目張り粘土の広がりから、組合せ式であろう。棺体主軸は略南西方向にとる。

**11号甕棺墓** (PL. 8, Fig. 9)

遺跡南半部の北端で検出された。墓壙床面は舟底状をなし、棺体の埋置傾斜は水平に近いが、下甕の横穴は削平されたものと考えられる。目張り粘土は組合せ下部までは至らない。上甕は口縁下の突帯下部からの打ち欠きで、下甕の口縁内端近くに接口させる。棺体主軸は略北東方向にとる。

**12号甕棺墓** (PL. 9, Fig. 8)

遺跡北半部の6号甕棺墓近くで検出された。墓壙床面は棺体にほぼ一致した傾斜をなす。下甕は開口壺形土器の頸部を打ち欠くが、その径が上甕の口縁内径に近いので、組合せは接口に似た覆口式となる。目張り粘土は上甕の床面部にも認められるが、棺体床面の組合せ部にまでは至らない。棺体主軸は略南東方向にとる。

**13号甕棺墓** (PL. 9, Fig. 8)

遺跡北半部の東端で検出された。墓壙断面は不明である。下甕は壺形土器の頸部を打ち欠き、鉢形土器で覆う。目張り粘土は認められない。棺体主軸は略北西方向にとる。

**14号甕棺** (PL. 10, Fig. 10)

遺跡北端部の北端で検出された。横穴部は削平され、床面は棺体のカーブにほぼ一致させる。目張り粘土は棺体の上半部に認められるが、口縁部に一部その粘土が存在しない箇所があり、木蓋痕と考えられる。このことと若干残った墓壙プランからして、墓壙は隅丸長方形に大きく掘り、棺体の大半を挿入できる横穴を設けた単棺であろう。なお粘土帯に接して、上面で石英質の石が1個出土した。棺体主軸は略西方向にとる。

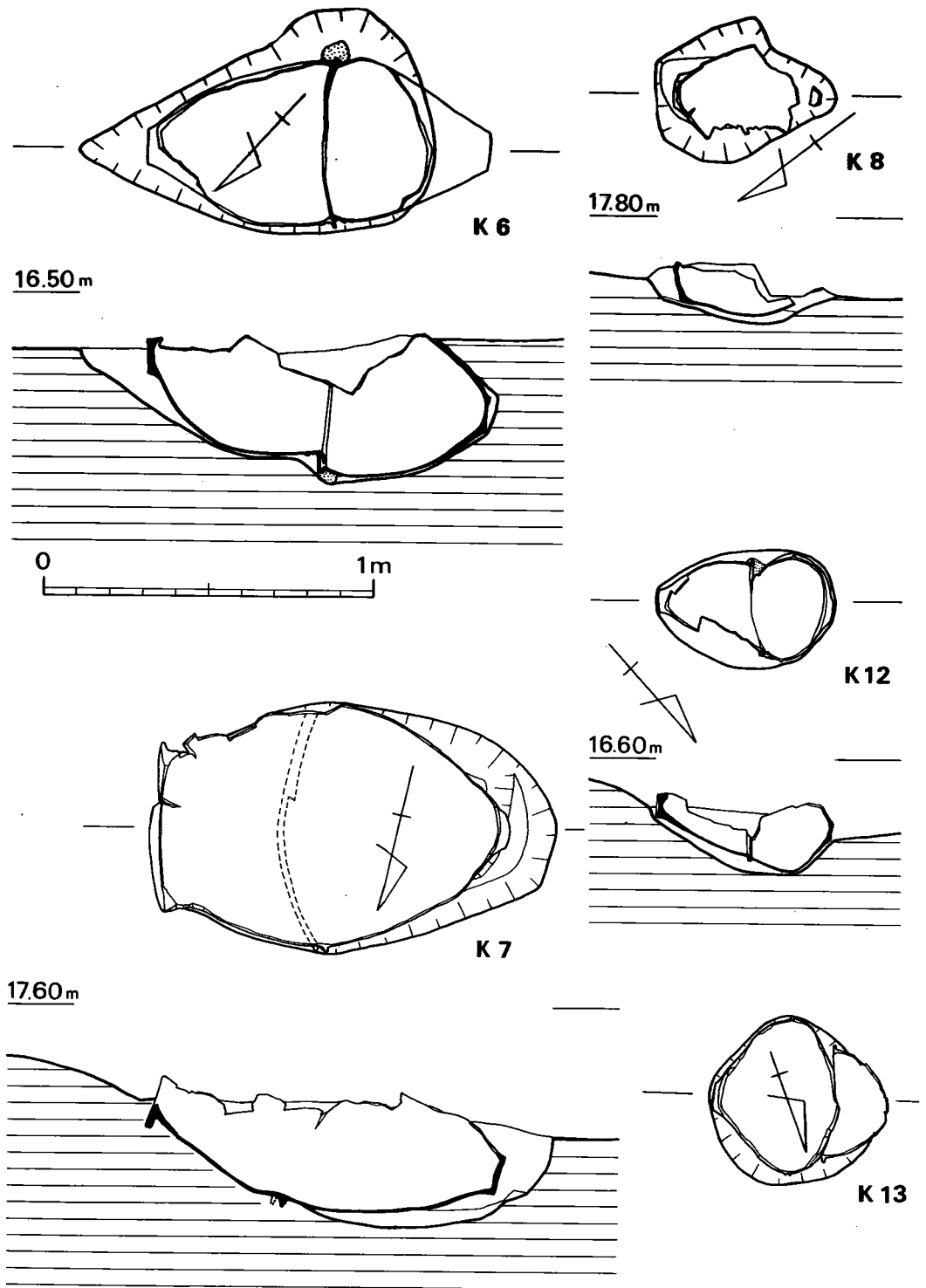
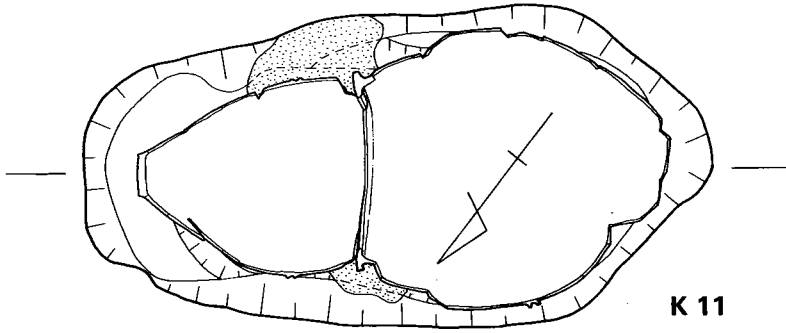
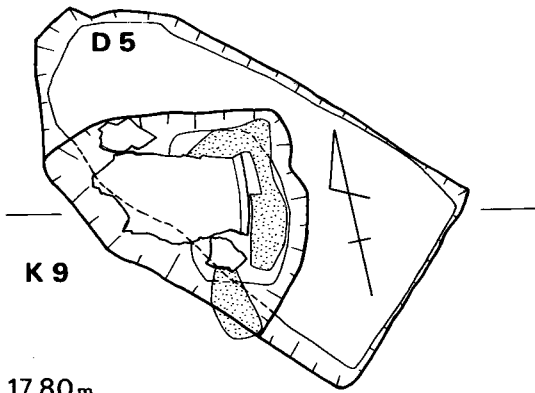
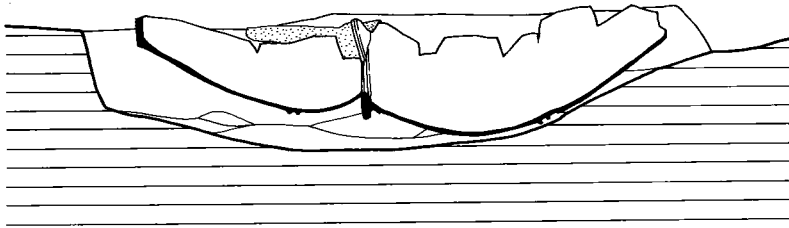


Fig. 8 辻畑遺跡 6～8号, 12・13号甕棺墓実測図 (1/20)

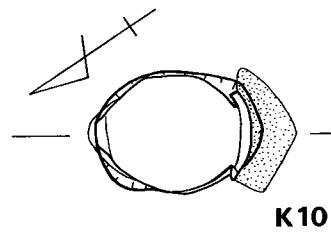
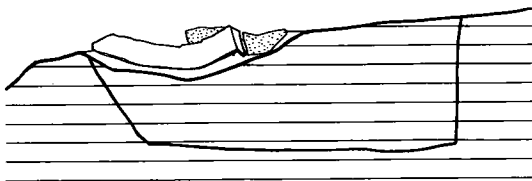


17.40m



K 9

17.80m



K10

17.60m

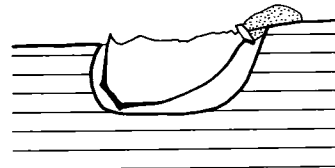


Fig. 9 辻畑遺跡 9～11号甕棺墓実測図 (1/20)

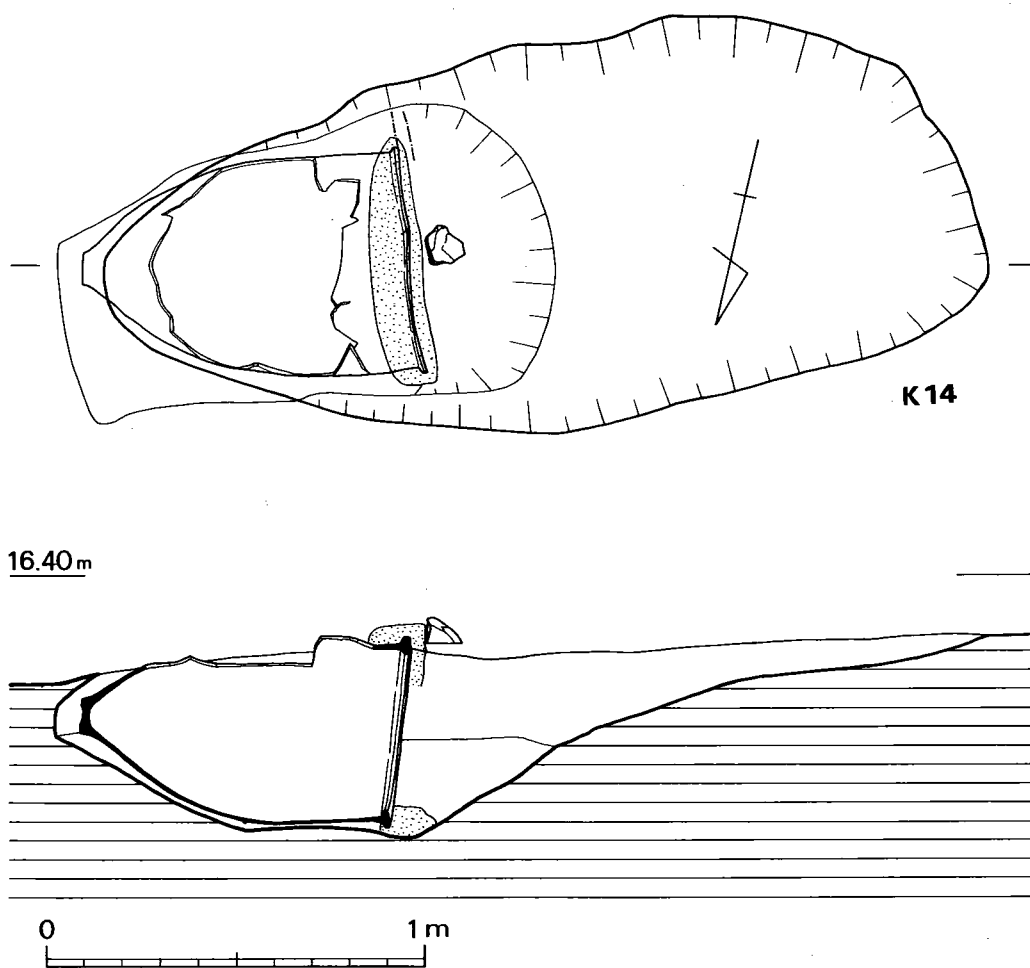


Fig. 10 辻畑遺跡14号甕棺墓実測図 (1/20)

甕 番 号	方 向	傾 斜 (推定)	組合 せ方	上 甕	口 径	口 縁 内 径	胴 部 最大径	底径	器 高	組合せ 高	備 考
				下 甕							
1 号	N- 43°-E	(21°)	接 口	鉢	約89.8	約76.8		欠失	(38.0)	約157.5	
				甕	91.2	75.0	81.8	14.0	119.4		
2 号	N- 70°-E	(25°)	?								
				甕	45.7	32.8	64.1	9.8	88.6		
3 号	N- 42°-E	(2°)	接 口	甕	打 欠	打 欠	68.1	欠失			口縁部打欠き
				甕	60.0	約50.0	71.0	欠失	(98.0)		
4 号 (欠番)											
5 号	N- 72°-E	?	呑 口	鉢							
				甕	約40.0						
6 号	N-133°-W	(9°)	覆 口	南側鉢	51.8	44.9	50.0	12.0	45.0	103.5	
				北側甕	50.6	43.2	51.2	10.5	58.1		
7 号	N- 77°-E	27°	(単 甕)							98.4?	
				甕	72.6	57.2	79.8	13.8	98.4		
8 号	N-142°-E	?	?								
				甕			(41.0)	10.0			
9 号	N-102°-E	?	?								
				甕							
10 号	N-145°-W	?	?								
				甕	(31.0)	(24.0)	30.3	8.3	38.0		
11 号	N- 51°-E	略水平	接 口	甕	打欠き						口縁部打欠き
				甕	(59.6)	(45.8)	(75.0)	欠失			
12 号	N-132°-E	8°	覆 口	甕	(28.4)	(24.0)	約25.0	6.5	約31.0	53.5	頸部打欠き
				壺	打 欠	打欠き	32.8	6.6			
13 号	N- 63°-W	?	覆 口	鉢	(37.0)	(31.6)		欠失		約55.0	頸部打欠き
				壺	打 欠	打 欠	47.8	8.4	34.0		
14 号	N-103°-W	1°	単 甕							82.0	木蓋?
				甕	59.8	50.6	62.3	13.2	82.0		

Tab. 2 辻畑遺跡出土甕棺墓一覧表

(単位cm)

## 4. 遺物 (Tab. 2)

### 1号甕棺 (PL. 13, Fig. 11)

上甕 口縁はT字状をなすが、中位から6mm程内傾し、ヨコナデ。外端部は口唇状を呈す。口縁下に三角状突帯を1条付す。胴部内外は丁寧なナデ。焼成は普通で茶褐色、器周残 $\frac{1}{4}$ の現状で口縁上部に1箇所の黒斑を認める。小さめの砂粒を含む。口径は下甕のそれで復原した。

下甕 口縁はT字状をなすが、12mm程外傾し、上面中位よりも少し内側で若干凹み、外端部は若干口唇状を呈す。口縁部全体に丁寧なヨコナデ。口縁部下に口唇状突帯を1条、胴部中位よりもやや下方にコ字状突帯を2条付す。焼成は普通で茶褐色、略完形の現状で胴部外面の片方にのみ、上部に2箇所、下部に1箇所の黒斑を認める。体部は内外共に風化が著しく、調整等は不明である。器高は119.4cmあり、大形棺でも大きい例である。

### 2号甕棺 (PL. 13, Fig. 12)

上甕 遺構の項で述べたとおり、上甕が組合せられたと考えるが、破片で詳細は不明である。下甕と同様の甕形土器肩部を打欠いて覆口としたものであろう。

下甕 口縁は逆L字に近いT字状をなし、内側で4mm程内傾し、外側で2mm程外傾するが、ほぼ水平である。外端部はヨコナデにより若干凹む。口縁下に三角状突帯を1条、胴部中位よりもやや上方最大径に近い所にコ字状突帯を付す。コ字状突帯は両者共に下方に稜を有し、上方に跳上がる。焼成はやや悪く淡褐色、器周残 $\frac{1}{2}$ 強の現状で胴中部に1箇所の大きな黒斑を認める。大きめの砂粒を含み、内外に風化が著しい。

### 3号甕棺 (PL. 13, Fig. 13)

上甕 口縁部下の突帯から打欠いている。胴部最大径の所にシャープな三角状突帯を2条付す。焼成は普通で褐色、器周残 $\frac{1}{4}$ の現状で打欠き部から突帯下方にかけて、外面に1箇所の大きな黒斑を認める。小さめの砂粒を含む。外面は風化を受けているが、上半部にタタキ痕、下半部に斜方向ハケ目状痕を一部認める。内面はナデを施す。

下甕 口縁は逆L字状をなすが、内側で6mm程内傾し、外側で若干外傾する。外端部は若干口唇状を呈す。口縁下に口唇状突帯を1条、胴部中位よりもやや下方にコ字状突帯を2条付す。焼成は普通で茶褐色、器周残 $\frac{1}{2}$ の現状で胴部外面上半部に2箇所の黒斑を認める。砂粒を含む。内外共に風化が著しい。

### 5号甕棺

上甕 出土状態断面図 (Fig. 7) に示された特徴を述べる。張りの少ない胴部に、平坦なあまり発達しない口縁で鉢形土器に近い。

下甕 同じく、張りの少ない胴部に、内側に稜をもつ甕形土器である。

#### 6号甕棺 (PL. 13, Fig. 14)

南甕 口縁はほぼ直線的に7mm程内傾し、内側にシャープな稜をもつ。口縁部下にシャープな三角状突帯を1条付す。焼成は普通で褐色、略完形の現状で底部外面は黒褐色を呈す。小さめの砂粒を含む。口縁部と突帯部はヨコナデ、他はナデを丁寧に施す。

北甕 口縁は20mm程内傾し稜をもち、丸味をおびて外弯する。端部の上方は稜をもつが、下方は丸味をもつ。口縁下に特異な、薄手のコ字状突帯を1条付す。最大径は胴部上方に位置し、大きい。焼成は普通で褐色、器周残 $\frac{1}{4}$ の現状で胴部外面の中位に1箇所の黒斑を認める。小さめの砂粒を含む。口縁部と突帯部はヨコナデ、他はナデを施す。

#### 7号甕棺 (PL. 14, Fig. 15)

下甕 口縁は逆L字状をなし、内側で4mm程内傾し、外側で15mm程外傾する。口縁下には突帯を付さないが、胴部中位よりもやや上方に突出気味のコ字状突帯を2条付す。しかし上位の突帯は焼成後に剝落したままである。焼成は普通で褐色、器周残 $\frac{1}{2}$ 強の現状で胴外面中位から下半部にかけて、片方にのみ大きな黒斑を認める。内面は風化が著しく、砂粒が露出する。口縁部と突帯部はヨコナデ。外面は胴上半部にナデを施し、下半部にタテ方向ハケ目状痕を認めるが、全体にタタキ痕が明瞭である。

#### 8号甕棺 (Fig. 17)

下甕 口縁は欠失するが、逆L字状口縁をなす甕形土器である。器壁が5mm前後と薄手で細片化し、接合による胴部の径が大きくなってしまった。おそらく最大形は今少し上位にいくと考えられる。焼成は良く褐色、器周残 $\frac{3}{4}$ の現状である。内外共に丁寧なナデを施す。

#### 9号甕棺

下甕 出土状態断面図 (Fig. 9) に示された特徴を述べる。若干跳ね上げ気味の口縁部はく字状をなし、張りのある胴部最大径は上位にある。突帯は付さない。

#### 10号甕棺 (Fig. 17)

下甕 口縁はく字状をなし、24mm程内傾する。胴部最大径は上位にあり、器周残 $\frac{1}{2}$ の現状である。焼成は良く褐色、底部外面のみ黒褐色を呈す。砂粒をあまり含まず、器壁は5mm程で



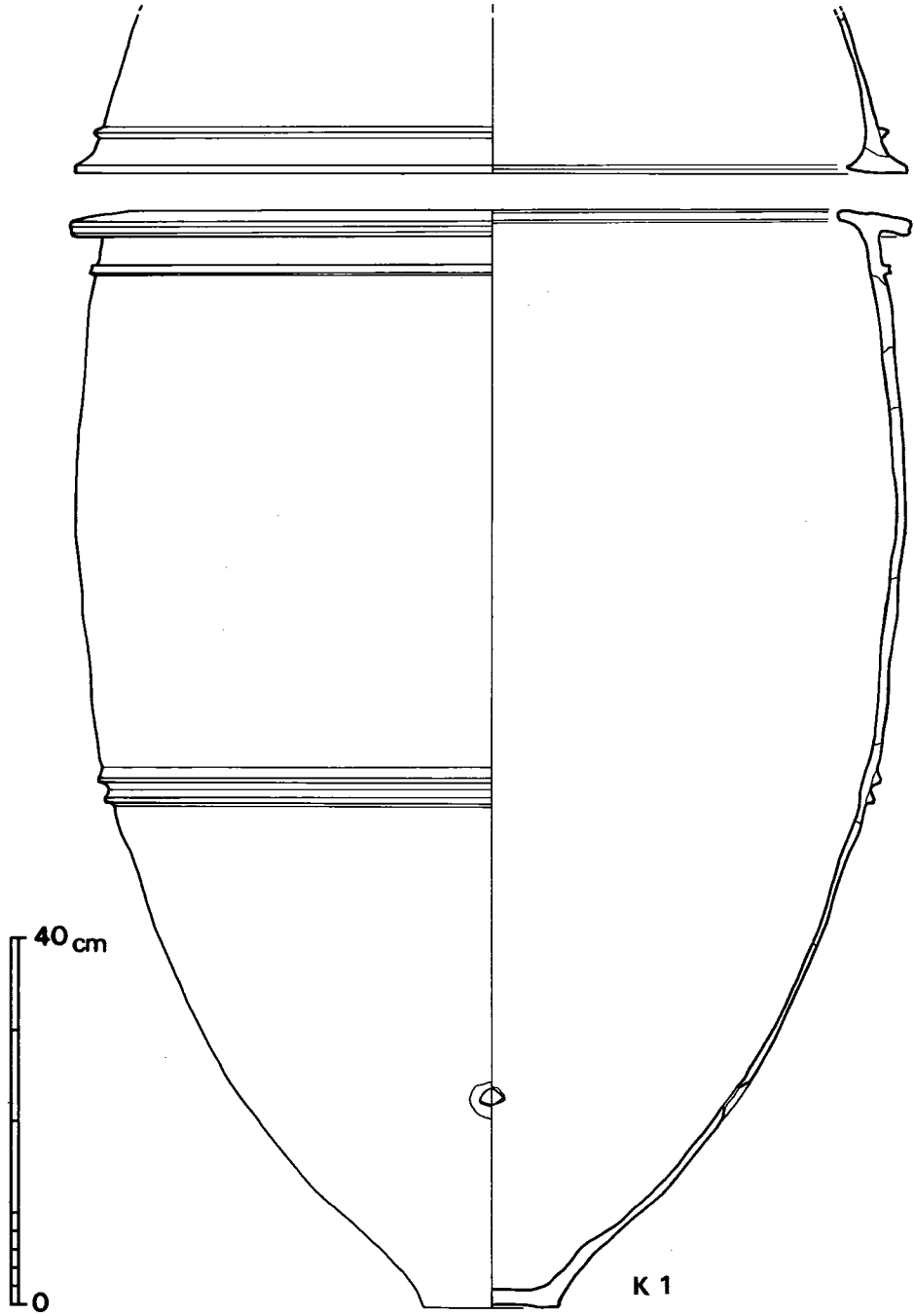


Fig. 11 辻畑遺跡1号甕棺実測図 (1/8)

薄い。口縁部はヨコナデを施す。胴部内外面は丁寧にナデる。底部外面は若干上げ底気味に丁寧にナデる。胴部最下部のみナデ後に、ヨコナデ状に調整したため、特徴的な器形となっている。

### 11号甕棺 (PL. 14, Fig. 16)

上甕 口縁下の突帯下方から打ち欠いているが、下甕同様の器形をなすものであろう。焼成は良く褐色を呈す。砂粒を含み、内面は丁寧にナデ、外面は風化が著しい。

下甕 口縁は逆L字状をなし、4mm程内傾する。外端部はヨコナデにより凹む。口縁下に三角状突帯を1条、胴部中位にコ字状突帯を2条付す。焼成は普通で茶褐色、器周残 $\frac{3}{8}$ の現状で外面の片方にのみ、三角状突帯下方から胴下半部にかけて大きく黒褐色を呈する。砂粒はやや少なく、胴部外面にナデの一部が認められるが、他は風化が著しい。

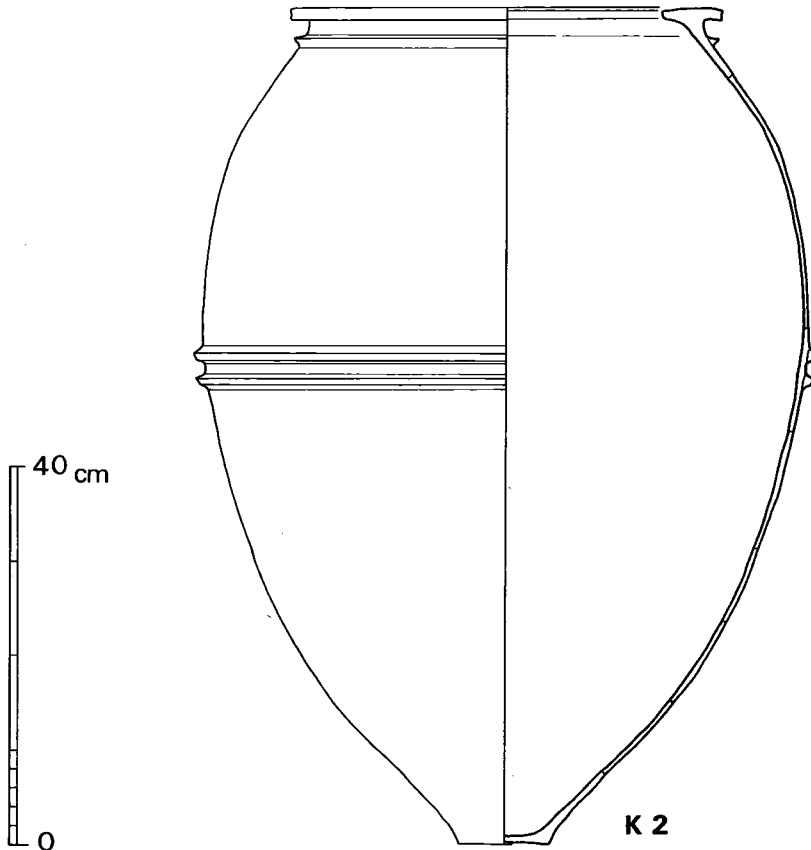


Fig. 12 辻畑遺跡2号甕棺下甕実測図 (1/8)

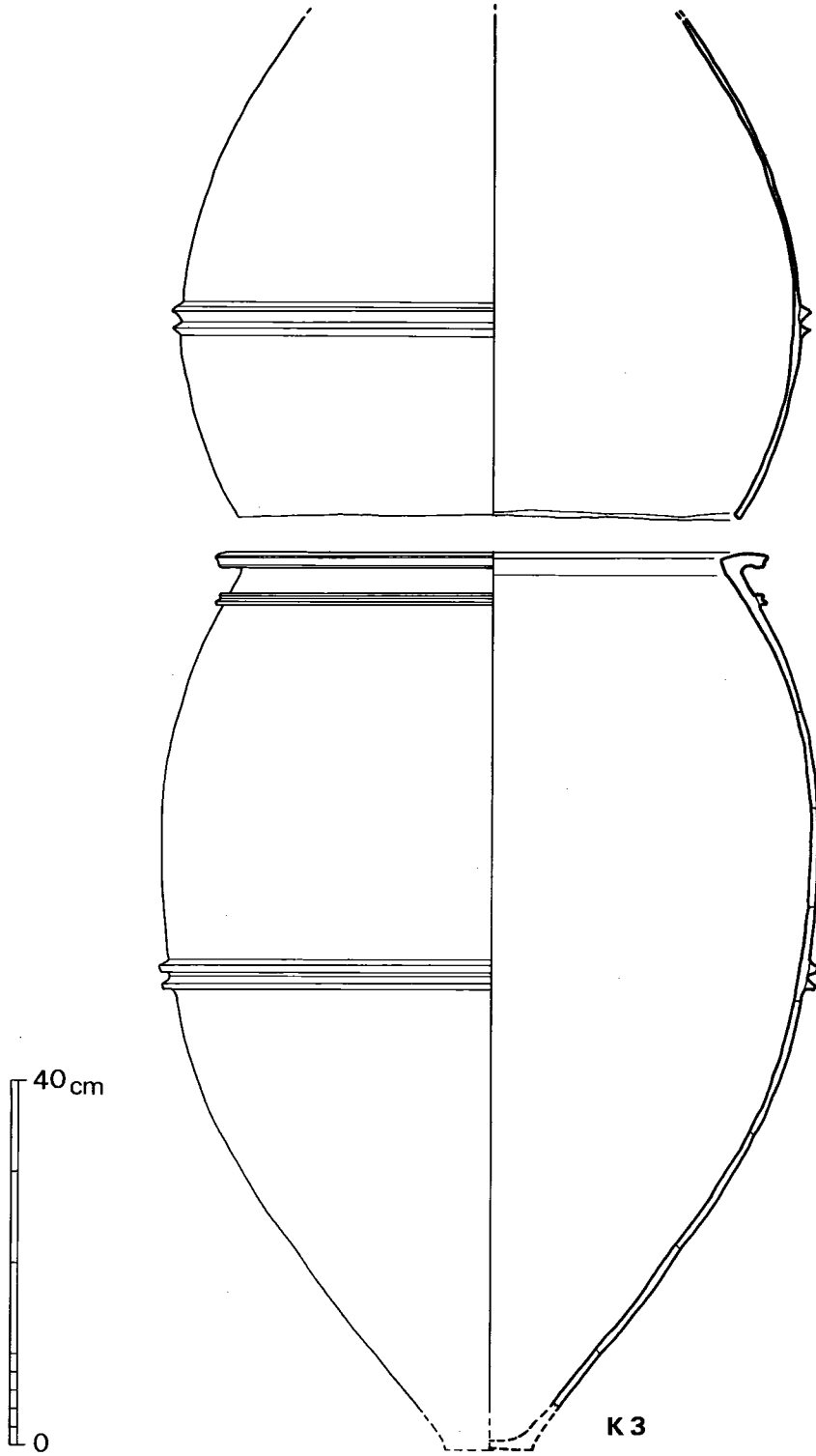


Fig. 13 辻畑遺跡 3号甕棺実測図 (1/8)

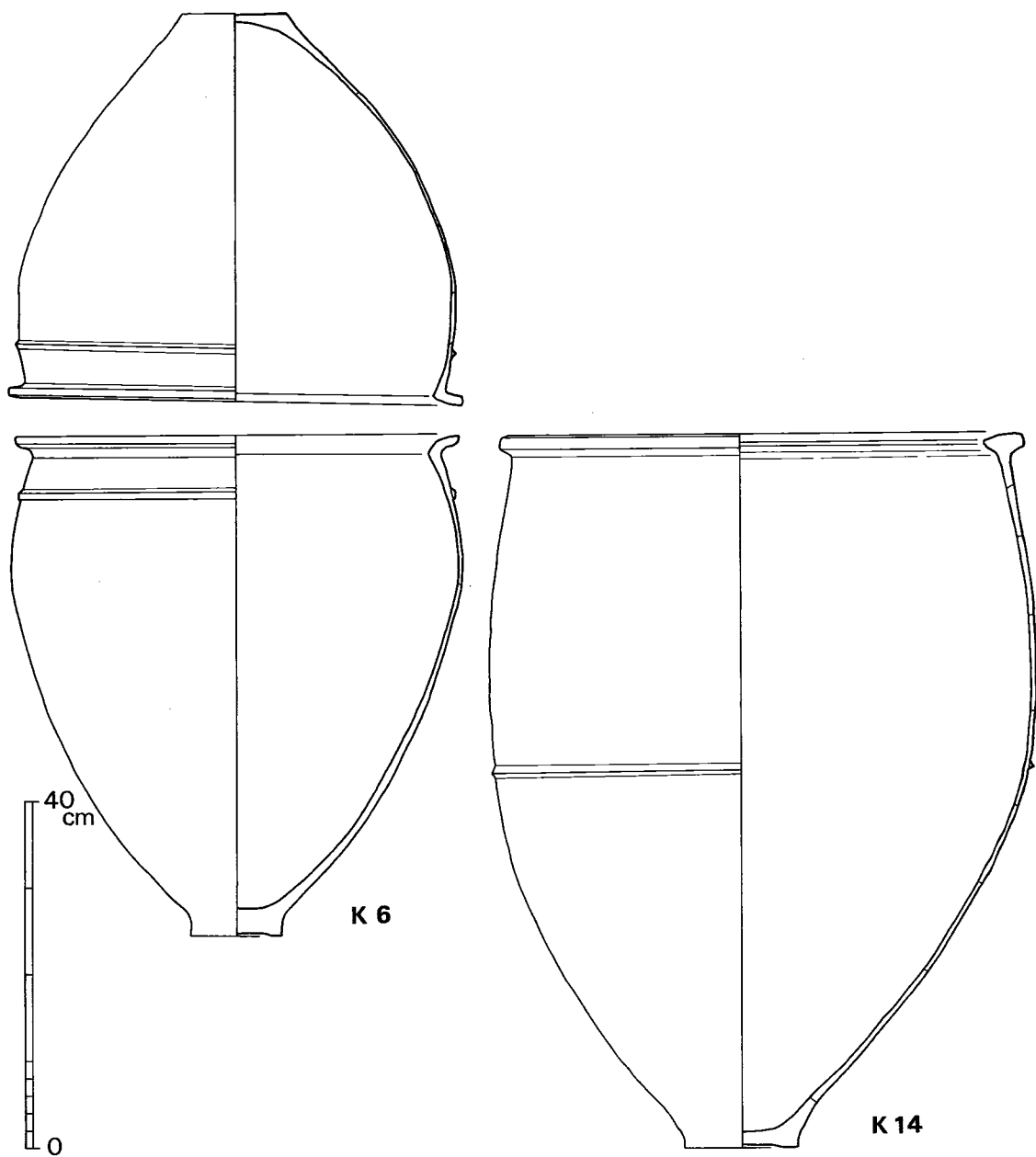


Fig. 14 辻畑遺跡 6号甕棺南・北甕, 14号甕棺下甕実測図 (1/8)

**12号甕棺** (PL. 14, Fig. 17)

**上甕** 口縁部は破片で、出土状態実測図 (Fig. 8) と下甕との組合せから口径を復原した。あまり発達しない口縁は、5mm程直線的に内傾する。胴部の張りは大きくはないと思われる。底部内面は尖底で、外面は上げ底気味である。焼成は普通で褐色を呈する。小さい砂粒を含み、外面にタテ方向ハケ目状痕を認める。

**下甕** 開口壺形土器の頸部を打欠く。胴部最大径がくる中位に三角状突帯を1条付す。焼成は普通で褐色、器周残 $\frac{1}{2}$ 強の現状で外面の片方にのみ突帯より上方と胴下半部にそれぞれ1箇所の黒斑を認める。小さい砂粒を含み、内面はナデ、外面は突帯部をヨコナデ、他をヨコ方向にヘラ研磨する。

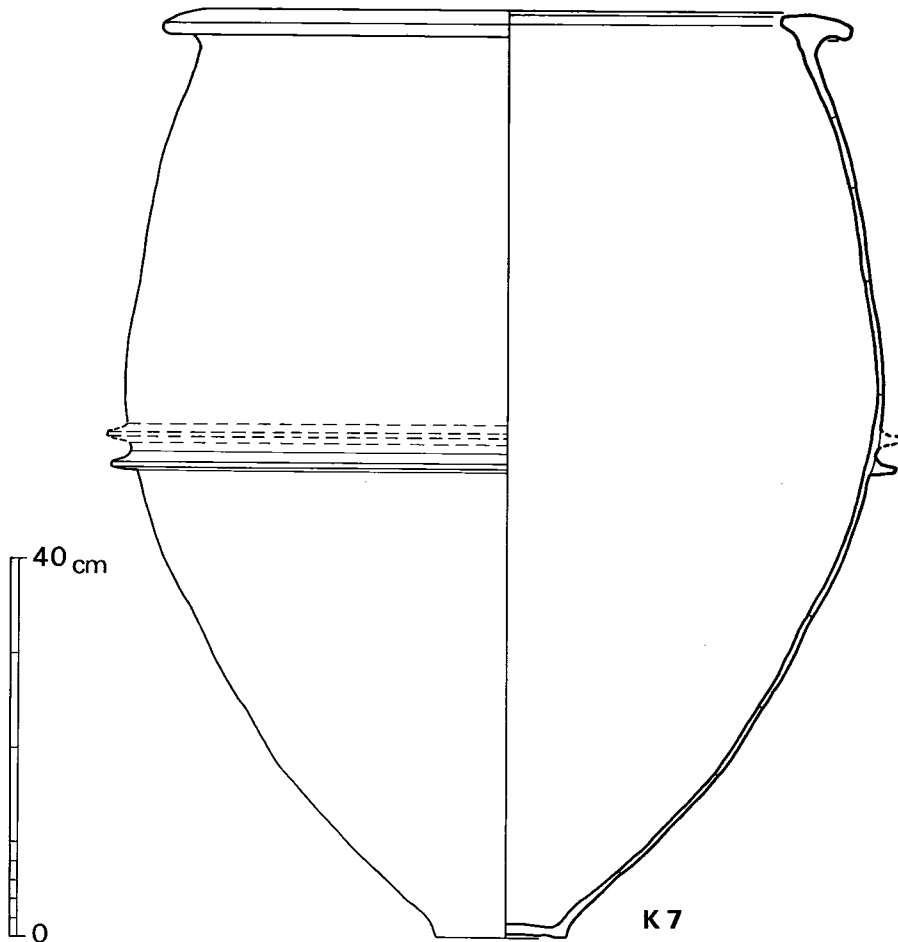


Fig. 15 辻畑遺跡7号甕棺下甕実測図 (1/8)

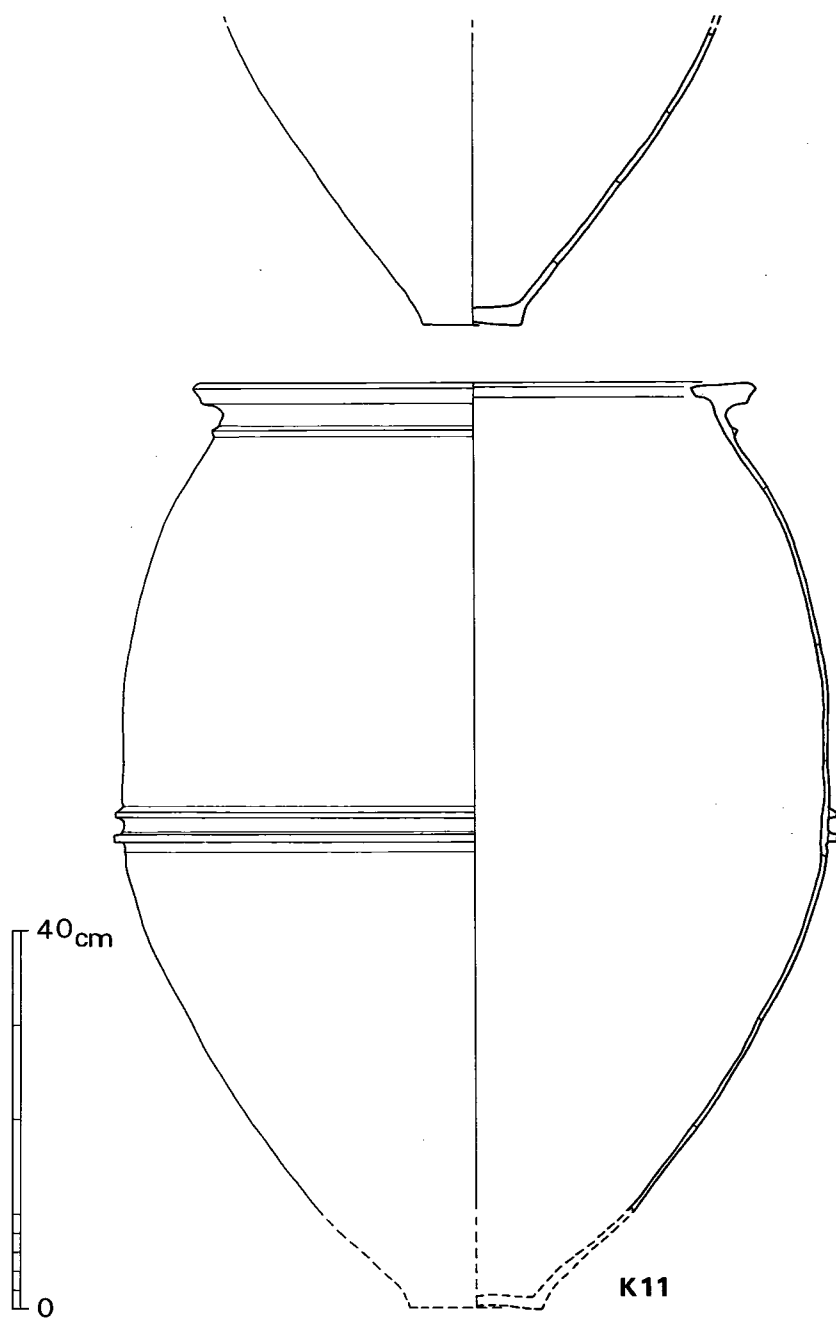


Fig. 16 辻畑遺跡11号甕棺実測図 (1/8)

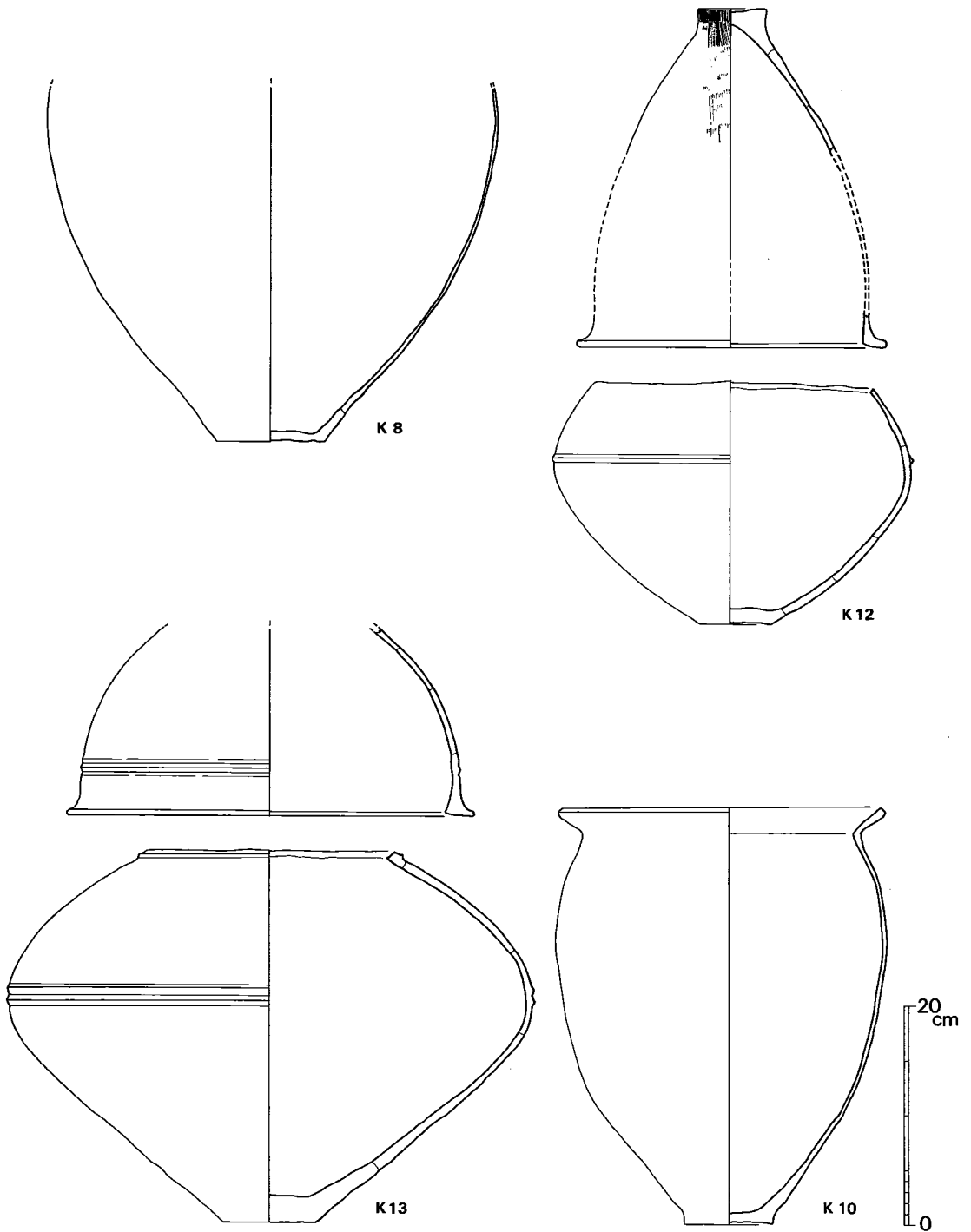


Fig. 17 辻畑遺跡 8号甕棺下甕, 10号甕棺下甕, 12・13号甕棺実測図 (1/6)

**13号甕棺** (PL. 14, Fig. 17)

上甕 口縁は平坦に近いが、4mm程内傾し、内側にシャープな稜を有す。口縁下に三角状突帯を1条有すが、むしろその両側へのヨコナデによって形状を保つ程度である。焼成はやや悪く褐色を呈す。砂粒を含み、内外共に風化が著しい。

下甕 開口壺形土器の頸部を打欠く。頸肩部に三角状突帯を1条、胴部最大径がくる中位に三角状突帯を口唇状に2条付す。焼成は普通で器外茶褐色・器内褐色、器周残 $\frac{1}{2}$ の現状である。砂粒を含み、内外共に風化が著しい。

**14号甕棺** (PL. 14, Fig. 14)

下甕 口縁はT字状をなすが、若干丸味をもって9mm程内傾し、厚手である。口縁下には突帯を有さず、胴部中位よりもやや上方に三角状突帯を1条付す。焼成は普通で茶褐色、略完存の現状で口縁部に4箇所黒斑を認め、胴内面下部は黒褐色を呈す。砂粒を含み、内外共に風化が著しい。

(実測図中、胎土接合箇所は観察可能な部位のみ示す。従って示されたものが全てではない。)

## 5. 小 結

辻畑遺跡は今まで説明したように、13基の甕棺墓・6基の土壇墓が確認された弥生時代の共同墓地である。ここではその所属時期と分布のあり方を中心に補足を加える。

### 甕棺墓に関して

中期初頭 小形を主に中形を含めた日常用器を転用した甕・壺・鉢形土器を棺体とし、壺形土器は頸部を打ち欠いて組み合わせる場合が多い。その中であって、既に埋葬専用の大形棺も使用される事もある。これらの時相に加えて、14号の口縁は厚手でT字状に近く、胴部に三角状突帯を1条のみ付す。6号南甕は口縁下にシャープな三角状突帯を付し、北甕は厚手の上げ底を呈す。13号上甕は未発達な口縁部、下甕は頸肩部と胴部に三角状突帯を付す。以上は城ノ越式土器の特徴である。12号も含めて中期初頭に属しよう。

中期中葉 大形の埋葬専用棺に代表される時相で、T字状口縁を呈する須玖式土器の特徴である。しかし、1号棺は中期中葉でもやや新しい時期に属する。

中期後半 大形の埋葬専用棺は引き続いて盛行するが、組み合わせ時に上甕を、また時には下甕もその口縁部を打ち欠くことがある。打ち欠かずに単棺とする場合もある。これらの時相に加えて、逆L字状の口縁部とその直下の突帯、上位に張りのある胴部、コ字状の胴部突帯な



どの特徴をもつが、口縁部がT字状に近いものも含まれる。2号はT字状に近い逆L字状を呈し、胴部突帯は三角状に近いコ字状である。3号は下甕が逆L字状口縁であるが、胴部突帯の上段は2号のそれに似る。7号・11号もこの期に属するが、主軸方向と分布のあり方で上記4例は今少し触れる。小形棺では9号が属し、跳ね上げく字状口縁を呈すが、これはまた古い時期にも認められる特徴でもある。8号・10号もこの期に属すが、やや後出の可能性もある。

**土壌墓に関して**

土壌墓は5号が9号甕棺墓に切られ、7号が1号甕棺墓を切っている。その他の土壌墓は、時期を決定する遺物の出土もなく、所属時期を明確にすることはできないので、以下の遺跡全体の遺構配置の中で考えてみたい。

**遺構配置に関して**

遺跡の東側は未調査であり、遺構の出土状態から相当の削平を受けて既に消滅した遺構も考えられる。特に5号甕棺は他と離れて検出され標高もこの部分が高いので、中央部は削平による空白の可能性があるだろう。しかし、北半部と南半部の遺構のあり方は、単に集中するだけでなく、前者は甕棺墓のみが検出され、後者は甕棺墓と土壌墓の両者が混在しており、切り合うものも2例検出されるなどの特徴ある出土状態である。一応下記のとおり整理した。

	(中期中葉)	(中期後半)	(後期)
(中期中頭)			
┌ 大形棺 K14			
北半部└ 中形棺 K6			
└ 小形棺 K12・13			
————— K5 —————			
南半部	大形棺 K1	大形棺 K3・11・2・7	
	D4・5		D7
	D1～3	小形棺 K9・8・10	

中期中頭では大形棺・中形棺が14号・6号と1例のみ検出され、主軸は略一致する。これに直交して小形棺が周囲に検出され、1つのまとまりがある。しかし、小形棺でも5号は離れた位置で方向は大形棺に対峙しており、消滅した可能性のある中央部の遺構とのまとまりを考えるべきかも知れない。また、この期の時相は前述のとおり大形棺の盛行前で、土壌墓に成人を埋葬する例が多い。遺構南半部の土壌墓で、5号が9号甕棺墓に切られているので、この期のものとも考えられ、略主軸が等しい4号も同様であろう。この場合、北半部が甕棺墓のみであるのに、南半部は土壌墓のみとしてのまとまりを示すことになる。しかし、後述の『蒲田遺跡』例からして、むしろ中期中葉でもやや後出の時期の土壌墓群と考えられる。

中期中葉でもやや新しい時期の甕棺墓は、1号棺のみであるが、主軸が略等しく胴部三角状

突帯を有する上甕を組み合わせる3号も、中期後半とはしたがこの期に近いものであろう。11号も同様である。土壙墓では、前述の4・5号がこの期に属し、甕棺主軸と逆の1～3号も同様である。この場合、西側に甕棺墓が、東側に土壙墓が多く位置する点が留意される。

中期後半では大形棺の2・7号が略主軸を同じくし、小形棺の9号がその中央に位置する。8・10号は大形棺とは逆方向の主軸である。

後期では、平面プランや段状床面の形状からして、7号土壙墓が考えられる。

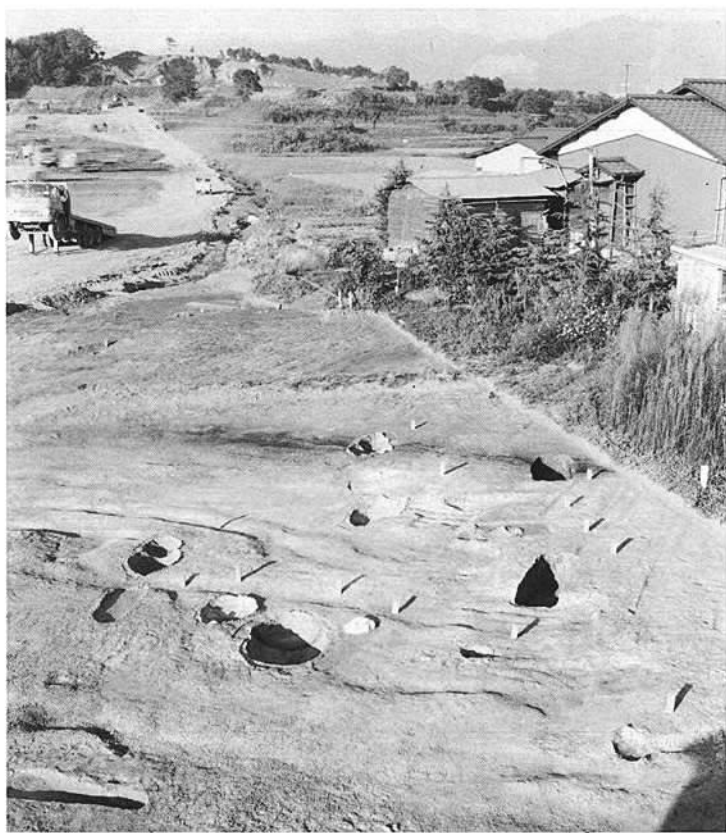
#### 遺跡に関して

最後に、限定された辻畑遺跡の資料を補う例として、谷を介して北方で調査された「蒲田遺跡」<sup>註</sup>がある。A地区第1地点で、筒形土器を含む多量の祭祀土器群を伴う溝状遺構に区画された中に、7基の甕棺墓・4基の土壙墓が出土し、中期中葉～中期後半に連続した時期に属する。2基の土壙墓は溝内に存在する。辻畑遺跡南半部の中期中葉よりやや後出した1号甕棺墓と、後半の甕棺墓と土壙墓のまとまった出土の仕方は、第1地点のあり方と共通するが、溝および祭祀土器群の出土はない。独立した広い丘陵上に立地し、その周囲に広い水田地区を有した蒲田遺跡と対象的である。しかし、同D地区でも中期後半の30基以上の甕棺墓・土壙墓群が出土しているが、その配置は列をなして直交しており、辻畑遺跡北半部の土壙墓のあり方と共通する。また、7号の土壙墓形式は別として、一般的には中期初頭前後に盛行する土壙墓形式が中期後半近くにまで残る点の共通性は地域的なものであろう。そして、中期初頭の北半部の大形棺1基・中形棺1基・小形棺2基のまとまりは、最小共同単位の紐帯を示すものであろう。中期後半の甕棺墓・土壙墓の北半部のあり方は、大規模集団墓群をなさない、中期中葉以降の連続した小規模集団の地域的特徴を示すものであろう。

註 飛高憲雄・藤田和裕・二宮忠司・力武卓治編『蒲田遺跡』「福岡市埋蔵文化財調査報告書第33集」 福岡市教育委員会 1975年

# 図 版

(辻畑遺跡の調査)



1. 上方蒲田遺跡を望む  
(南西から)



2. 辻畑遺跡北半部喪棺墓出土  
状態 (北から)



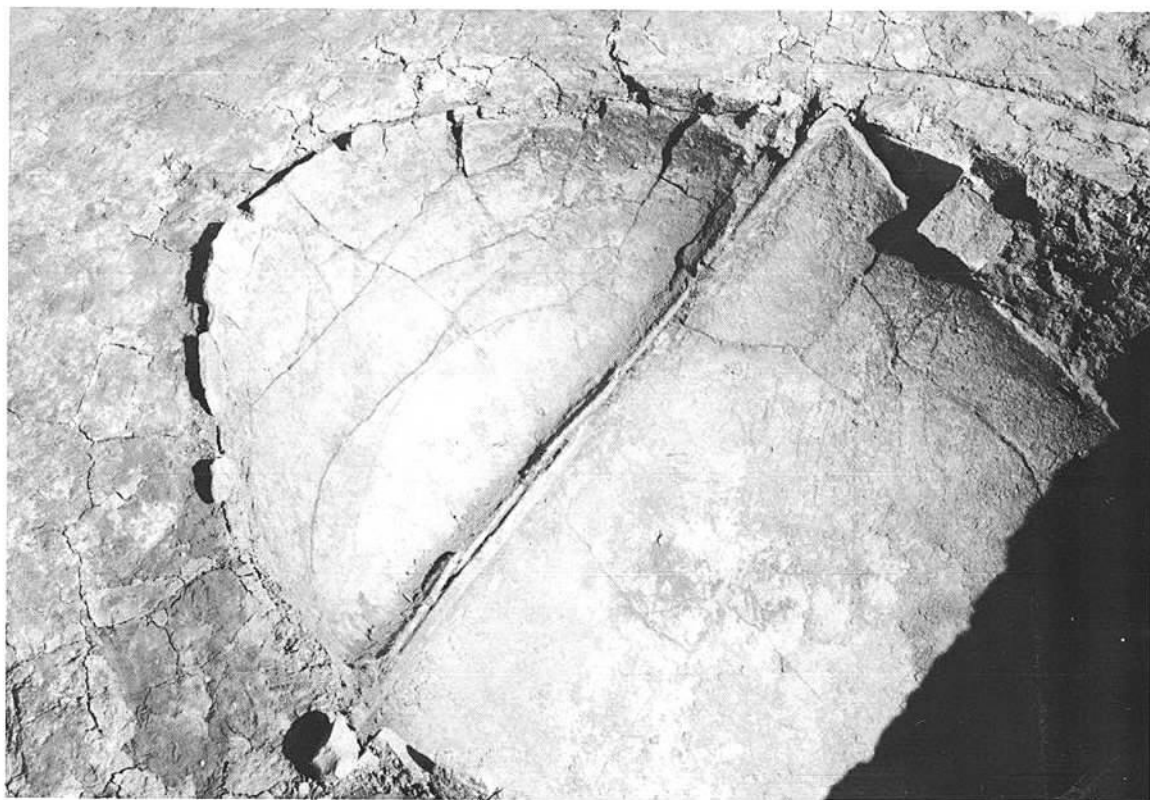
1. 辻畑遺跡全景（南西から）



2. 辻畑遺跡南半部遺構出土状態（北から）



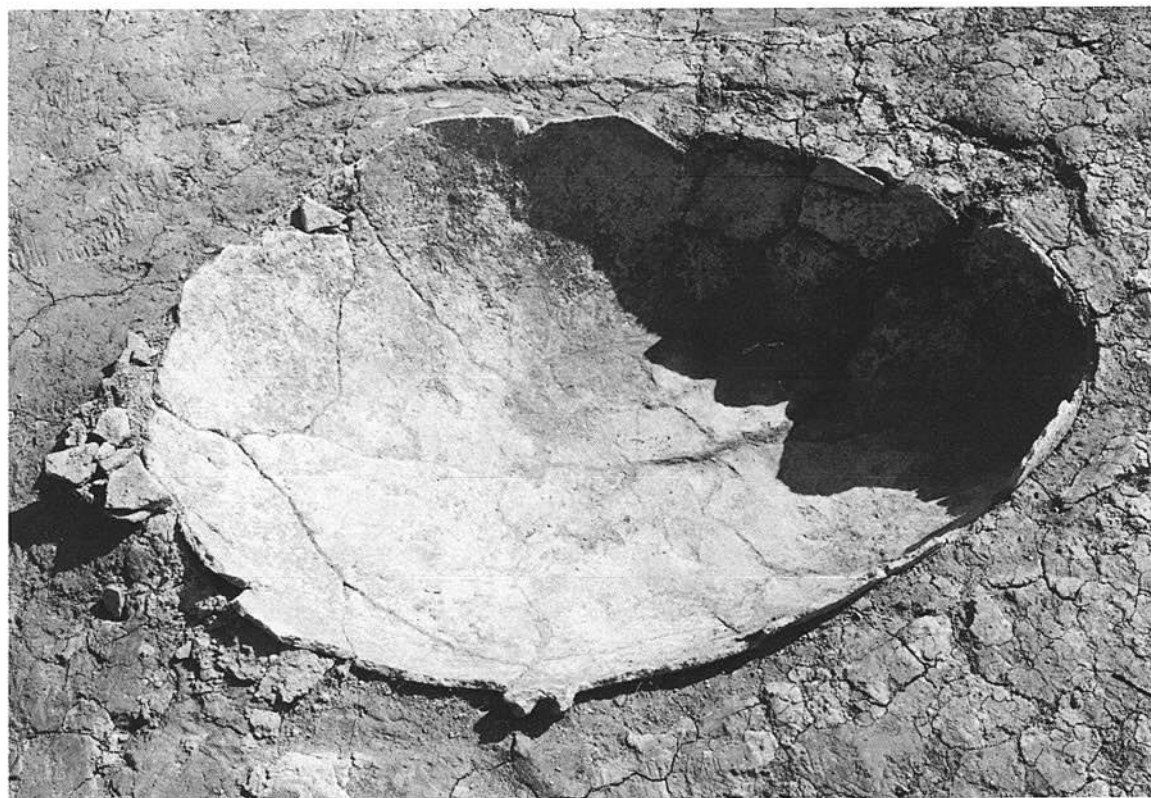
1. 辻畑遺跡1号甕棺墓・7号土壙墓出土状態（北から）



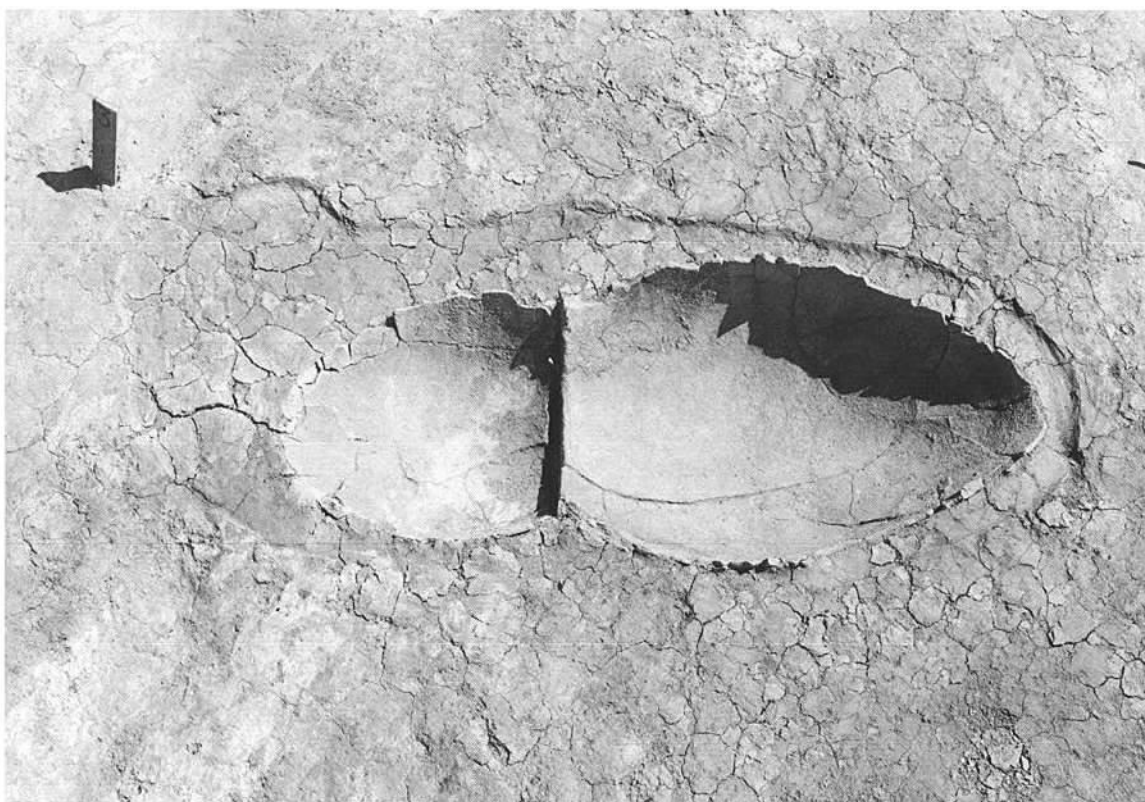
2. 辻畑遺跡1号甕棺墓組合せ状態（西から）



1. 辻畑遺跡1・2号甕棺墓, 7号土塚墓出土状態(北から)



2. 辻畑遺跡2号甕棺墓出土状態(北から)



1. 辻畑遺跡 3号甕棺墓出土状態 (北から)



2. 辻畑遺跡 5号甕棺墓出土状態

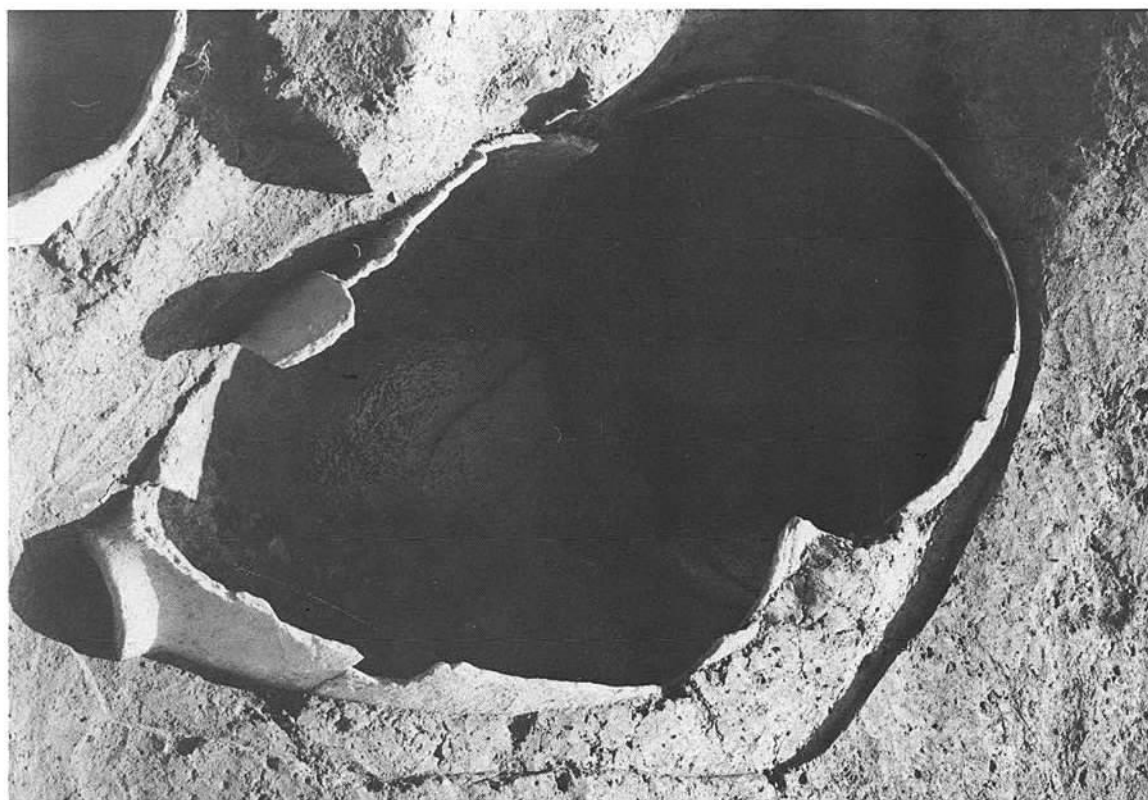




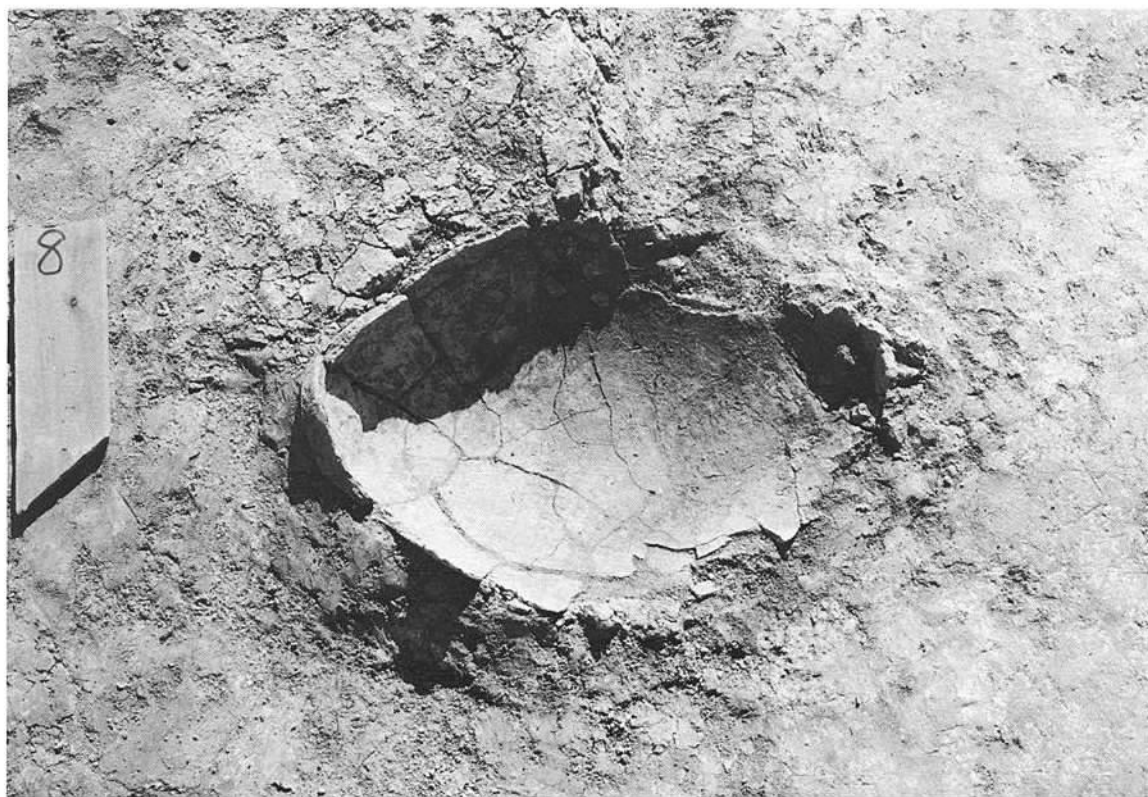
1. 辻畑遺跡7号甕棺墓出土状態（西から）



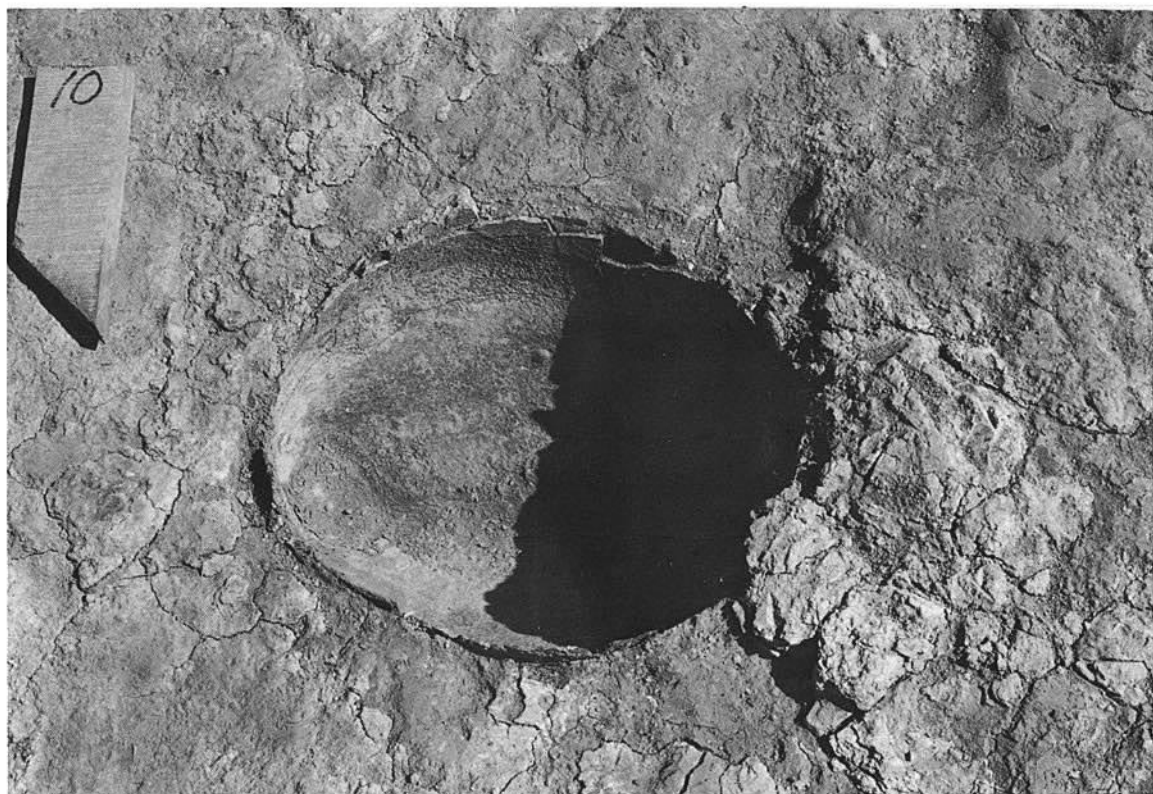
2. 辻畑遺跡9号甕棺墓・5号土塚墓出土状態（北西から）



1. 辻畑遺跡 6号甕棺墓出土状態 (北西から)



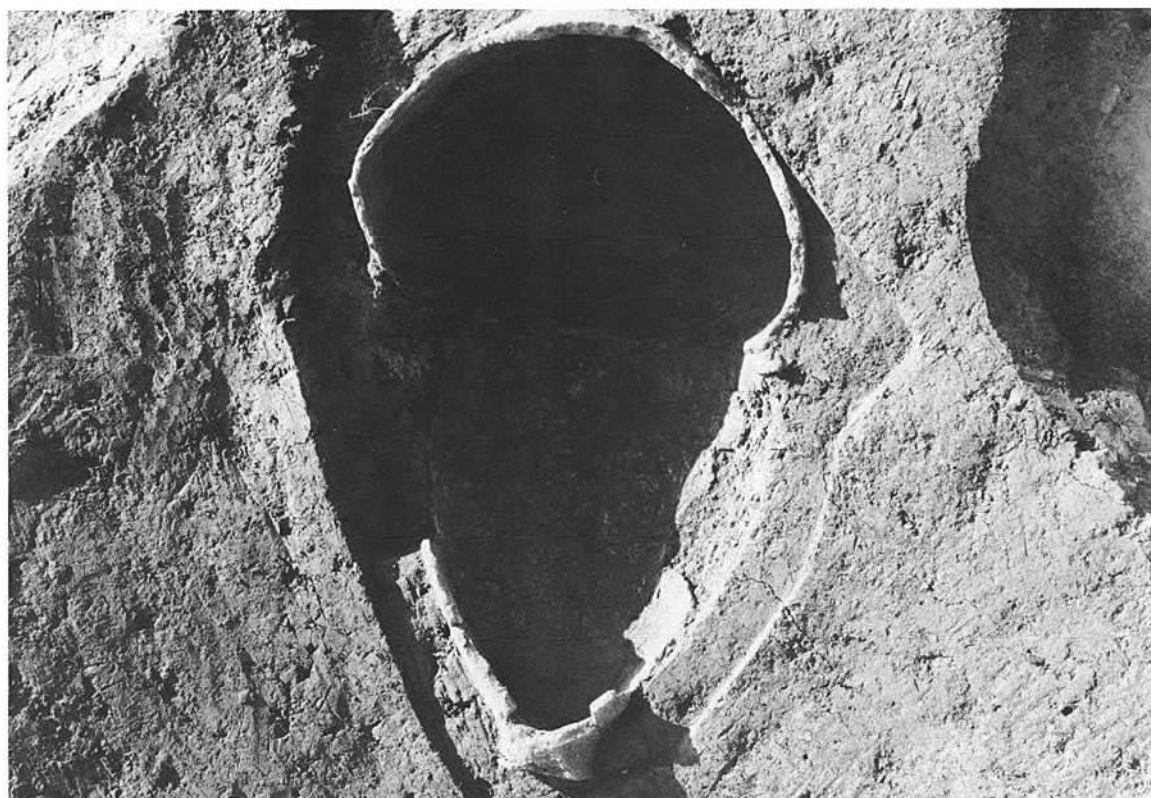
2. 辻畑遺跡 8号甕棺墓出土状態 (北から)



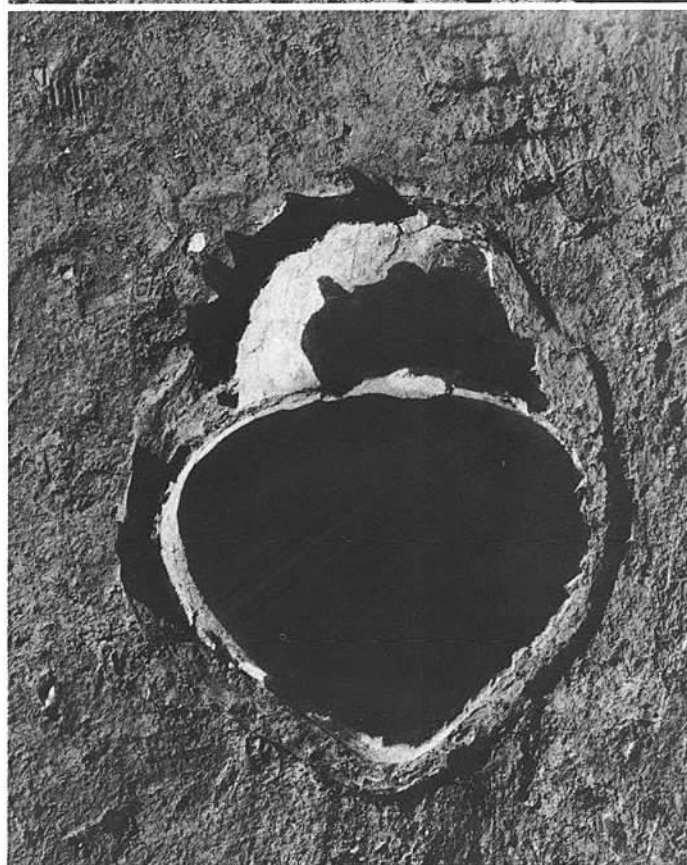
1. 辻畑遺跡10号甕棺墓出土状態（北西から）



2. 辻畑遺跡11号甕棺墓出土状態（北から）



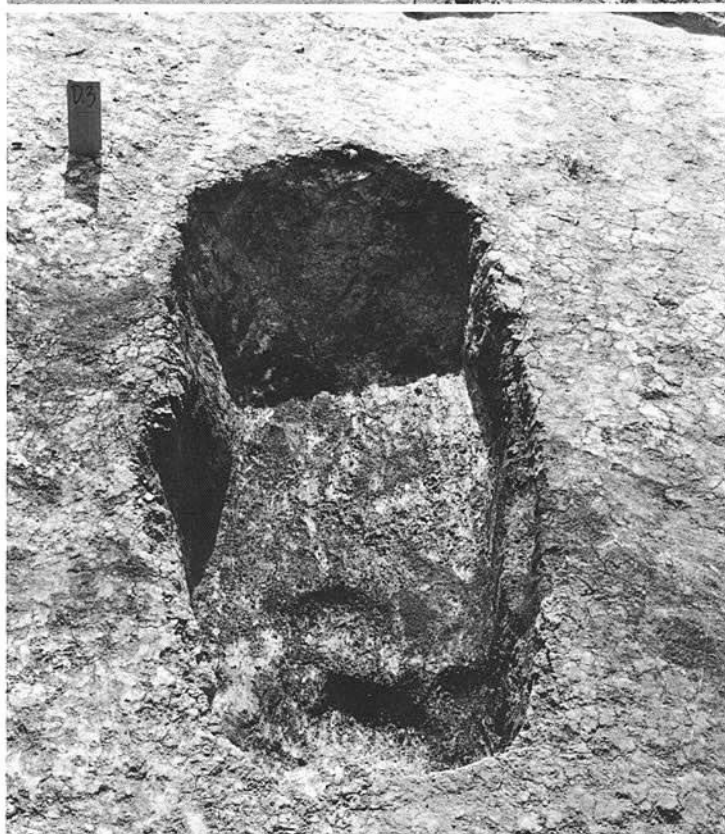
1. 辻畑遺跡12号甕棺墓出土状態（南東から）



2. 辻畑遺跡13号甕棺墓出土状態（南西から）



1. 辻畑遺跡14号甕棺墓出土状態  
(東から)



2. 辻畑遺跡3号土壙墓出土状態  
(北東から)



1. 辻畑遺跡 1号土壙墓出土状態 (北西から)



2. 辻畑遺跡 2号土壙墓出土状態 (北から)



1. 辻畑遺跡 3 号土塚墓出土状態（北西から）



2. 辻畑遺跡 4・9 号土塚墓出土状態



辻畑遺跡出土甕棺

K 1 号上・下

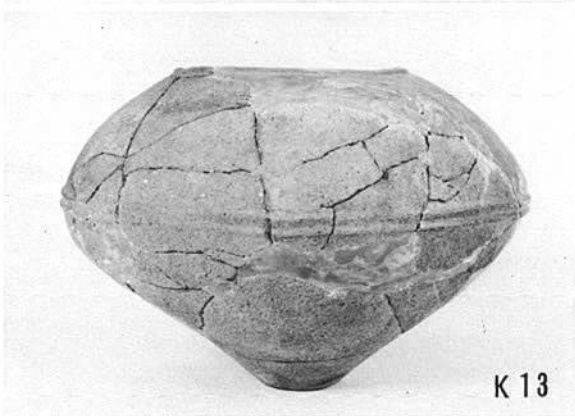
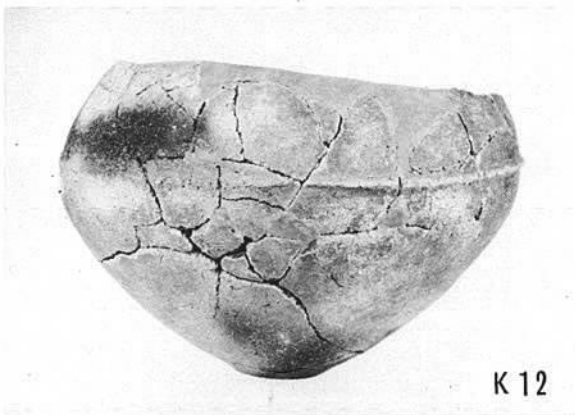
K 2 号下

K 3 号下

K 6 号南

K 3





辻畑遺跡出土 甕棺K 7号下・K11号下・K14号下・K12号下・K13号下

## IV 西尾山古墳群の調査

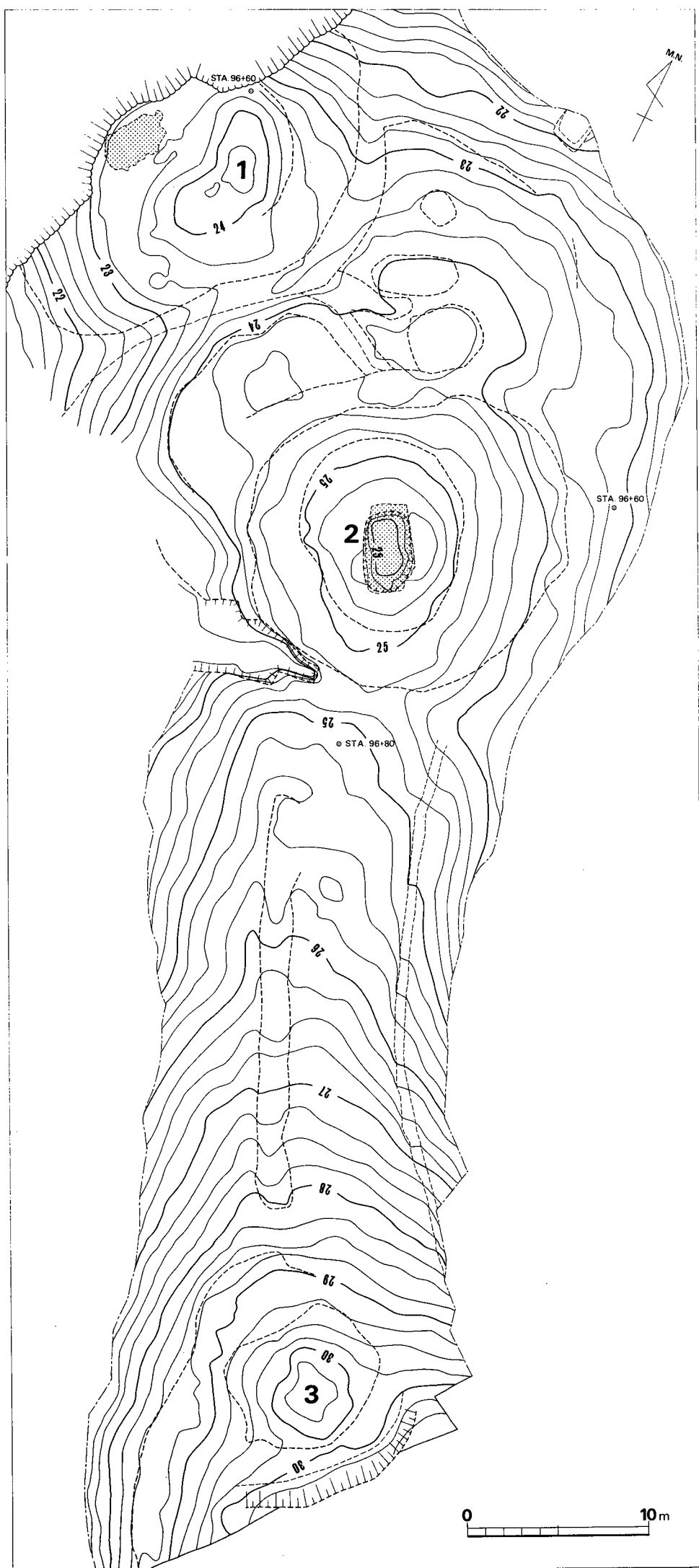


Fig. 18 西尾山第1～3号墳丘測量図 (1/300)

## 1. 立地と古墳の配例 (PL. 15, Fig. 18)

国道 201号線バイパスを東進して福岡市域を過ぎて粕屋町へ入ると間もなく、右斜め前方に標高86m余とさして高くはないがひと際目立つ山が目に入る。これが丸山である。本古墳群はこの丸山から東へ派出する通称西尾山（標高53m余）の西斜面に位置する。

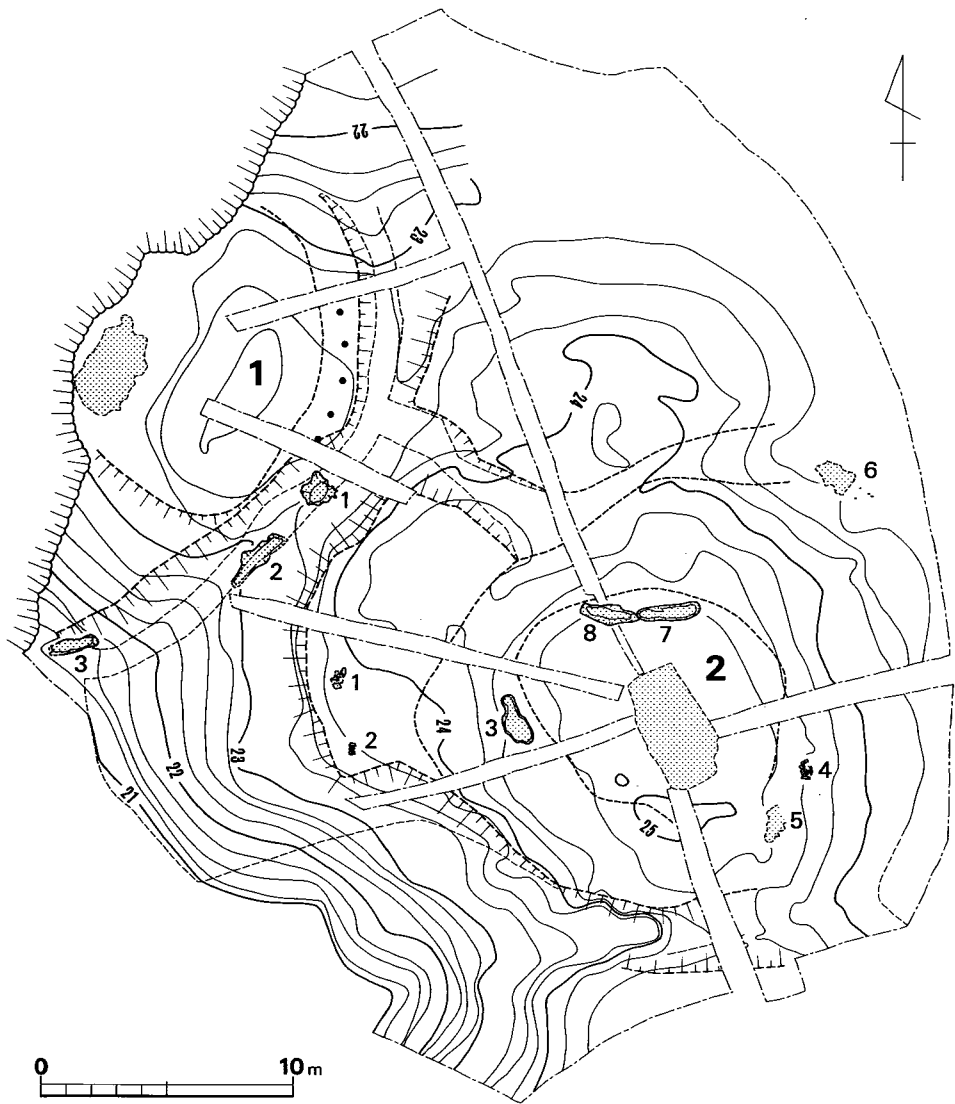


Fig. 19 西尾山第1・2号墳地山整形面測量図 (1/300)

本古墳群は、昭和46年度に行なった再度の分布調査によって新たに発見された遺跡である。3基の墳丘が確認され、西端を第1号墳としたが、第3号墳の上方（東側）に古墳が存在するか否かは確認していない。また、いずれも径はともかく墳丘は低く、墳頂部に陥没が認められて内部主体は大破しているとの印象を受けた。

## 2. 西尾山第1号墳

### (1) 墳 丘 (PL. 16・17, Fig. 18~20)

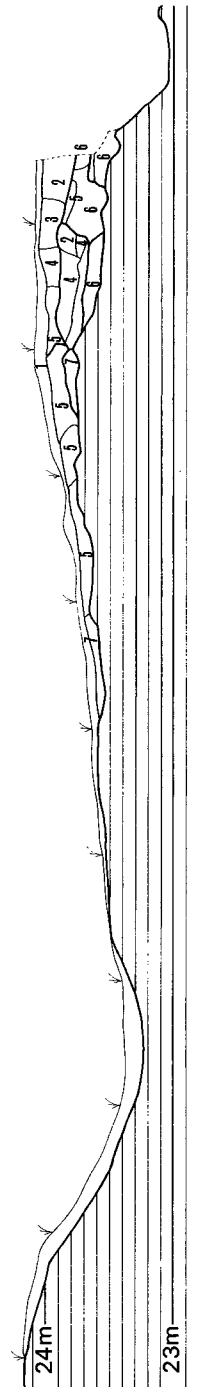
墳丘の西半を失い、大破している。みかけの規模は、南北径約22m、斜面にあたる南北両側からの現存高は約2mと比較的大型であるが、尾根筋にあたる東側からの高さは0.5mを僅かにこえる程度に過ぎない。盛土は、最も厚い所でも0.5m前後しか現存しない。削り出しは認められないが、旧表土は除かれている。

第2号墳寄の北東側から南西側にかけては、巾2.6m弱の浅い溝によって画されている。この溝の内側の肩から1.8m程の範囲には盛土が殆ど遺存しない。流失によるとも考えられるが、もともと内側の盛土部分の周縁にテラスを設けた変則的な2段築成であった場合も想定される。

裾部には、円筒埴輪がめぐらされている。東側の計5本についてはその基部の位置を確認したが、遺憾ながら盗難にあった。これらの埴輪は、岩盤を径20~25cmにわたって浅く穿った孔内に立てられており、これらの心々の距離は1.5m, 1.4m, 1.4m, 1.3mとバラツキがあり、その間隔は極めて疎である。

- |         |          |          |
|---------|----------|----------|
| 1. 表 土  | 2. 褐色土   | 3. 暗褐色土  |
| 4. 黄褐色土 | 5. 茶褐色土  | 6. 赤褐色土  |
| 7. 黒褐色土 | 8. 7+3+6 | 9. 暗赤褐色土 |

Fig. 20 西尾山第1号墳墳丘東半断面図 (1/60)



5本の埴輪の位置から復元される埴輪列の直径は約12mで、心々1.4m前後の間隔で樹立されたとすると総計26本となる。けれども、上記の推定埴輪列の心は石室を大きく外れる。石室が墳丘の中心を外れる位置に営まれたとしても偏りすぎるので、むしろ、埴輪列は正円の円周上に樹立されなかったとみるべきであろう。

(2) 石室 (PL. 17・18-1, Fig. 21)

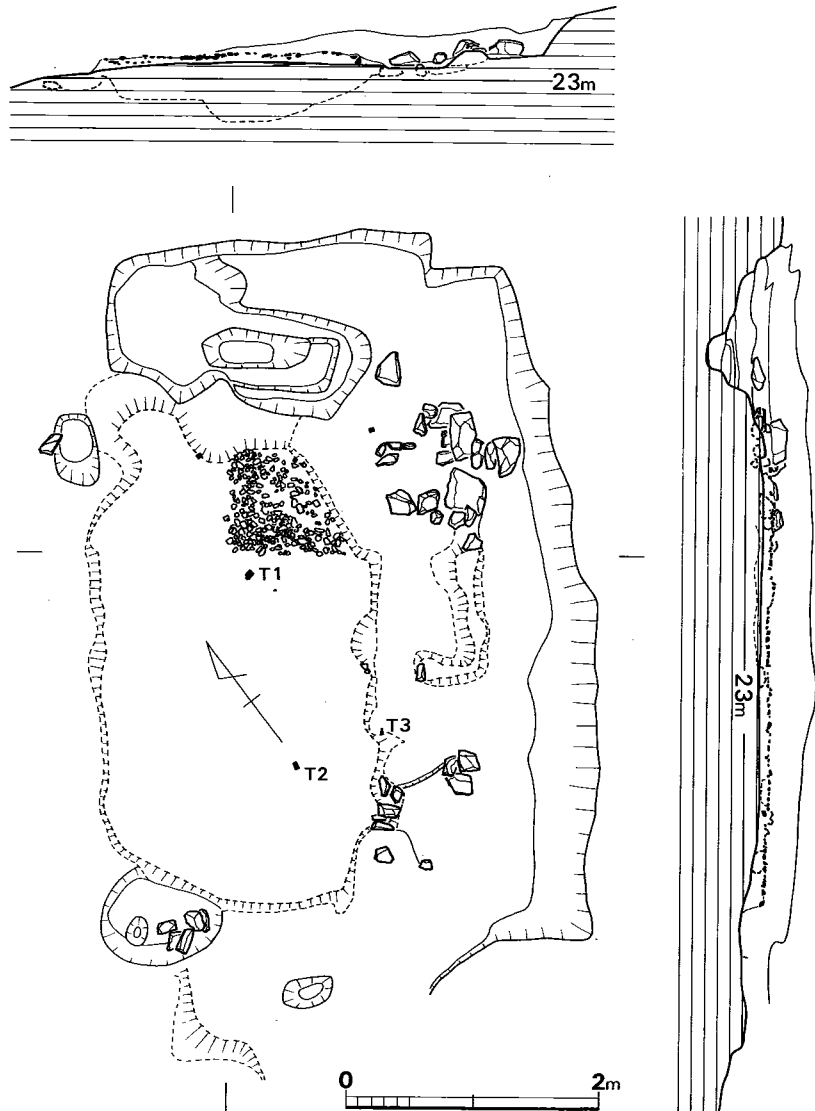


Fig. 21 西尾山第1号墳石室実測図 (1/60)

地山を浅く穿った  $5.6 \times 5.7\text{m}$  (上端値) 前後の不整長方形プランの墓壙底に営まれた単室の横穴式石室と推定されるが、床石と腰石の根締石を残すのみで大破している。横口部は南西側と推定される。

石室の床全面に円礫が敷かれており、その範囲からみて内法は長さ  $4\text{m}$ 、巾  $2.3\text{m}$  前後であったと思われ、比較的大型である。袖石以前については不詳である。

### (3) 遺物出土状態 (PL. 18-2, Fig. 21)

床面および腰石据え付け孔付近から各種の鉄器が採取されたが、いずれも原位置を移動している。

### (4) 出土遺物 (PL. 29, Fig. 22・25)

#### 鉄製工具

#### 手斧鋏 (Fig. 22-1)

錆が著しく進行している。全長  $8\text{cm}$ 、復元刃部最大巾  $43\text{mm}$ 、袋部は  $20 \times 14\text{mm}$ 。側面は袋部合わせ目と反対側に少しく反る。

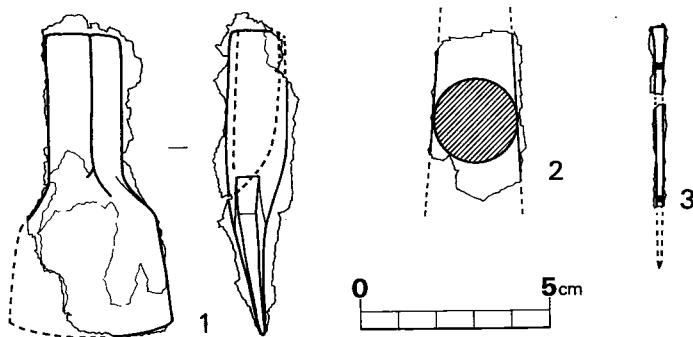


Fig. 22 西尾山第1号墳石室出土鉄器実測図 (1/2)

#### 鑿? (Fig. 22-2)

銚あるいは鑿の可能性もあるが、現存部分が径  $20 \sim 24\text{mm}$  の中実であることから一応鑿とする。

#### 針 (Fig. 22-3)

先端を欠く。推定全長  $64\text{mm}$  以上。現存部分の断面は頭部が長方形、先端寄が方形といずれも矩形を呈する。孔は判然としない。

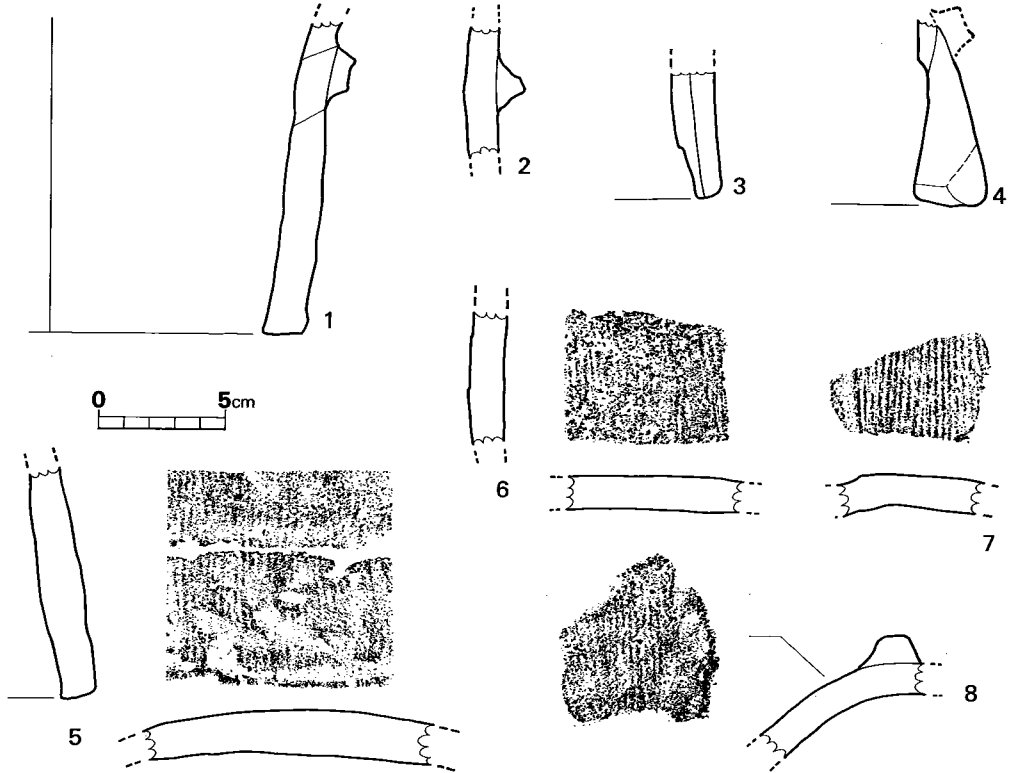
#### 埴輪 (PL. 29, Fig. 23)

1～3は通有の円筒埴輪片である。3は、粘土紐の接合部と思われるが、1単位としては稍高い感を受ける。4は、一端が異様に厚く、他端の表面には剝離痕がある。

5は、6と同様に扁平である。

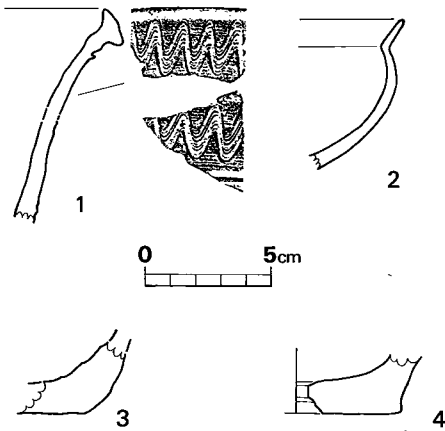
7は、左端に指頭によるナデ消し部分があり、凸帯近くか。ただし、凸帯は刷毛目と直交せずまた断面形からみても、単なる円筒埴輪とは思われない。

8は、刷毛目と平行に凸帯が付されている。緒ではなく、単なる円筒埴輪とも異なる。



▲ Fig. 23 西尾山第1号墳出土埴輪実測図 (1/3)

◀ Fig. 24 西尾山古墳群出土土器実測図 (1/3)



須恵器

甕数個体分の破片がある。図示した甕頸部片 (Fig. 24-1) は、薄手で焼成良好。成形もシャープで、古式である。他の胴・体部片はこれよりも後出すると思われる。

これらの他に、盛土中から弥生式土器小片



(Fig. 24-3・4) が採取されており、第2号墳でも同様である。

### 石器 (Fig. 25)

盛土中および墳丘周辺から採取したものである。

1・2は、細石核より剥離された後、上下端を折断したものである。2は、表面に自然面を有する。

3・4・5は黒耀石を用いた石鏃である。3・4は個々先端部・脚部を欠損後再調整を行っている。

6は、本来石核の剥取面と思われる。下位からの加撃によって剥取された後、主要剥離面上下端に調整を行ってスクレイパーとして用いている。

7・8は砂岩を用いた砥石である。7は荒目であり、表面に数条の鉄器によるものと思われる削傷が見られる。8は細目で仕上げ用のものと思われる。

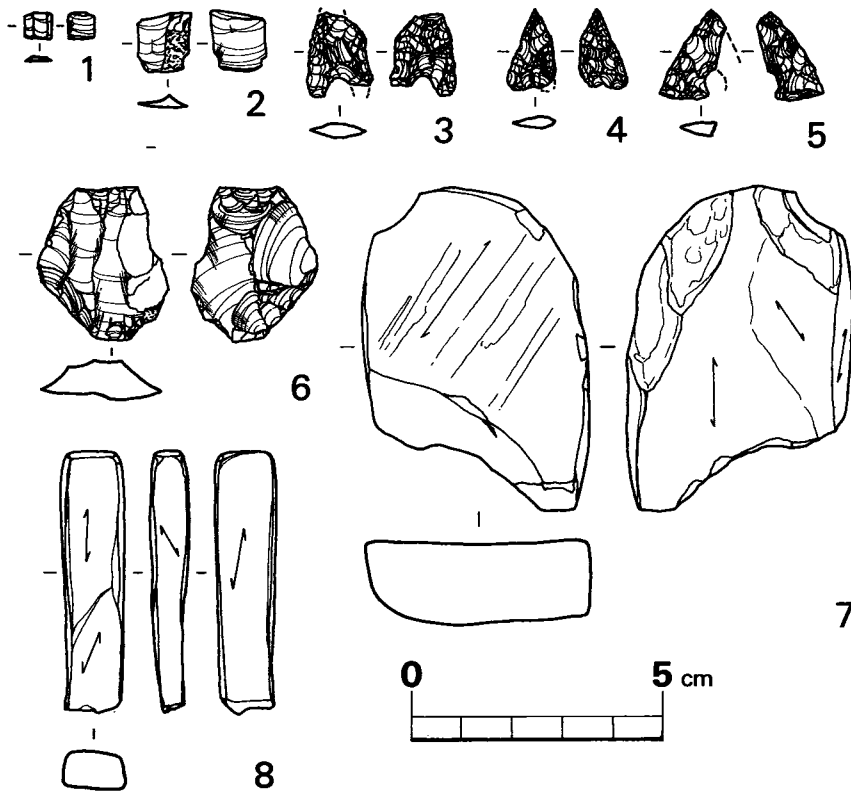


Fig. 25 西尾山古墳群出土石器実測図 (2/3)

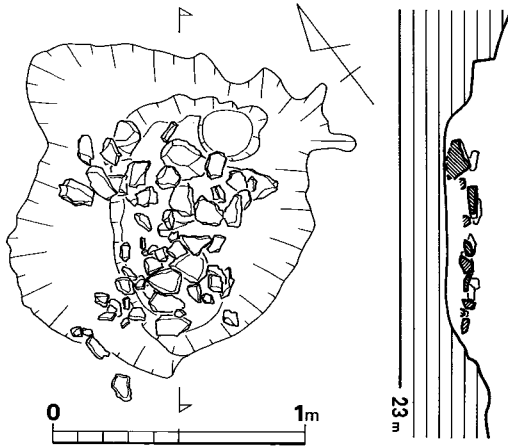
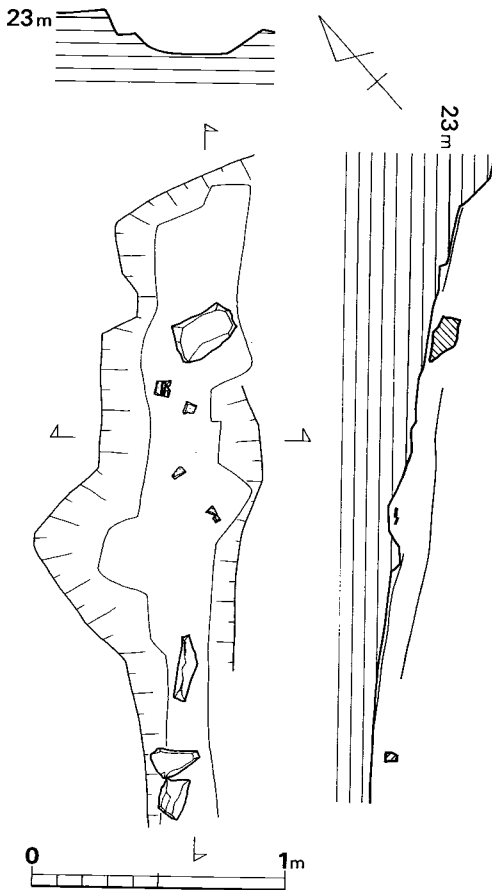


Fig. 26 西尾山第1号墳裾部第1号遺構実測図 (1/30)



## (6) 裾部の遺構群

南東から南西側にかけての裾部の計3ヶ所に、土壇状の遺構?計3基がある。いずれも、地山を浅く穿った不整形なプランを呈する。

**裾部第1号遺構** (PL. 24-1, Fig. 26)

南東側の周溝底に位置する。径 1.2~1.3m の不整形プランで、深さは20cm内外と浅い。底面から若干浮いた状態で、礫が堆積している。

**裾部第2号遺構** (PL. 24-2, Fig. 27)

第1号遺構とは、約 1.5m 離れた位置にある。極めて不整形であり、巾は中央部で63cm、長さは南西端が不明であるが2mを超えと思われる。全体に南西側に向けて傾斜している。遺構であるか否かも不明であるが、埴輪片計5個が採取されている。

**裾部第3号遺構** (PL. 25-1, Fig. 28)

第2号遺構南西端からさらに 5.7m 離れた位置にある。長さ 193cm、巾44~31cm (上端値) の不整長方形プランを呈し、壇底は東側が高い。

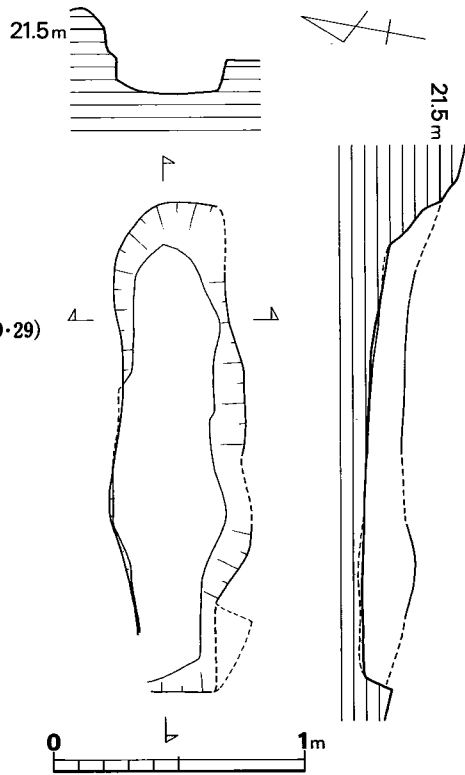
Fig. 27 西尾山第1号墳裾部第2号遺構実測図 (1/30)

### 3. 西尾山第2号墳

(1) 墳丘 (PL. 19・20-1, Fig. 18・19・29)

伐採直後のみかけの規模は、径17m 前後、東側裾部からの高さは約2m であり、北西側の第1号墳との間にテラス状の平坦部があつて、一見小型の前方後円墳のような外観を呈している。墳頂部は陥没しており、盗掘の跡が歴然としている。

Fig. 28 西尾山第1号墳裾部第3号遺構実測図 (1/30)



- 1. 黄褐色土    2. 明赤褐色土
- 3. 暗茶褐色土    4. 暗赤褐色土    5. 黒褐色土    6. 暗褐色土    7. 褐色土
- 8. 黒色土    9. 茶褐色土    10. 赤褐色土

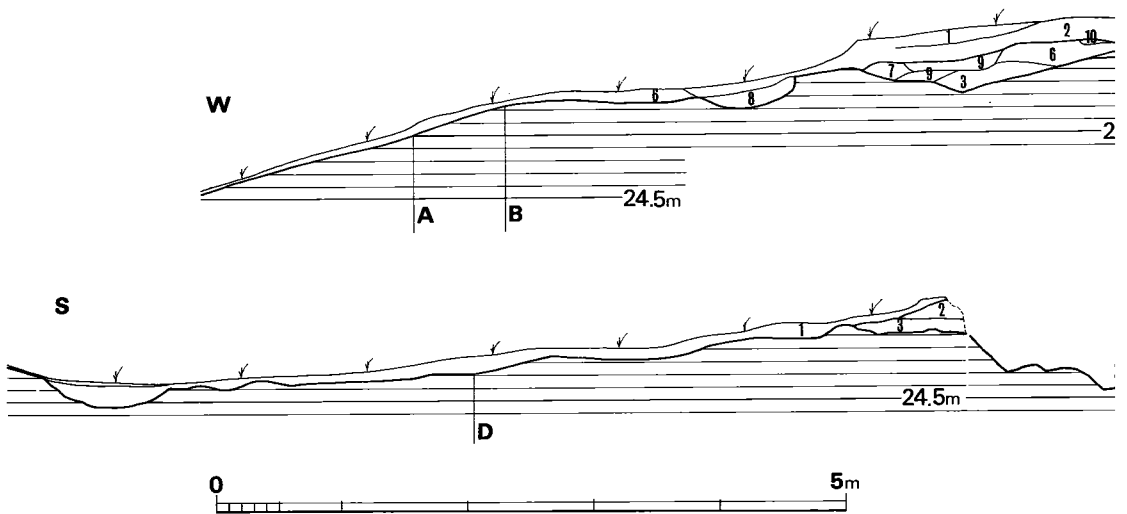


Fig. 29 西尾山第2号墳墳丘断面図 (1/60)

墳丘構築に際して表土層は除去されている。盛土の現存高は、0.5m 前後に過ぎないが、後述する石室構造からみて、当初の厚さは2m を超えたと推定される。

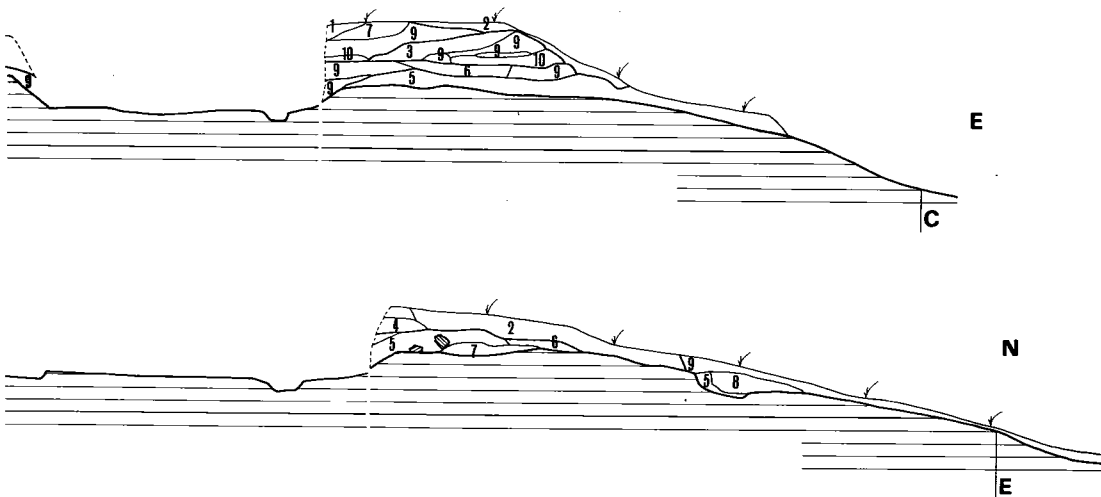
裾部は判然としないが、東西径はA～Cが13.4m 弱、B～Cが12.6m 強、南北径はD～Eが13.5m である。

## (2) 石室 (PL. 20-2・3, Fig. 30)

数石を残すのみで大破しており、原形をとどめない。墓壙は地山を浅く穿ったもので、長さ4.9m、巾1.95～2.65m (いずれも上端値) の不整長方形プランであり、南東側が少しく巾広となる。壙底は南東側が僅かに高く、四周は周壁最下段の石材を据えつけるためにさらに一段掘りこまれている。

上記からみて、基部に板石を立て以上を小口積とする小石室と思われ、その床面の規模は長さ2.7m 前後、巾1.25m 前後と思われる。また掘りこみの形状・深さからみて、南東側に大きな石材が配されたと推測される。

横口部の有無は明らかではないが、北西側に開口する竪穴系横口式石室であった可能性がある。



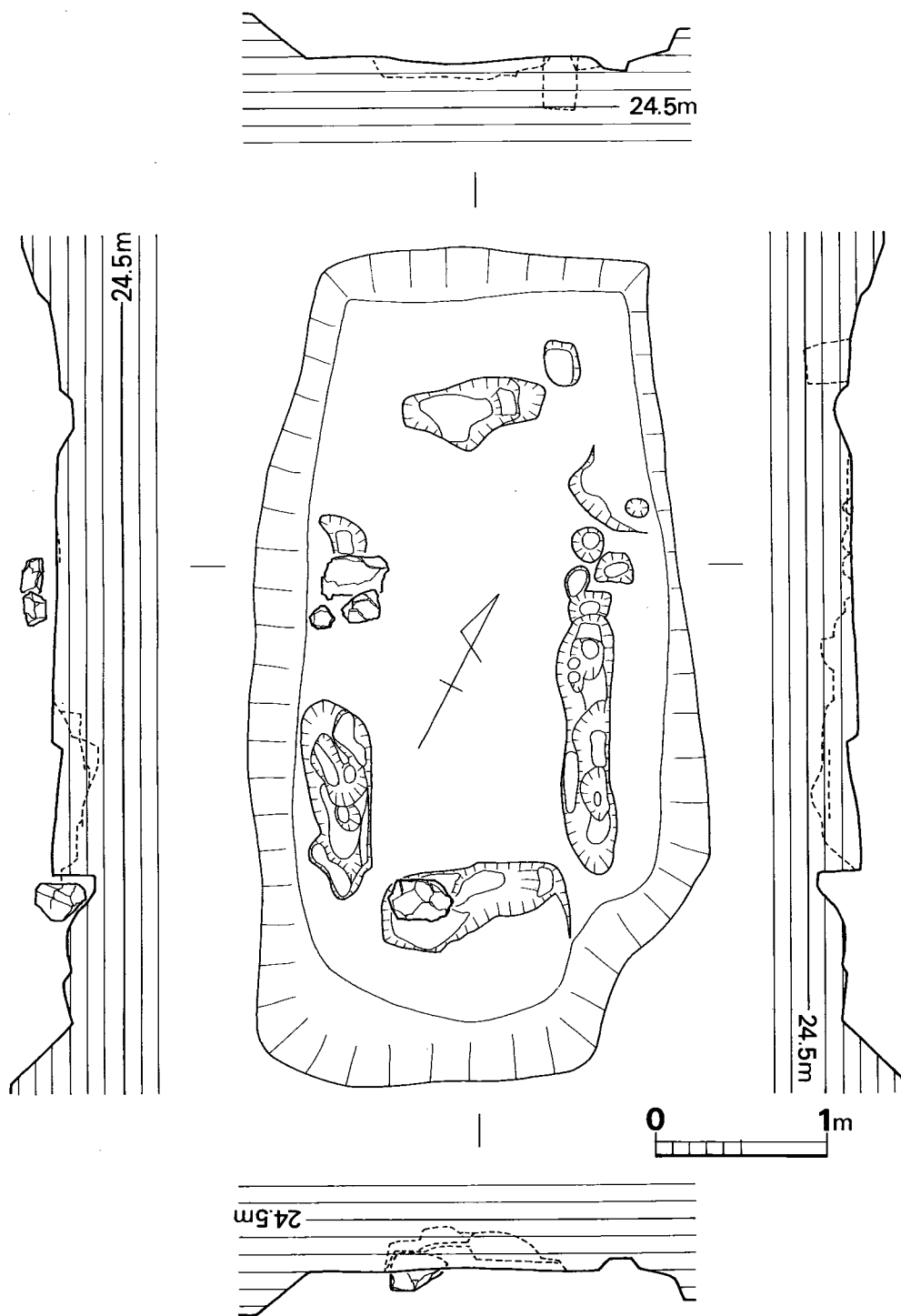


Fig. 30 西尾山第2号墳石室実測図 (1/40)

## (3) 裾部の遺構群

南西側を除く裾部周辺に、計8基の土壇状ならびに集石遺構がある。

## 裾部第1号遺構 (PL. 25-1, Fig. 31)

第2号墳から南西側に続くテラス面の縁辺部に位置する。105×45cmの不整長円形の土壇内に石材が堆積している。壇底は平らではなく、北端が稍低く段がつく。

## 裾部第2号遺構 (PL. 25-2, Fig. 32)

第1号遺構の南側約2mの位置にある。31×29cmの浅いくぼみに、計5個の石材が堆積している。

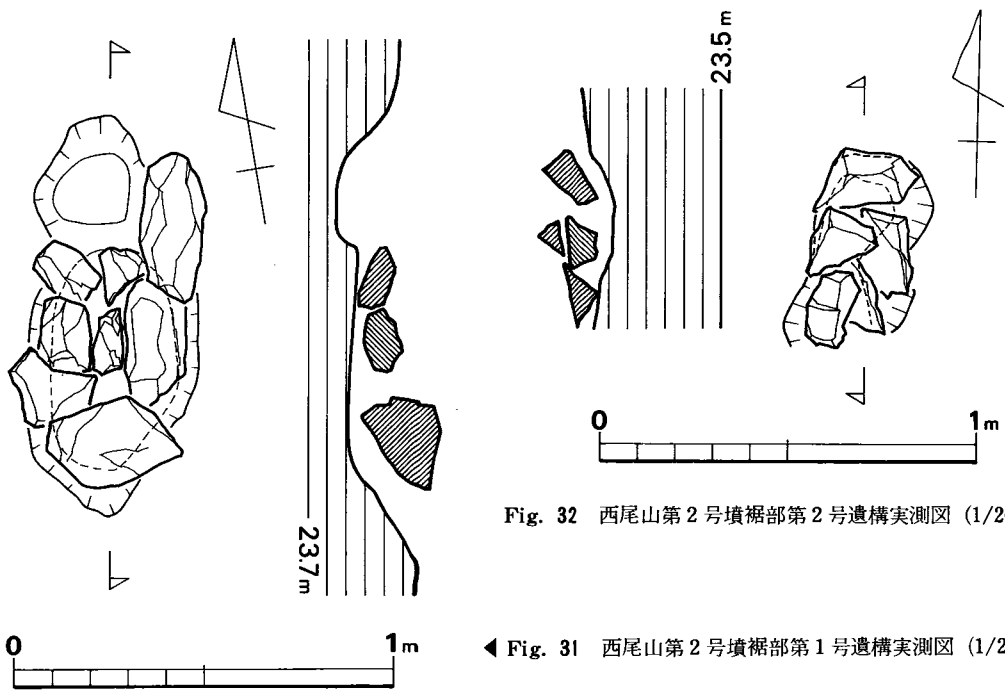


Fig. 32 西尾山第2号墳裾部第2号遺構実測図 (1/20)

◀ Fig. 31 西尾山第2号墳裾部第1号遺構実測図 (1/20)

## 裾部第3号遺構 (Fig. 33)

第1・2号遺構の東方にあり、位置的には裾部というよりはむしろ墳丘内にある。長さ2m強、最大巾90cm強(上端値)の不整長円形プランを呈し、南側が巾広くかつ深い。両端の壇底は一段高く作られている。

堆積土中から土師器片が採取されている。

### 土師器杯

(Fig. 24-2)

復元口径11.5cm,  
同器高 5.4cm。胎  
土は精良であるが、  
焼成は稍甘い。

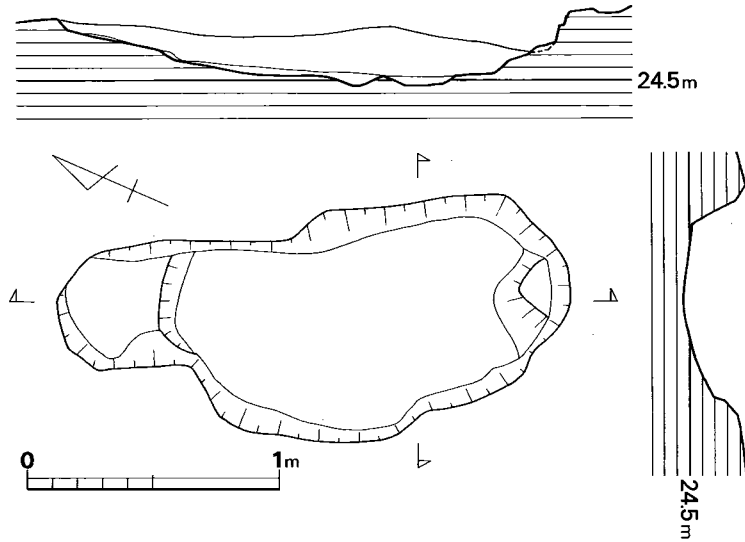


Fig. 33 西尾山第2号墳  
裾部第3号遺構実測図  
(1/30)

### 裾部第4号遺構

(PL. 26-2, Fig. 34)

第3号遺構と石室をは  
さんで反対側の裾部に位  
置している。60×50cm

(上端値)の不整四辺形  
の土壇の上面近くに石材  
が堆積している。20~40  
cmとプランの割には深い。

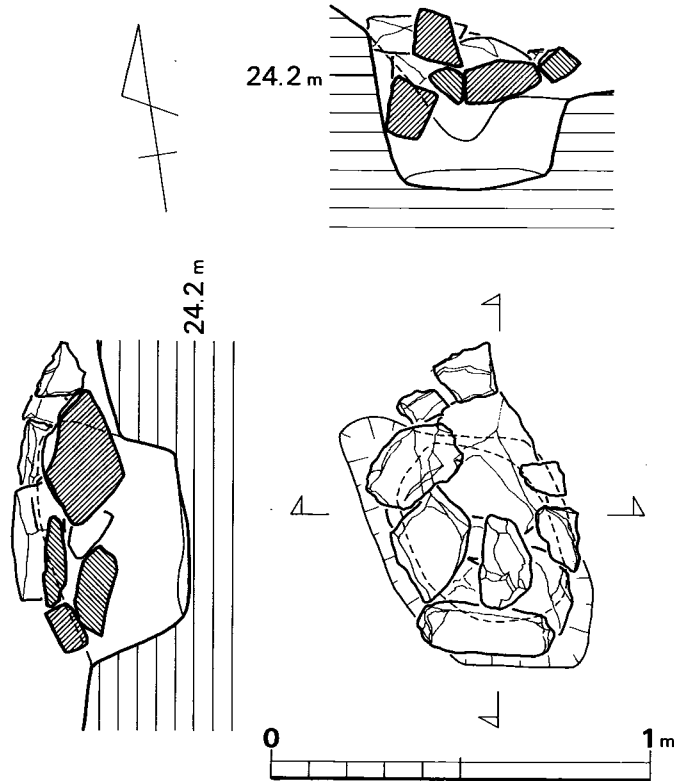


Fig. 34 西尾山第2号墳裾部  
第4号遺構実測図  
(1/20)

## 裾部第5号遺構

(PL. 27, Fig. 35)

第4号遺構の南西側にあたる裾部に営まれている。1.4m×0.7m(上端値)の隅丸不整長方形の浅い土壌で、炭化物・灰が堆積している(Fig. 35にてドットを付す部分)。また、墳丘寄の西側の塹壁は熱変している。両端近くの堆積物の上には、石材がのっている。

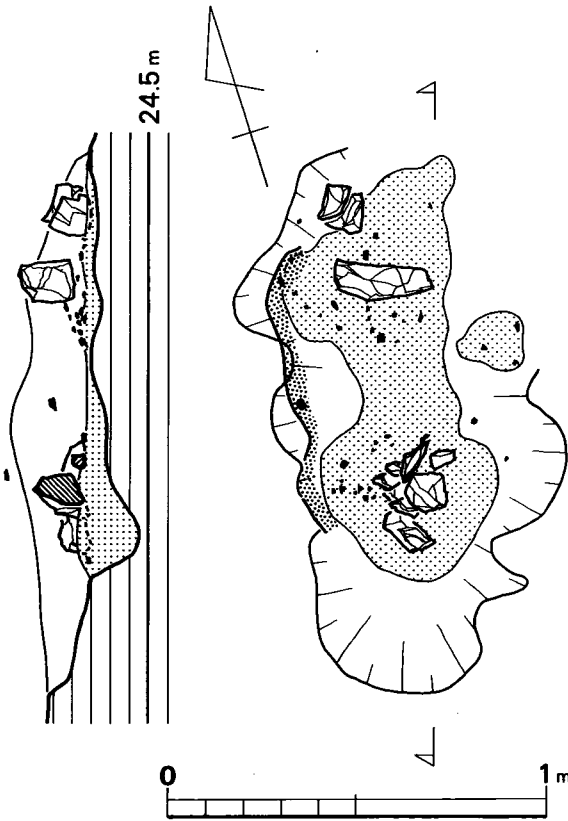


Fig. 35 西尾山第2号墳裾部第5号遺構実測図(1/20)

## 裾部第6号遺構 (PL. 28-1, Fig. 36)

北東側裾部に位置する。1.9×1.4mの範囲に、河原石(●印)と地山の軟岩と同質の石材(▲印)とが平面的に集石された状態にある。

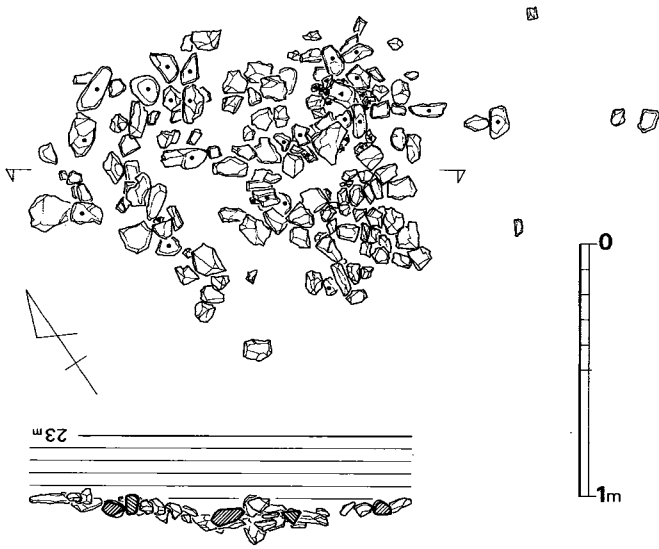
## 裾部第7号遺構 (Fig. 37)

北側裾部よりも稍上位に位置し、8号遺構に東接する。2.5×0.6mの不整長方形プランの地山を穿った浅い土壌であり、塹底は東側が若干巾広で僅かに高い。

## 裾部第8号遺構 (PL. 28-2, Fig. 38)

7号遺構と連なって1つの遺構になるかと思われたが、接しながらも独立する。土層断面によれば、2号墳の墳丘を切りこんで設けられている。2.2×0.65m(上端値)の不整長方形プランを呈し、西側が若干巾広となっている。塹壁の立ち上りは、不明瞭である。塹底も平滑ではなく、若干の凹凸がある。

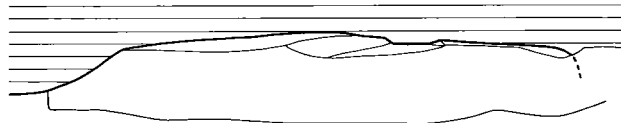
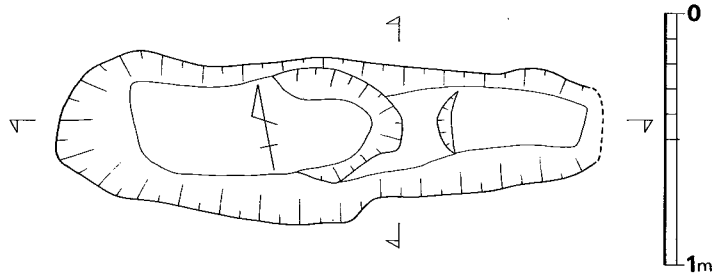
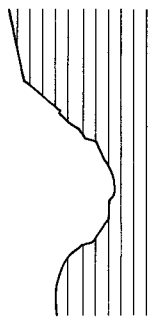
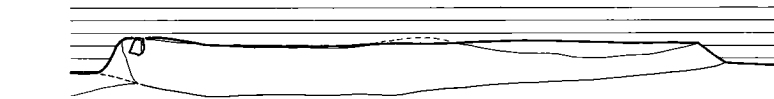
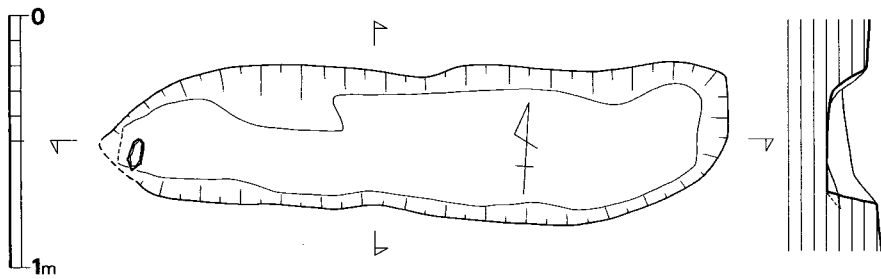




◀ Fig. 36 西尾山第2号墳裾部  
第6号遺構実測図 (1/30)

▼ Fig. 37 西尾山第2号墳裾部  
第7号遺構実測図 (1/30)

▼ Fig. 38 西尾山第2号墳裾部  
第8号遺構実測図 (1/30)



### 4. 西尾山第3号墳

(1) 墳丘 (PL. 21, Fig. 18・39・40)

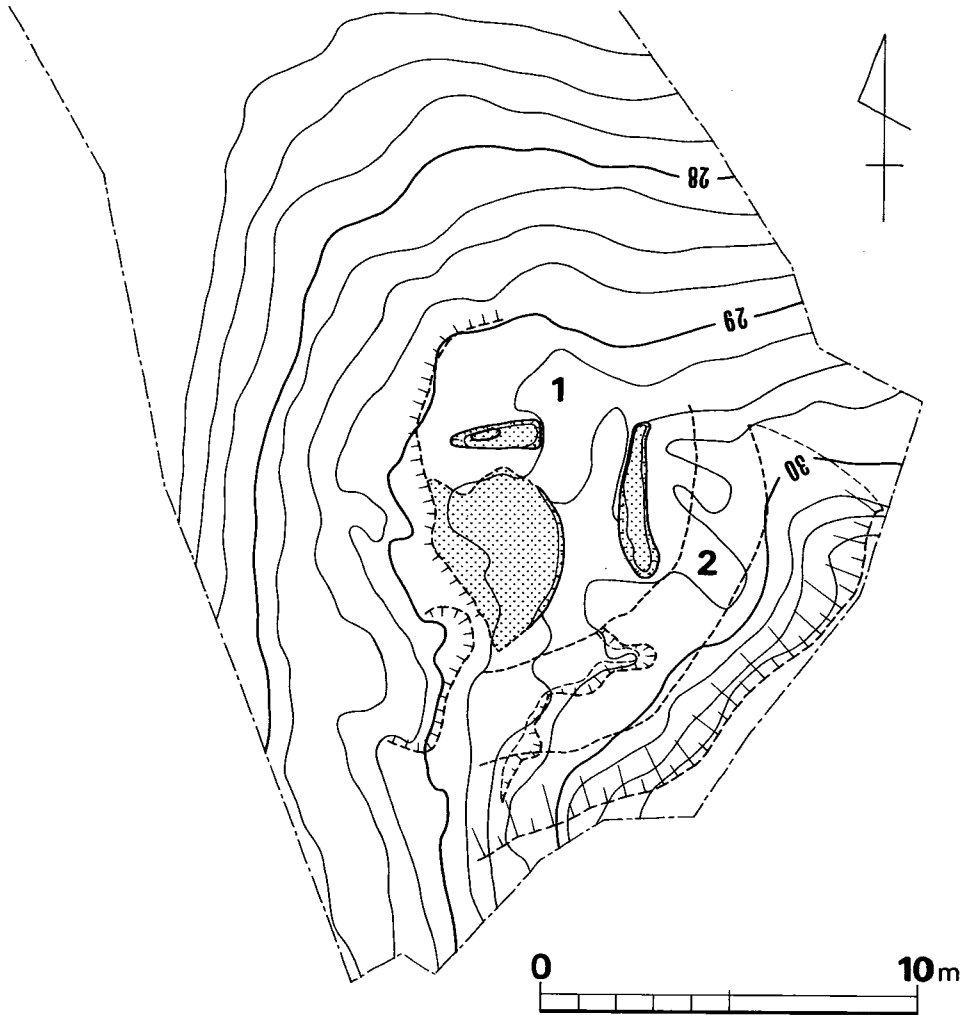
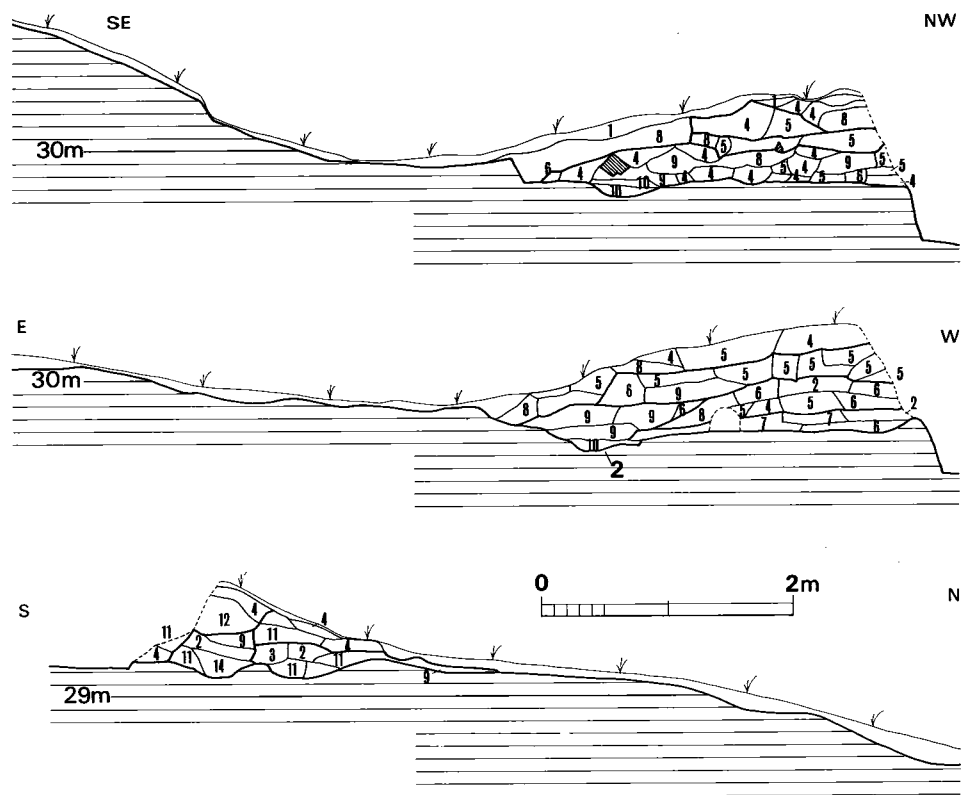


Fig. 39 西尾山第3号墳地山整形面測量図 (1/200)



1. 表土 2. 黒褐色土 3. 暗褐色土 4. 赤褐色土 5. 暗赤褐色土  
 6. 茶褐色土 7. 3+地山ブロック 8. 4+地山ブロック 9. 6+地山ブロック  
 10. 暗茶褐色土 11. 濃茶色土 12. 褐色土 13. 茶色土

Fig. 40 西尾山第3号墳墳丘断面図(1/60)

伐採直後では、みかけの規模——径8~8.5m,高さ1m強の小円墳と思われ、南東側尾根筋を断ち切った馬蹄形の周溝が認められた。墳丘構築に際して表土層は除去されており、盛土は80cm前後が現存する。

発掘後の周溝内縁線から復元される墳丘径は11.5m前後である。南東側の周溝は、底面で巾約2mとみられ、上縁線は出入が著しいものの、大略の径は20mである。従って、墳丘の略西半を失っている。

なお、墳丘には後世に一字一石経塚が営まれた形跡がある。

(2) 内部主体 (PL. 22・23, Fig. 41・42)

墳丘の西半を失っており、調査時には石材を抜かれた横穴式石室を想定したが、それらしき痕跡はない。南に偏って地山を45cm前後の深さに穿った、3×5mの不整半円形の掘りこみがある。壙底は略水平位にあるが、底面には掘りこみ等は一切認められない。位置ならびに形状からみて、本墳の主体構造の一部とするには疑問があり、その性格は不明である。

墳丘下には、地山を掘り込み、盛土に先行して営まれた2つの遺構がある。第1号遺構は、復元墳丘の略中心に位置する土壌墓である。第2号遺構は、南東側の裾近くに位置している。

内部主体を上記以外に求めるとすれば、盛土中に石以外を用いて築造された場合が想定されるが、現存する墳丘盛土部分にその痕跡はない。従って、一応墳丘の中央に位置すると思われる第1号遺構を本墳の内部主体と考えたい。

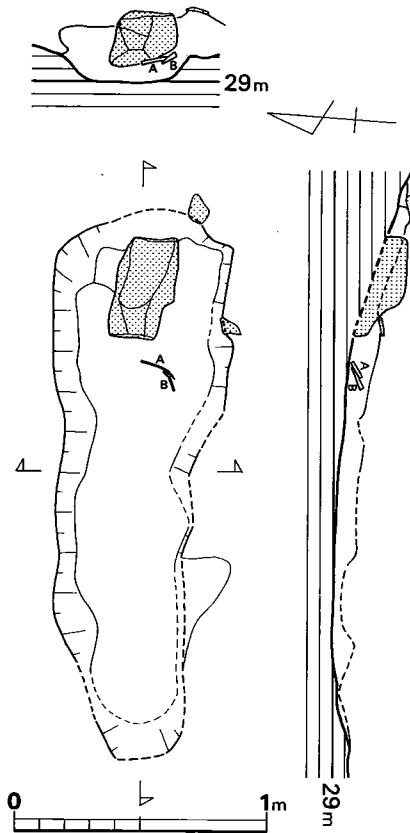


Fig. 41 西尾山第3号墳墳丘下第1号遺構実測図 (1/30)

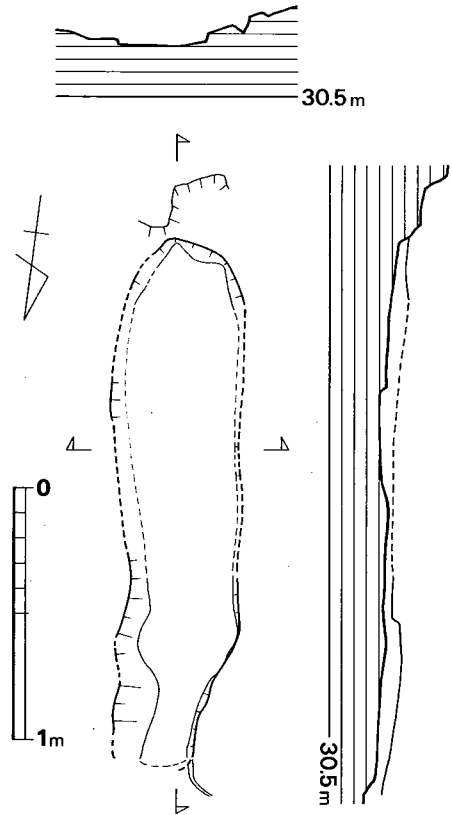


Fig. 42 西尾山第3号墳墳丘下第2号遺構実測図 (1/30)

**墳丘下第1号遺構** (PL. 22・23-1, Fig. 41)

主軸を略東西にとり、東側が稍巾の広い不整長方形プランを呈する。上端長は215cm、同巾

は70~37cmであり、床面長は189cm、同巾は55~34cmである。深さは10cm内外と極めて浅く、壙底は東西の両端が高くなっている。東端近くの上縁の2ヶ所と床面に粘土塊がある。

東端近くの床面より若干浮いた状態で、鉋(A)と短刀(B)が各1口が出土した。鉋は東に、短刀は西に各々鋒を向けている。

上記からみて、東側に頭位を置いたとみられる。

### 墳丘下第2号遺構 (PL. 23-2, Fig. 42)

主軸を略南北にとり、南側が稍巾広の不整長方形プランを呈する土壙状遺構である。上端長は約2.1m、同巾は52~34cm、床面積は約2m、同巾は42~16cmである。壙壁の立ち上りは僅かである。壙底は若干南側が高い。

出土品は皆無である。

### (3) 出土遺物

#### 鉄器 (PL. 29, Fig. 43)

##### 鉋 (A)

2片となっている。刃物には若干の裏スキがある。

巾9mm強、厚さ2mm強。

##### 短刀 (B)

鋒と関部とを欠く。現存茎部に目釘孔は見当らない。

茎の一部に布が銹着している。

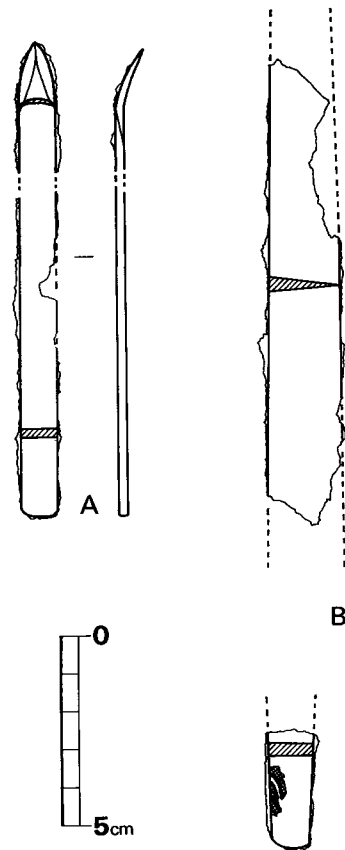


Fig. 43 西尾山第3号墳墳丘下第1号遺構出土鉄器実測図 (1/2)

## 5. 小 結

3基とも大破しており、その実態には不明点が多い。

第1号墳での埴輪の樹立は、墳丘がさして大型ではない円墳であるだけに稍意外であった。県内における埴輪列の全面調査例は皆無で、位置・樹立法等の実態の細部は不明である。部分的に調査された例としては、福岡市南区・老司古墳、八女市・岩戸山古墳等がある。両墳とも県内では屈指の大型前方後円墳であり、老司古墳では後円部の中段?に「多くは60~70cm」

(註1) 岩戸山古墳では、前方部北側縁上段には接するばかりに密に(註2) 前方部周堤頂部には「70~80cm」(註3)の間隔で樹立されている。

第1号墳では、上記両大型前方後円墳と比較すれば、その間隔は疎であり、また、樹立本数が少ないとみられるにもかかわらず形態が多様であることが注意される。

次に主体の構造であるが、第1号墳の石室は図示した甕(Fig. 24-1)の所属型式からみて5世紀に遡る古式の単室横穴式石室と推定される。一方、第2号墳の石室は、北西側に開口する竪穴系横口式石室である可能性がある。とすれば、須恵町・乙植木第1号墳(Fig. 2-15 註4)とともに当該地域における最古の横穴式石室の一つとなる。竪穴式石室であるとしても、須恵器を伴出しないことからみて第1号墳に先行するものと見做される。

第3号墳の主体を第1号遺構——土壙墓とすると、墳丘に対して稍貧弱な感を受ける。裏粕屋の古賀町・川原庵山第5~8号墳では、いずれも礫床をもつ組み合わせ式木棺を主体とし、須恵器を伴わずに工具・武器類を若干副葬しており(註5)、第1号遺構と共通するものがある。

上記を勘案すれば、尾根筋のより高所にある第3号墳から、第2号墳、第1号墳と順次下方に向って築造されたと推察される。そしてこれらの営造期は、大略5世紀中葉から半世紀の間に比定されよう。

第1・2号両墳裾部の遺構は、前者では略周溝内に、後者では墳丘を中心とするかのような位置にある。従って、両墳丘に先行するものではないと思われる。墳丘構築との先後関係が判明しているのは、第2号墳墳丘を切っている第8号遺構のみであるが、これに東接する第7号遺構もまた同様と思われる。ただし、時間差は不明である。

第2号墳裾部第5号遺構は、火葬墓を思わせるものがあるが速断し難い。

第2号墳裾部第3号遺構出土土師器は、須恵器伴出以前の形態であり、第2号墳と大略同期とみることも可能である。

上記以外については、果して遺構であるか否かをも含めて、不明点が多い。

- 註 1 九州大学文学部考古学研究室編『老司古墳調査概報』1969年
- 註 2 波多野皖三・小田富士雄「筑後・岩戸山古墳新発見の埴輪列，石製品の調査」  
〈九州考古学 20・21〉1964年
- 註 3 九州大学文学部考古学研究室編『岩戸山古墳』1972年
- 註 4 福岡県教育委員会編『福岡県粕屋郡須恵町所在遺跡の調査』  
〈九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 X〉1977年
- 註 5 福岡県教育委員会編〈九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 IV〉1972年，  
〈同 X X I〉1978年

# 図 版

(西尾山古墳群の調査)

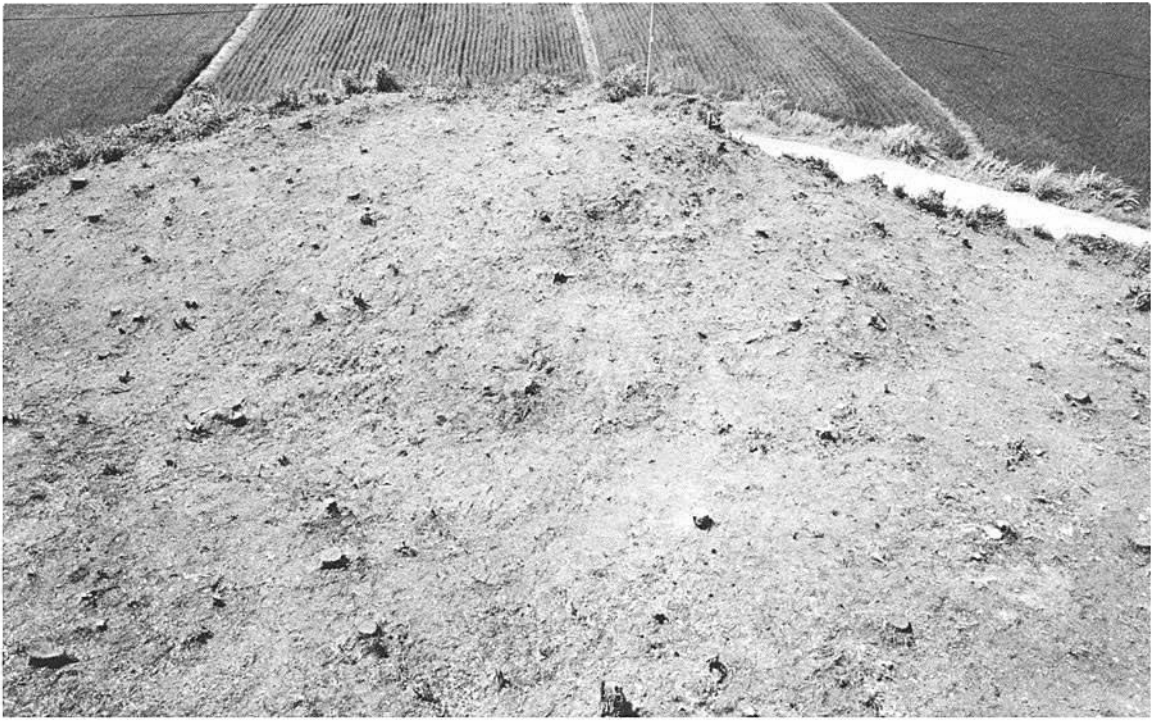




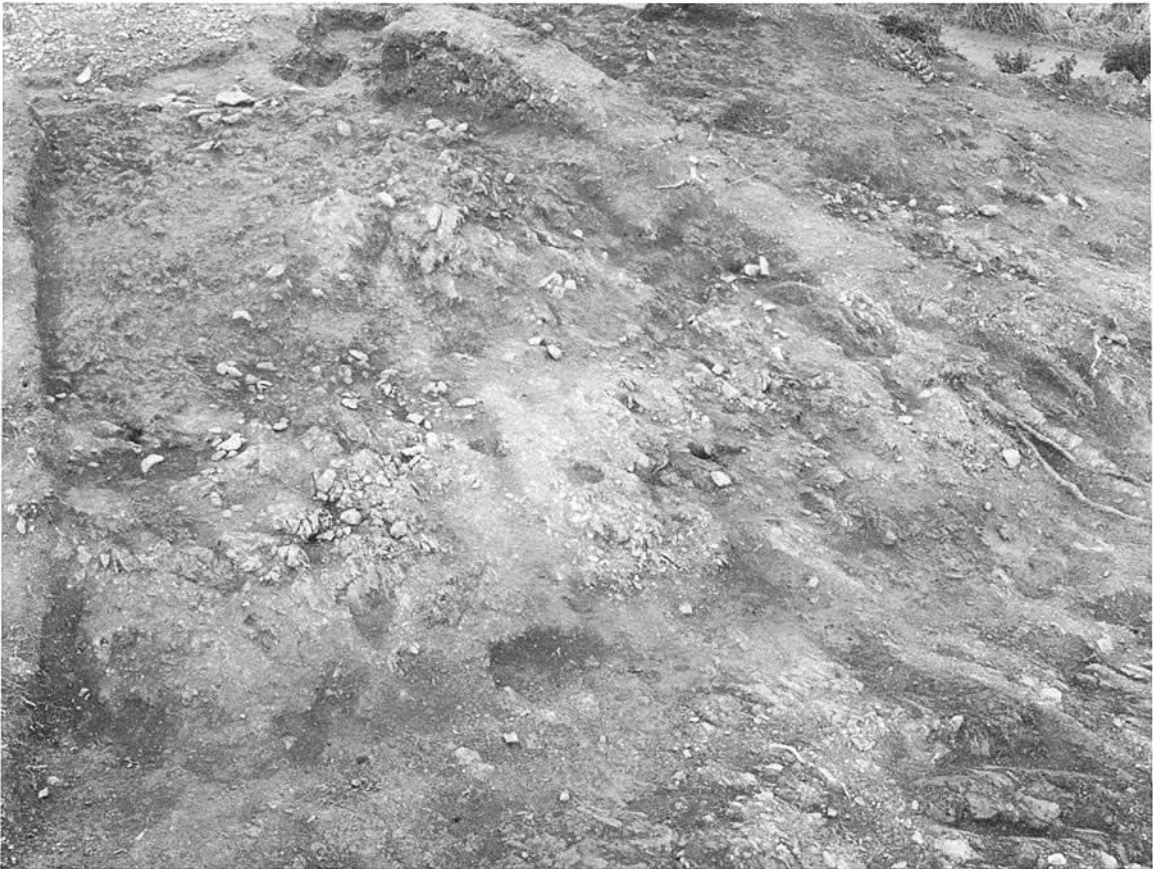
1. 西尾山古墳群遠景（左側の丘陵は、福岡市・蒲田遺跡）



2. 西尾山第1～3号墳全景（右前方丘陵は、福岡市・蒲田遺跡）



1. 西尾山第1号墳墳丘全景



2. 西尾山第1号墳墳丘東側周溝と植輪列



1. 西尾山第1号墳埴輪樹立状態1



2. 西尾山第1号墳埴輪樹立状態2



1. 西尾山第1号墳石室の礎床



2. 西尾山第1号墳石室鉄器出土状態



1. 西尾山第2号墳墳丘全景



2. 西尾山第1・2号墳全景



1. 西尾山第2号墳周溝



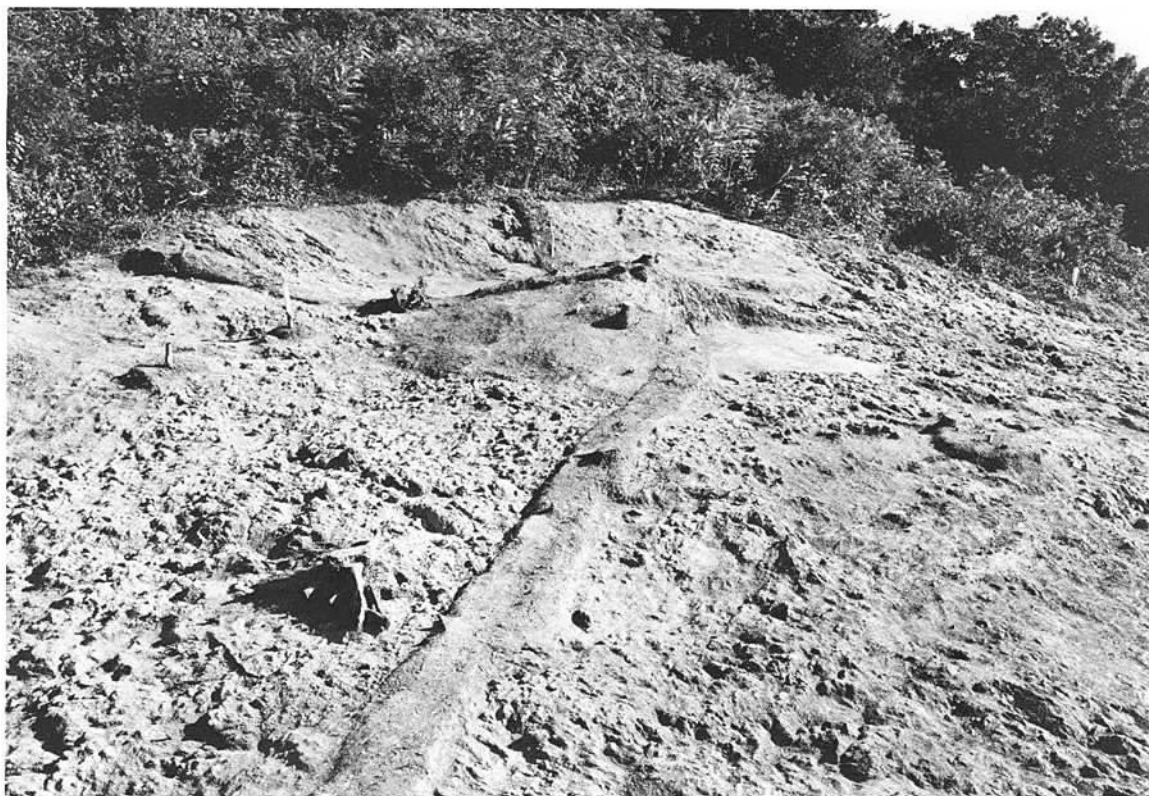
2. 西尾山第2号墳石室遺存状態



3. 西尾山第2号墳石室石材据付痕



1. 西尾山第3号墳墳丘全景



2. 西尾山第3号墳周溝と墓城



1. 西尾山第3号墳の地山成形  
状態と墳丘下の遺構群

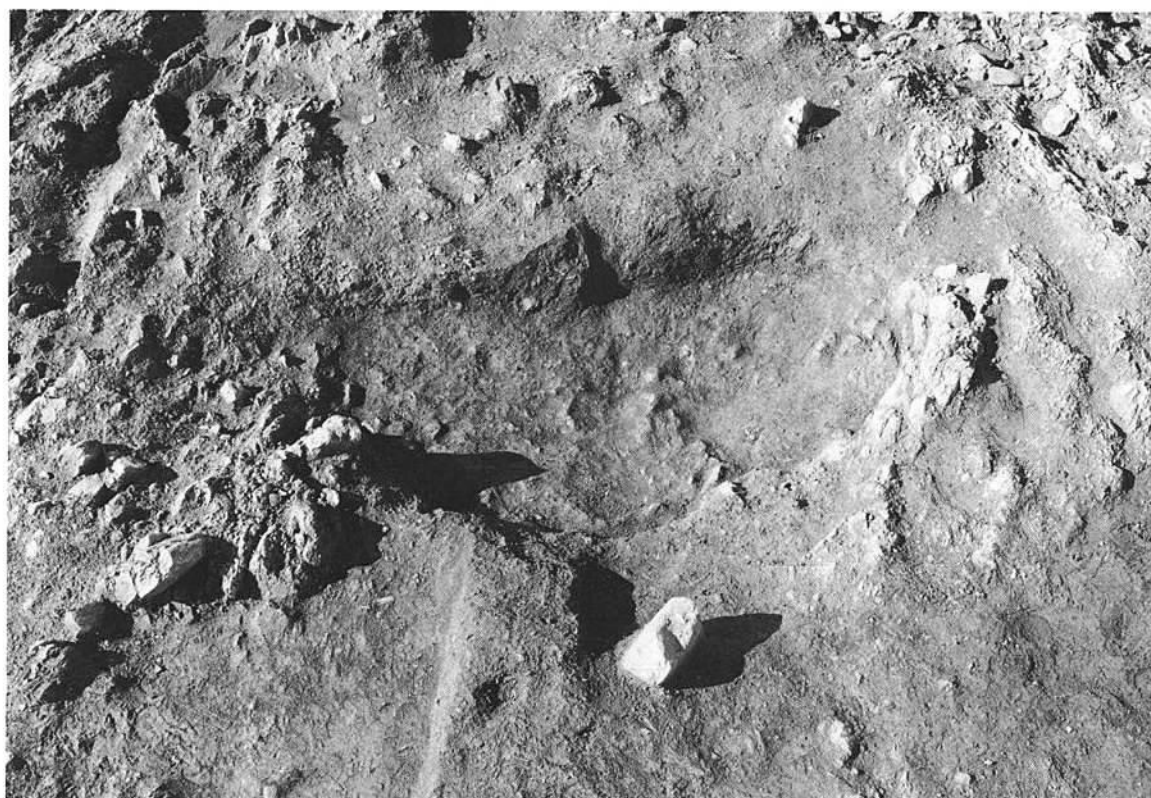


2. 西尾山第3号墳墳丘下第1号遺構





1. 西尾山第3号墳墳丘下第1号遺構鉤出土状態



2. 西尾山第3号墳墳丘下の第2号遺構



1. 西尾山第1号墳裾部第1号  
遺構



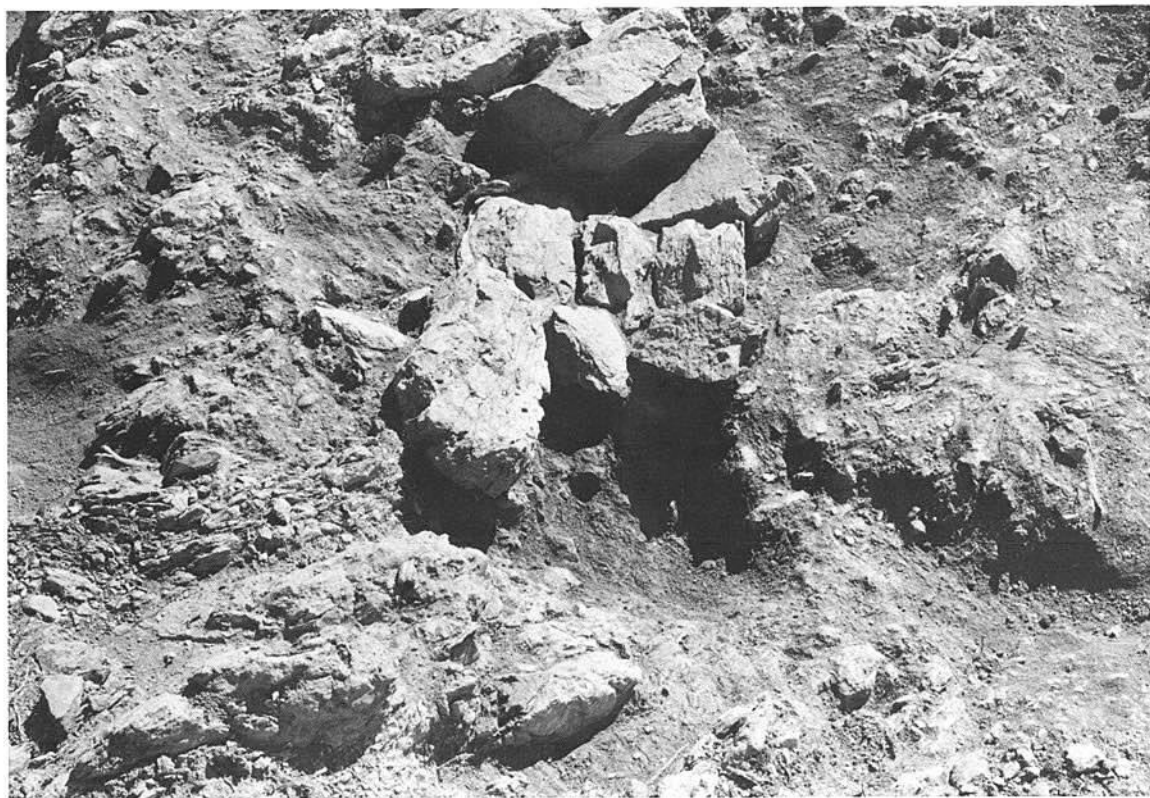
2. 西尾山第1号墳裾部第2号  
遺構



1. 西尾山第1号墳裾部第3号遺構



2. 西尾山第2号墳裾部第1号遺構(右)と第2号遺構(左)



1. 西尾山第2号墳裾部第1号遺構



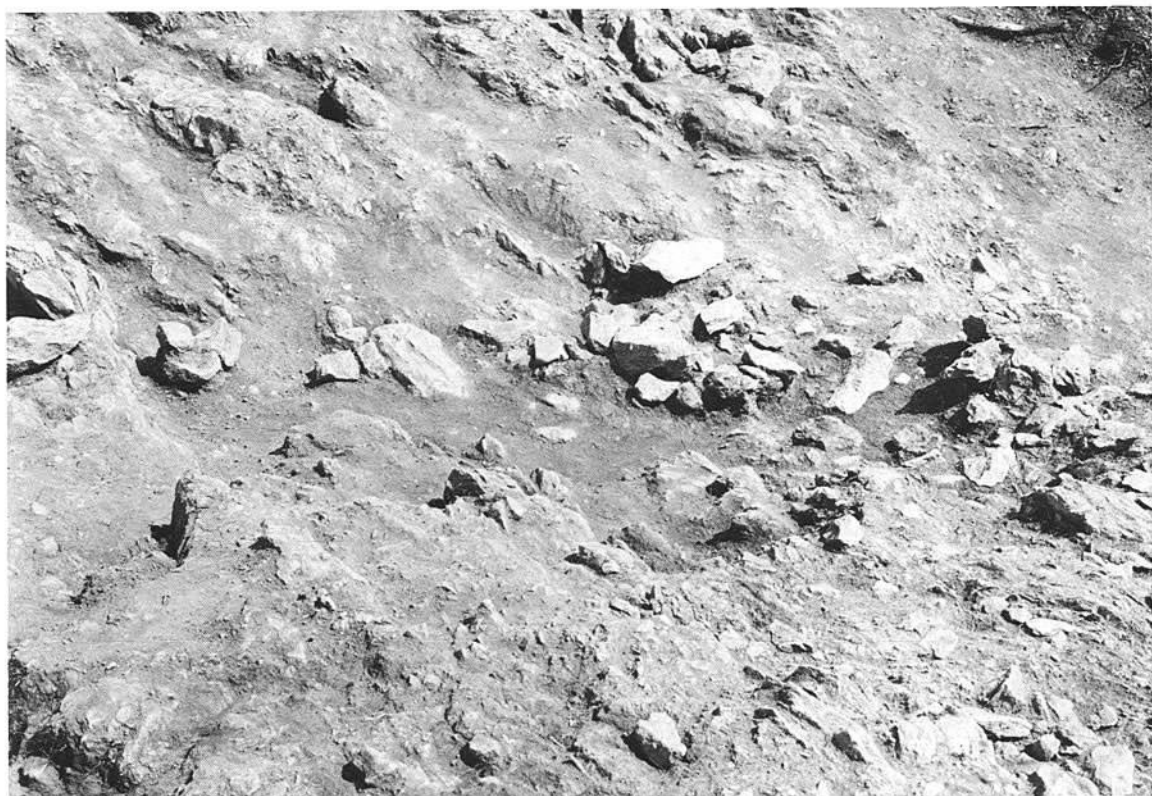
2. 西尾山第2号墳裾部第4号遺構



1. 西尾山第2号墳裾部第5号遺構 (西から、黒く見えるのは炭化物)



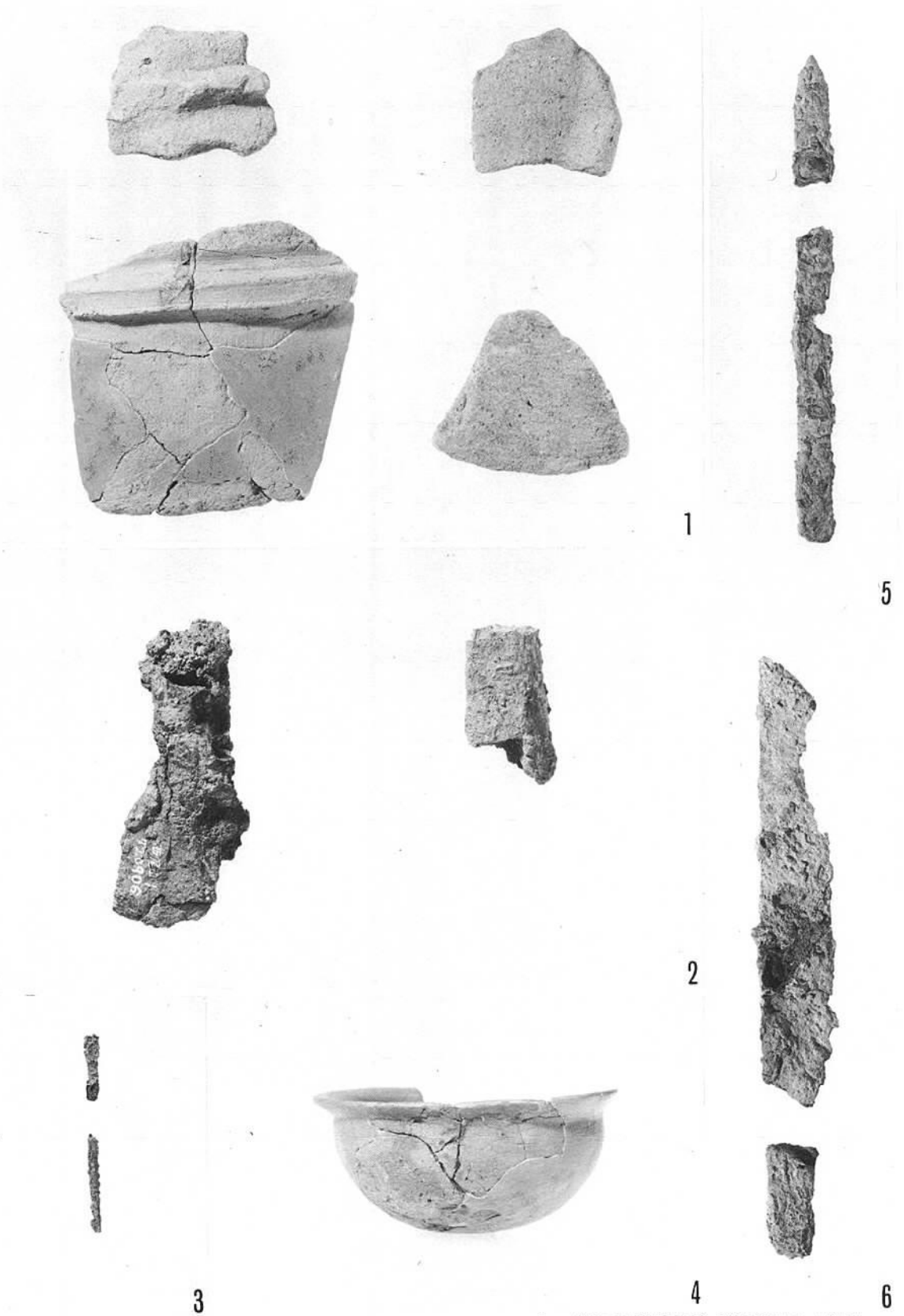
2. 西尾山第2号墳裾部第5号遺構 (東から、炭化物・炭除去後)



1. 西尾山第2号墳裾部第6号遺構



2. 西尾山第2号墳裾部第8号遺構



1. 第1号墳出土埴輪  
 2. 第1号墳出土鉄器  
 3. 第1号墳出土鉄器  
 4. 第2号墳裾部第3遺構出土土飾器  
 5. 第3号墳墳丘下第1号土城出土鉄器  
 6. 第3号墳墳丘下第1号土城出土鉄器

西尾山古墳群出土遺物

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—XXX—

昭和54年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市中央区西中洲6番29号

印刷 栄光印刷株式会社

福岡市東区箱崎下入道800